新しい保健学習のモデル

●中学校における課題学習、授業書方式、ライフスキル学習●



財団法人　日本学校保健会

ま え が き

近年における都市化、情報化など社会環境や生活様式の変化、少子化などが子供の身体的活動・遊びの減少、食生活の変化、精神的負担の増大、人間関係の希薄化などをもたらし、さらには家庭や地域の教育力の低下をもたらすなど子供の心身の健全な発育・発達に様々な影響を与えています。このような複雑、多様化している子供の心身の健康課題に対応するとともに、生涯にわたって健康で安全な生活を送るための基礎を培うため、学校における健康教育、とりわけ、「生きる力」をはぐくむ視点を重視した保健学習の充実が望まれています。

今次の教育課程の改善においては、児童生徒が健康の大切さを認識し、自らの健康を管理し、改善していくような資質や能力の基礎を培い、生涯を通じて心身の健康を保持増進するための実践力を育成することを目標に、新たに小学校の中学年から保健領域を設定するなど、保健学習の充実が図られています。

このような中で、各学校における保健学習の充実を図るため、前回の「保健学習推進委員会」では、中学校の保健の課題学習の授業分析、授業研究を中心に、よりよい保健学習の在り方を追求し、平成11年２月に、「保健学習推進委員会中間報告書～中学校の保健学習のモデルの検討～」を作成し、公表したところです。

本書は、その中間報告書を元に、新たに小委員会を設置し、約１年間の検討を経て保健学習の改善に役立つ授業のモデルを提示し、中学校の保健学習の充実に資することを目的として、作成したものです。各学校において、保健学習を充実するため活用いただければ幸いです。

末尾となりましたが、本書の作成に当たって、研究授業をご提供いただいた新潟県、埼玉県及び大分県の中学校並びにご指導いただきました先生方に心から感謝申し上げます。

平成12年２月１日

財団法人日本学校保健会
会　長　矢野　亨

目　次

Ⅰ いま、中学校の保健学習に求められているもの……1

Ⅱ 課題学習をどう進めるか……5

1 課題学習とその現状における課題……7

2 課題発見と課題設定における教師の支援法
―「喫煙・飲酒・薬物乱用防止」―

1 授業の特徴……9
2 課題発見・設定に関するモデル……10
3 実践例……11
4 課題発見・設定時の教師の支援法……15
5 授業者の感想と評価……20
6 まとめ……21
（資料）……23
【評価班からの評価】……25
（参考文献）

3 課題学習のための準備を重視した単元計画
―「健康と環境」―

1 はじめに……30
2 単元計画……32
3 実践例……33
4 授業者の感想と評価……35
5 まとめ……37
（資料）……39
【評価班からの評価】……47
（参考文献）

Ⅲ 「授業書」による保健の授業をどう進めるか

1 「授業書」方式による保健の授業の特色……53

2 課題学習の導入として「授業書」を使う
ー授業書「<オゾン層>を守ろう!～『宇宙船地球号』と私たち～」ー

1 授業の構想……55
2 授業の計画と実践……57
3 「授業書」と授業実践……58
4 授業者の感想と評価……69
5 まとめ……69
【評価班からの評価】……72
（参考文献）

Ⅳ ライフスキル学習をどう進めるか

1 今日の健康課題とライフスキル学習

1 今日の健康課題と学校健康教育の役割……77
2 従来の健康教育の問題点と改善の方向性……78
3 ライフスキル教育の背景とその有効性……79

2 ライフスキル形成を重視する学習のモデルと実践
ー「喫煙・飲酒・薬物乱用防止」を通してー

1 喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育の授業モデル提示の意義……82
2 喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育の内容構成モデル……83
3 ライフスキル学習のモデル……84
4 実践例……89
5 授業者の感想と評価……95
6 まとめ……97
（資料）……101
【評価班からの評価】……102
（参考文献）

Ⅴ あとがきにかえて

I

いま、中学校の保健学習に求められているもの

いま、保健学習は大きな転換期を迎えている。

「21世紀を展望したわが国の教育の在り方について」を答申した中央教育審議会（平成８年、第一次答申）は、「これからの学校教育のめざす方向」として、「これから求められる資質や能力は、変化の激しい社会を『生きる力』」であるとした。そこでは、「生きる力」を「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」ととらえ、その育成が求められている。

また、「保健体育審議会答申（平成９年）」では、「生涯にわたる心身の健康に関する教育・学習の充実」を図るために、「ヘルスプロモーションの理念に基づく健康の保持増進」を強調している。ヘルスプロモーションとは、「人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセス（WHOオタワ憲章）」であり、健康の保持増進のためには国民一人一人が自らの健康問題を主体的に解決していく能力をもつことを要請するものである。

さらに、その答申では、「とりわけ児童生徒については、薬物乱用、性の逸脱行動、肥満や生活習慣病の兆候、いじめや登校拒否、感染症の新たな課題等の健康に関する現代的課題が近年深刻化している」ことを指摘し、これらの課題への対応を学校教育に求めている。

これらをうけて、中学校の新学習指導要領では、保健分野の目標として、「主として個人生活における健康・安全に関する理解を通して、自らの健康を適切に管理し、改善していくための資質や能力の基礎を培い、実践力の育成を図ること」を示している。

そこに示されている「実践力の育成」とは、「健康・安全についての科学的な理解を通して、心身の健康の保持増進に関する内容を単に知識として、また記憶としてとどめることではなく、生徒が現在及び将来の生活において健康・安全の課題に直面した場合に、科学的な思考と正しい判断の下に意志決定や行動選択を行い、適切に実践できるような資質や能力の基礎を育成することを示したものである（中学校学習指導要領保健体育解説）」としている。

この「健康の保持増進のための実践力の育成」のために新学習指導要領では、教育内容の面からは「中学校における基礎的事項を明確にするとともに、近年の生育環境、生活行動、疾病構造等の変化にかかわって深刻化している心身の健康の課題への対応に重点を置き、心の健康の保持増進、食生活をはじめとする生活習慣の乱れ、薬物乱用防止及び性に関する問題等への対応に関する内容を充実し、新たに生活習慣病の予防及び自然災害等における安全の確保に関する内容を取り扱う（前述「解説」）」などの改訂を行っている。

同様に、教育方法の面から見ると「心身の健康の保持増進にかかわる実践を力を育成するため、単なる暗記や知識理解に止まらず、自ら課題を見つけ、よりよく課題を解決していくような学習活動（課題学習）を展開したり、実験や実習など体験的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を行うとともに、適切な意志決定や行動選択が必要であること」が示されている。

このように、保健学習で「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する力」をつける方法として、課題学習が重視されている。

しかし、保健に課題学習を取り入れようとしても、うまく導入できないという問題が見られ

ることもある。課題学習では、生徒が「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決しよう」とすることが重視される。そのため、課題学習を保健に取り入れようとするならば、事前に、生徒が自分なりの意見や疑問をもち、それを表明できるような授業、生徒の好奇心を引き出し、主体的に乗り込んでいけるような授業を行い、生徒が課題学習に取り組める意欲と力をつけておくことが必要である。

また、新学習指導要領では、「喫煙、飲酒、薬物乱用」などの内容において、「そのような行為は個人の心理状態や人間関係、社会環境が影響することから、それらに適切に対処する必要があること」など保健学習で保健行動についての心理社会的要因の理解とともに、意志決定や行動選択できる資質や能力の基礎を育成することも期待されている。

「適切に対処する」ためには、友人からの薬物の勧めに対して断わったり自分の意志を適切に伝えることのできるコミュニケーション能力など、具体的に対処できる技能（スキル）が必要となる。そうしたスキルを育てる方法の一つとして、最近よく使われるのがロールプレイングなどの実習である。このことは、保健での実習のとらえ方が単に「応急手当の実習」に留まるものではなく、生徒が主体的に活動するために多様な実習の開発が期待されていることを示している。

このように、生徒に「健康の保持増進のための実践力の育成」を図るためには、従来多く見られた知識の伝達・暗記を中心とした教育から、生徒が課題をもちそれを追究する過程を中心とした学習へ、常に教師が問題を提示し生徒が答えるという教育から生徒が問題を見つけたり気づいたりする学習へ、教師主導の「教育」から生徒が自ら活動する学び手主体の「学習」へ、など保健学習のパラダイムを大きく転換しなければならない。生涯にわたる健康を考えるためにも、また現場の保健学習の充実を図るためにも、この新しいパラダイムにたつ保健学習の開発がのぞまれている。

本書は、この意図の下に、生徒が主体的に学習し実践力を形成するための種々の授業モデルの案を作成し、授業実践による実証的検討を踏まえ、実践に役立つ授業モデルの提示を試みたものである。先生方の追試やさらなる実証的検討により、このモデルがさらに改善され、中学校の保健学習に寄与できることを願っている。

Ⅱ

課題学習をどう進めるか

1 課題学習とその現状における課題

課題学習とは、生徒が自ら課題を発見し（あるいは自分のものとし）、解決の方法を考え、解決していくというスタイルの学習を指す。「生きる力」、すなわち、単に過去の知識を記憶しているということではなく、初めて遭遇するような場面でも、自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力を育てるために注目された学習形態といえ、保健学習に限らず、すべての教科で取り組まれている。生徒の主体性を重んじるという意味では、系統学習的な授業のあり方、特に、情報伝達型の授業への反省が前提にあると考えられるが、単に過去の問題解決学習が復活したわけではなく、「学習素材を経験的な具体生活に限定しない」「主観的な認識のみを重視するのではなく認識の客観性をも重視し、それと子どもの主体的な能動活動とを統一する」などの改善が行われていると考えるのが一般的である。

課題学習においては、次の３つの学習段階に分けて考える場合が多い。

課題を発見する段階では、何を追究するのかを生徒が主体的に決定する。その際、生徒がどのくらい課題に対して関心や意欲を持てるかが重要な意味を持つ。なぜなら、課題学習は主体的な学習スタイルであるため、すべての段階において、生徒の関心や意欲が活動の原動力になるからである。また、先に述べた過去の問題解決学習への反省を踏まえると、課題自体が追究に足る価値を持っているかどうかも問われる。

課題を追究する段階では、解決の方法を探し、試行錯誤を繰り返しながら課題の解決を目指していく。この段階では、生徒ができるだけ多くの可能性を検討した上で、生徒なりの評価を実施しながら取り組んでいけるかが重要といえる。

まとめる段階では、得たものをまとめ、必要に応じて、他の生徒と共有できるように発表会などを行う。ここでは、自分たちの経験を整理した上で、できる限り一般化することが重要といえる。また、得たものを表現するという経験も大切である。

いずれの段階でも、生徒同士のディスカッション、調査（文献調査も含む）、実験、実習などの能動的な学習活動が重視され、教師には、結果を直接与えるというより、生徒なりの結果が得られるような側面からの支援が求められる。

一方、課題学習の現状を見るならば、いくつかの課題を見つけることができる。

まず、課題を発見する段階では、課題を主体的に発見させるとしながら、それだけの準備が生徒にないため「価値の乏しい課題を選んでしまう」「結局は教師からのお仕着せの課題を『発見』し、したがって意欲もわかない」などがある。次に、課題を追究する段階では、課題が不適切なため、あるいは、生徒の課題追究の準備が不十分なため、「百科事典の丸写しなどの不十分な課題の『解決』の仕方をしてしまう」などの問題が存在する。最後に、まとめの段階では、発表会等に時間を使う割には、集団の学習が共有されていない、基礎・基本ともいえ

るような知識さえ欠如したまま学習が終了してしまうなどの問題があげられる。

また、保健学習の独自性をどのように課題学習へ打ち出していくかということも考慮すべき課題であろう。

保健学習において、課題学習の良いところを生かし、定着させていくためには、教師自身がこのような課題を解決していくことが必要だといえる。

2 課題発見と課題設定における教師の支援法 —「喫煙・飲酒・薬物乱用防止」—

1 授業の特徴

課題学習は、新学力観に立つ保健学習を進める方法として注目されてきた。しかし、課題学習の実施に際しても時間の制約は避けられない。よって、時間数や単元の設定について現実的に計画することが求められる。

本授業では、現実に実施可能な課題学習の進め方について検討した。中でも、課題発見と課題設定における教師の支援法を明らかにすることを中心に研究した。この段階を重視したのは、どのような課題を設定するかが課題追究以降の展開に大きく影響するからである。追究に値する課題を設定するためには、教師の支援が欠かせない。

支援は、生徒の自主性を保証するものでなければならないが、放任に留まるものであってはならない。本授業では、このような支援法について具体的に明らかにすることを試みた。また、価値ある課題を設定するためには、設定の前段階として、生徒の関心や疑問を幅広く引き出すことが必要と考えられる。そのための支援法についても検討した。

本授業の特徴をまとめると、以下のようになる。

①課題学習の対象は、該当する単元（疾病の予防）のすべてではなく特定の内容（小単元）とする。他の内容は精選し、教科書に沿った講義型授業により短時間で進め、単元全体は必要な時間内で終わらせる。

②課題学習の「課題発見・設定」において、課題に関する生徒の関心や問題意識（レディネス調査結果）を活用する。また、保健学習における課題学習の経験を活用する。

③早期の段階において追究に相応しい課題が設定できればよいが、追究計画の立案や課題追究の過程で課題が変更されることも少なくない。また、追究の途中においても、新たな課題が発見されたり、関連する課題が明らかになることも多々ある。そこで課題の設定に柔軟性を持たせ、追究計画の立案時や追究時においても、課題の変更が小さなものであるならば、それを認める方向で支援する。

2 課題発見・設定に関するモデル

図１には、課題学習の過程に関連して、指導上の注意事項と支援のポイントを示した。

事前準備では、生徒が課題を考えるきっかけとなるような資料を準備することが重要であり、学習活動計画を立案するとともに、レディネス調査により生徒の関心等を調べることが必要である。課題発見では、課題について拡散的に考えさせることが必要であり、課題設定では追究の意欲を促す課題を設定することが大切である。

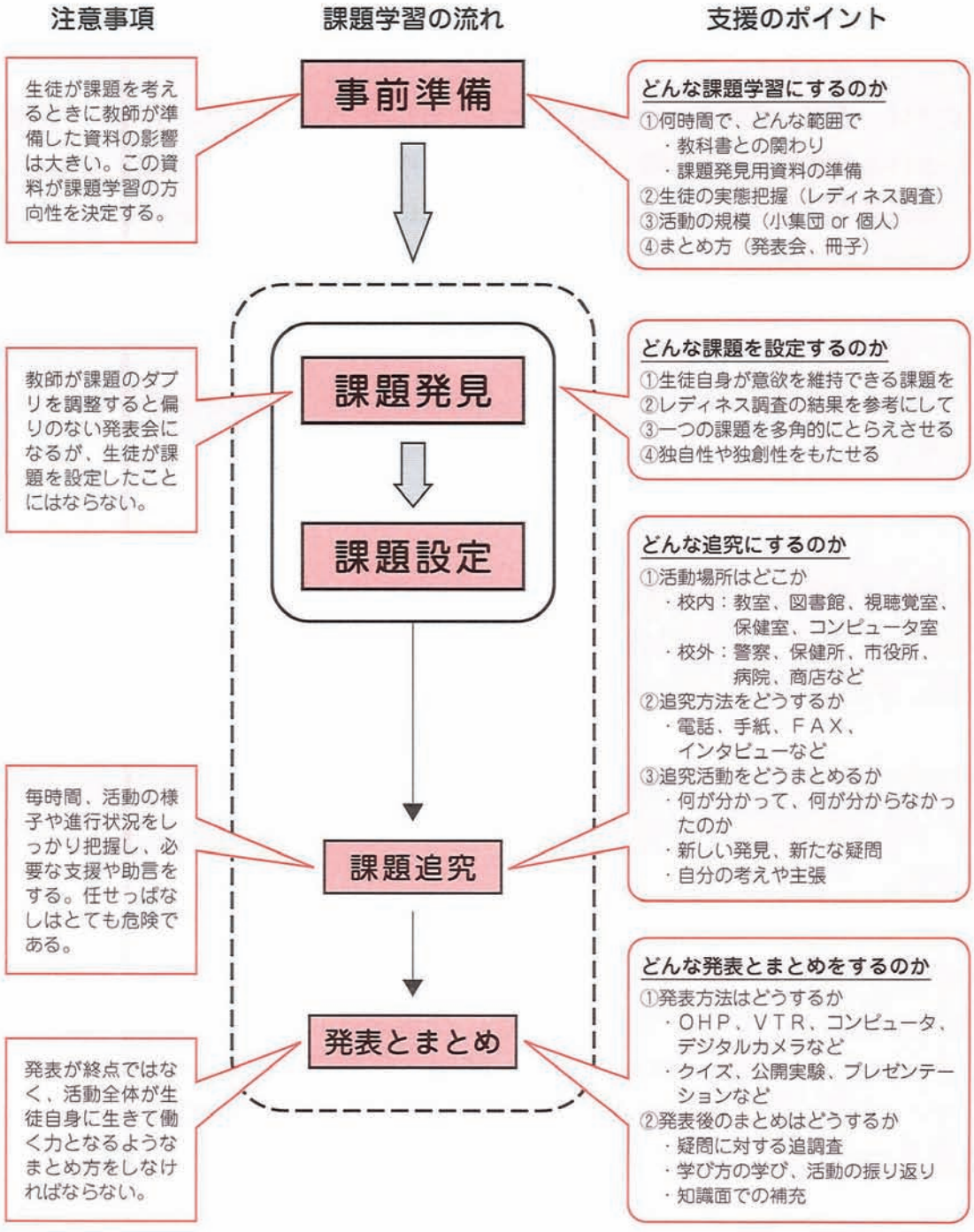


図１　課題学習に入る前に教師が活動全体をイメージするためのフローチャート

3 実 践 例

ア 研究授業に関する基礎的データ

（ア）研究校：新潟市立寄居中学校

（イ）授業時期：平成10年５月～６月

（ウ）授業対象：中学３年生１クラスに８授業時間

（エ）単元：病気の予防

イ 指導計画「喫煙・飲酒・薬物乱用と健康」（課題学習：全８時間）

時	学習活動	評価規準	備考
1	◆課題発見 ○課題学習の進め方やねらいを知る。 ○グループごとに、課題学習資料や教科書を参考にして課題のもととなるテーマを見つける。	評価規準（関心・意欲） ・健康に関心を持ち、話し合いや提示された資料の中から自分の研究のテーマを見つけだそうとする。	・課題学習のレディネス調査は事前に終わらせておく。
2	◆課題設定 ○課題学習でのグループの課題を設定する。 ・設定された課題の自己検証 ○課題追究の進め方を検討し、情報入手の方法、調査方法、実地体験の方法を考える。 ・いつ、どこで、誰が、何を、どのように ○まとめ方や発表の仕方を考える。	評価規準（思考・判断） ・喫煙、飲酒、薬物について、いろいろな角度から考え、自分なりの課題を設定できる。	・週１時間のペースで進める。 ・グループの話し合い活動を中心に進める。
3 4 5	◆課題追究 ○グループごとに学習計画に沿った追究活動を行う。 ・関係機関に質問の手紙や電話、FAX、インタビューなど ・活動場所はグループで自由に決める。 校内：教室、図書館、視聴覚室、コンピュータ室、保健室 校外：警察、保健所、役所、病院、会社、商店、関係機関 ・発表方法を意識してまとめ方を工夫する。 ・発表会の準備、リハーサル、必要物品	評価規準（思考・判断） ・自分たちなりの主張を盛り込んだ情報発信になるよう工夫できる。 評価規準（関心・意欲） ・積極的に自分の考えを述べたり、他人の意見を聞き、課題に対する自分たちの主張をまとめようとする。	・十分な準備期間をおいて追究活動に入る。 ・追究活動は週１時間のペースで進める。
6 7	◆発表 ○「保健研究発表会」を行う。 ・グループごとに発表する。 ・OHP、大洋紙、公開実験など発表方法を工夫する。 ・各グループの紙上発表原稿をまとめた冊子を作っておく。 ・相互評価カードの活用を図る。	評価規準（技能） ・自分たちの課題を健康生活に結び付けて考え、自分たちの主張が入った研究発表をすることができる。	・２時間を連続して行う。
8	◆まとめ ○課題学習全体を振り返る。 ・グループの発表に対する質問への回答 ・教師による知識面の補充 ・課題への取り組み方、発表内容の反省	評価規準（関心・意欲） ・それぞれの発表を通して獲得した知識を自分の将来に生かしていこうという意欲を持つことができる。	・「学び方」についても振り返らせる。

ウ 本時の計画（全8時間扱いの1・2時間目）

時	学習活動	教師の支援活動	評価
	◆課題学習の進め方とねらい ○レディネス調査の結果や前年度の活動から、課題学習の手順や学び方を振り返る。 <レディネス調査の項目> (1)前年度の課題学習時のテーマと追究方法 (2)活動全体を振り返っての良かった点、改善点 (3)「喫煙・飲酒・薬物乱用」について知っていること、関心を持っていること、調べたいこと	○事前に実施したレディネス調査の結果や前年度の課題学習を振り返らせることで課題学習の学び方を確認する。 〔ポイント〕 ・課題を設定した課題はどうだったか。 ・グループで課題学習を進める上で大切なことは何だったか。 ・他教科で行っている課題解決学習や前年度「健康と環境」で行った課題学習と同じような進め方である。 〔具体的な支援方法〕 ・項目ごとにレディネス結果を分類した紙を黒板に貼る。 ・机間指導でなく、黒板を使って全体に話す。	・班討議の様子を机間指導する中で「関心・意欲・態度」の面から個人を評価する。 ☆評価規準 健康生活に関心を持ち、話し合いかや提示された資料の中から自分の研究テーマを見つけだそうとする。 <評価基準> A：健康生活に興味を持ち、進んで意見を出して自分なりの課題を設定しようとしている。 B：課題設定に向けての話し合いに参加し、課題を設定しようとしている。 C：課題学習に対する関心が低いため、話し合いを聞いているにとどまっている。
1	◆課題発見 ○資料（切り抜き新聞）や教科書を参考に興味や関心を持った事柄を話し合う。 ・グループ話し合い活動 ・ワークシートに記入 課題1「資料から興味や関心を持った事柄は？」 課題2「分野別に分けよう」 ・拡大コピー ○他のグループの様子などを参考にしながら、課題になりそうな事柄を話し合う。 ・ワークシートに記入 課題3「課題になりそうな事柄を具体的にしよう」	○机間指導で各グループの話し合いを見取り、ワークシートの課題2までできたら拡大コピーにかけ黒板に貼り出す。 〔ポイント〕 ・資料や教科書を活用しているか。 ・分野別に正しく分けられているか。 ・ある分野が空欄になっていないか。 →視点・視野を広げるよう助言する。 〔具体的な支援方法〕 ・机間指導でグループの話し合いに参加する。 ・資料はグループ分用意しておく。 ○レディネス結果に戻り、「満足できる課題とはどんなものか」を考えさせる。 ○机間指導では、必要に応じてワークシートの課題2や課題1に戻らせ、生徒自身の発想や独自の着眼点を大切にするよう助言する。	Aに対して 追究活動の時間に相応して、自分たちの主張や考えが盛り込めるような課題を設定するよう助言する。
2	◆課題設定 ○前時のワークシートから自分たちの課題を設定する。 ・グループの話し合い活動 ・ワークシートの記入 課題1「自分たちの課題を設定しよう」 ○決まった課題に関する設定理由、仮説、到達目標を考えて拡大コピーをとり、黒板に掲示する。 ・拡大コピー ○追究活動の学習計画を話し合い、今後の見通しをもつ。	○机間指導で各グループの話し合いを見取り、以下のポイントで助言する。 〔ポイント〕 ・前時に掲示した「満足できる課題」のレディネス調査結果を掲示しておく。 ・課題と学び方を検討することで課題の修正もありうる。 ・班の話し合いでは「ここまで知りたい」という到達目標を共通化するように促す。 ・疑問点や修正すべき点に気付いたら、尋ねることで生徒自身に気付かせる。 ○話し合いに参加する中で調査日程や問い合わせ先、まとめ方のヒントを助言する。 〔ポイント〕 ・活動場所、訪問にあたっての手続き ・次の時間から追究活動がスムーズに開始できるよう、ワークシートには具体的に記入させる。 ・話し合いがまとめ方に進んでいるグループには発表方法の工夫とヒントを与える。	Bに対して 班討議で出されたキーワードをより多面的にとらえ、追究活動やまとめにふさわしい課題を設定するよう助言する。 Cに対して レディネス調査を参考にして、「喫煙・飲酒・薬物乱用」の中で興味を持っていることや「学び方」を確認しながら、課題設定に向けて話し合いに積極的に参加するよう支援する。

エ　課題発見・設定時の記録

図２には、事前準備も含めて、主に課題発見・課題設定について教師が行った支援の概要を示す。

事前準備では、課題学習全体の進め方を決め、課題に関わる生徒の知識・興味・関心を把握するためにレディネス調査を行い、その結果から課題発見を支援するためのカルテを作成した。また、生徒が課題発見に活用するための資料を準備した。

課題発見では、課題について幅広く考えさせるため、課題について多面的に捉えさせたり、レディネス調査結果を生徒にフィードバックしたりした。

課題設定では、以上の活動から得られた課題に関する多様なアイデアを参考にして、教師が支援を行いつつ課題を絞らせた。

支援法の詳細は、次項に示した。

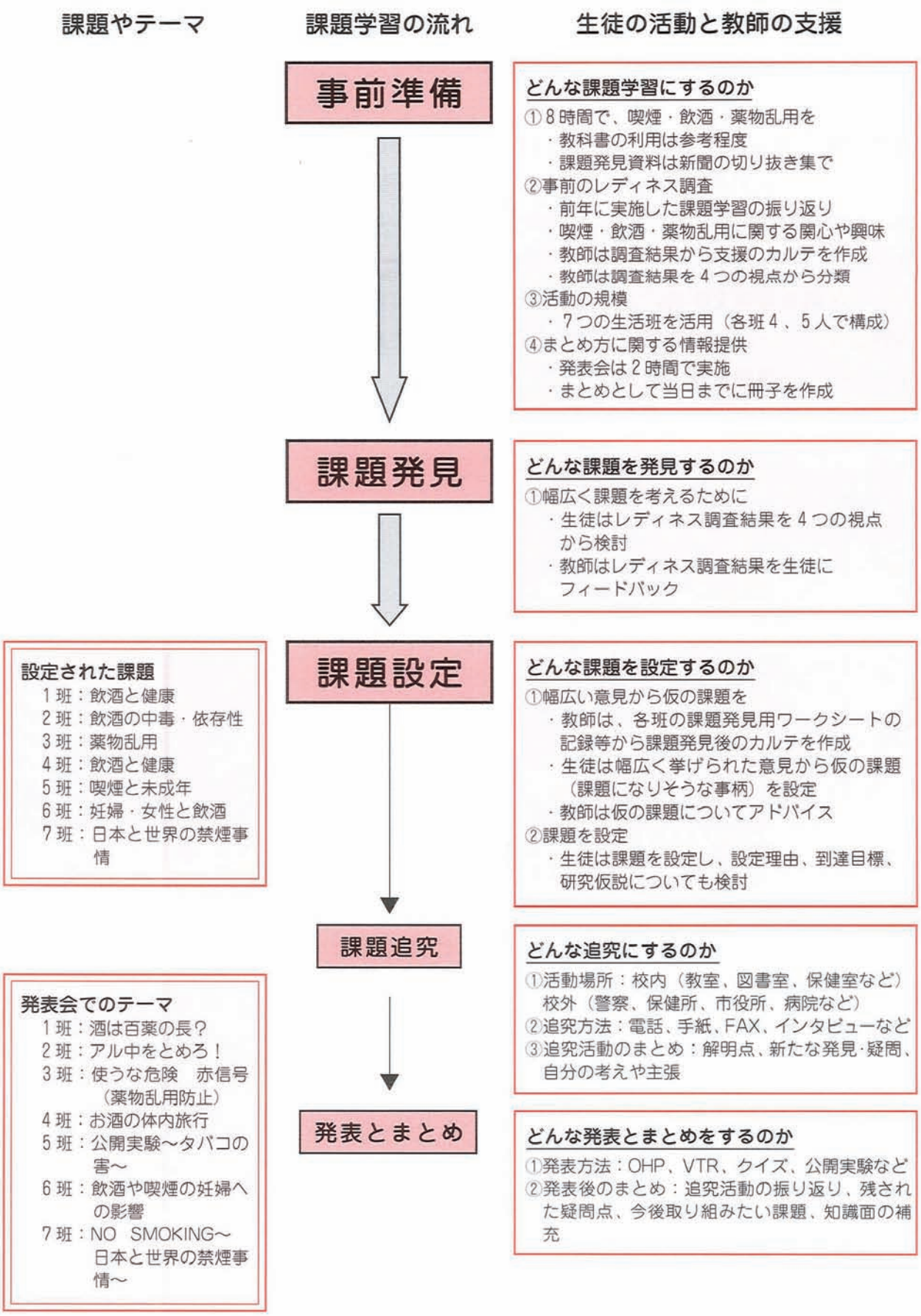


図2　課題発見・課題設定における生徒の活動や教師の支援等の記録

4 課題発見・設定時の教師の支援法

課題学習では、「生徒が興味関心を持ったことをもとに自分たちで課題を設定すること」が望まれる。しかし、その生徒の興味を重要視しすぎるとどうしても課題の捉え方が単調になってしまう。その結果、グループワークにおいては、どのグループも似たような課題を設定してしまうという欠点が予想される。逆に、グループ間の課題をすべて違うように設定すると、教師主導の授業になってしまい、生徒が「やらされている」と感じ、意欲をそぐことになる。

そこで、この2つの矛盾を少しでも解消し、「生徒自身が興味を持って設定し、グループによって特色が見える課題を設定する」ことを本研究の大きな柱とした。

多くの生徒は、「喫煙・飲酒・薬物乱用」について「悪いこと」「法律で禁止されている」と考えている。しかし、その視点は「法律や規則」「自分の意志」といった方向に限られている。さらに、「薬物」というものを身近に考えられない新潟市の中学生では、「薬物乱用」に関する課題設定にとまどいも予想される。

これらの実態を受けて、本研究では生徒がいろいろな角度からとらえて課題を設定できるようにするために次のような工夫をした。

前年度の課題学習の学び方を振り返らせ、またこれから行う単元について生徒の興味関心を教師がつかんでおくためにレディネス調査を行った。

前述のように課題学習では、課題設定の方法が成功のカギを握っていると考えられる。そこで、課題発見時に準備する資料や資料提供の仕方を工夫することを目的に、レディネス調査を行った。さらに、レディネス調査の中で、前年に実施した「健康と環境」で設定した課題とその後の活動やまとめ方を振り返ることで、どんな課題を設定したらよいか、どんな失敗をしたかを今回の課題学習に生かすようにした。このことは、同時に学習の進め方の見通しを持たせることにもなった。

追究した課題のまとめとして、自分たちの考えや主張を入れるよう助言した。

良い課題とは「追究活動の中で自分たちの考えを入れられる課題」だと考える。というのも、どんなに良さそうな課題を設定しても、専門書や辞典などを丸写しして終わっては何もならない。やはり、生徒自身が課題を追究しながらわかったことやさらに疑問に思ったこと、あるいは課題設定時の予想とは違う結論になったという経験が学びの力を伸ばす。また、発表の場面でも「その課題に対して、どう調べ、どんな結論になり、そのことについて自分たちはどう考

え、発表を見たり聞いたりした人にどうしてもらいたいのか」をはっきりさせたものであるべきだと考える。このため、課題設定の場面から、あらかじめ「主張を入れたまとめにする」ことの大切さを生徒に知らせておかなければならない。

課題発見場面で、生徒が、「医学・科学」「社会・経済」「法律・道徳」「自分・個人」の4分野の視点から課題をとらえさせる。

このことを含め、課題設定までの流れに沿った教師の支援は次の通りである。

①事前の準備

・『課題学習資料』で視点を広げるため4つの視点で構成した。

②課題発見場面

・レディネスの結果（「喫煙・飲酒・薬物乱用について考えていることを書きなさい」への回答結果）を4つの分野に分けて紹介した。
・テーマを絞っていくグループ討議のワークシートを4つの視点に分けて書き込めるように構成した。

③課題発見場面終了時

・ワークシートを確認しながら、各グループの構成（リーダーの有無、知的好奇心や意欲の高低、男女の協力性など）に応じて、設定するであろう課題の方向性や、具体的な追究方法、内容を予想、準備し、カルテを作成した。その際、グループ同士の課題の重複について配慮した。

④課題設定場面

・「課題を設定するグループ討議」に対する机間指導では、各グループの構成要素を考えながら、カルテをもとに助言を行った。一つの方向性に固執するグループにはレディネス調査結果を見せたり、より高いレベルに押し上げたいグループには揺さぶりをかけた。
・前時の「課題発見」までは生徒の思考を広げようと工夫してきたが、この課題設定場面では、意図的に方向性を絞るよう助言した。

以上の支援法は、課題に関する生徒の興味・関心、進行状況、グループの特性などに応じて変える必要がある。実例として、代表的な2つの班について、課題に関する興味や関心、それらから課題への発展の経過、および、教師の支援の経過を示した（表1と表2）。表1は課題

があまり発展しなかった班のケース（例１）、表２は課題がうまく発展した班のケースである（例２）。

前者の場合、レディネス調査では多様な意見が出た。しかし、課題発見の当初の段階で多数決によりテーマを薬物と決定したためか、それらの多様な意見が活かされず、課題設定のための興味や関心として広がらなかったようだ（課題発見用ワークシートの記録より）。課題発見後のカルテを見ても、「課題として設定しそうなキーワード」は明確にされなかった。それに対し教師は、生徒の自主性を尊重しつつ「ゆさぶり」をかけたが、課題の方向性が決まるには至らなかった様子である。そこで、教師は方向性についても示唆を与え、最終的には「薬物の怖さについて知らせる」という主張性のある具体的な課題が設定された。

後者の場合、レディネス調査において喫煙に関する意見が数多く見られており、課題発見の段階では、それらがさらに広がっていることがわかる（課題発見用ワークシートの「興味や関心」）。また、課題発見後のカルテによれば、「課題として設定しそうなキーワード」や「課題設定における支援のポイント」が明確になっていた。そのためか、課題設定での教師の支援は、喫煙対策について日本の現状を考えさせたり調査方法を示唆するなど多様なものとなった。それらが生徒の活動を一層活性化したように思われる（「課題設定までの教師の支援（まとめ）」参照）。

表1　課題変遷の例（1）：十分には発展しなかった場合

教師から見たグループの特性	やや消極的なメンバーが多く、リーダーのAもまじめだが知的好奇心は必ずしも高くない。そのため、十分検討せずに課題を設定する可能性があり、また追究活動も浅く終わることが予想される。そこで、単純明快な課題を設定させ、すっきり追究するようにさせたい。
1．レディネス調査結果 （薬物関連部分のみ）	・その時気持ちよくても後で苦しくなるのに、なぜするのか。 ・どんな国から密輸されているのか。 ・シンナーを吸って何が楽しいのか。 ・どうして自分で自分の体をいじめたがるのか。 ・薬物乱用防止の呼びかけが多いが、実際減っているのか。 ・1回使うとやめられなくなる。
2．資料や教科書等からの興味や関心 （課題発見用ワークシートより）	・よっぱらうとよっぱらっていないの境目はどこか。 ・子どものうちはまずいと思ったのに、なぜ大人になると飲めるのか。 ・覚せい剤をのむと、頭がモワーとくるのは、どういうのと似ているか。 ・薬物をやってどうなるか。
課題発見後のカルテ ①取り組もうとしている分野 ②課題として設定しそうなキーワード ③課題設定における支援のポイント	 ①薬物乱用 ②特になし（絞られていない） ③無理に課題を押しつけず「ゆさぶり」をかける。
3．①設定された課題 ②到達目標 （課題設定用ワークシートより）	①「薬物の怖さについて」 ②この学校の生徒に薬物の恐さを教える。
課題設定までの教師の支援（まとめ）	課題発見の話し合いは不活発で、ワークシートを配布した時点で、多数決により「薬物」を課題にすることが決まってしまった。そこで、薬物乱用防止をどのように追究するかをさらに考えるよう助言した。 課題設定では「薬物の怖さ」に注目した。そこで薬物乱用防止の一般的な情報を入手し、自分たちなりに「この学校の生徒に薬物の恐ろしさを知らせる」という活動全体の見通しを持たせた。
4．発表会テーマおよび内容	「使うな危険　赤信号（薬物乱用防止）」 ・薬物の種類 ・体への害～3つの薬物と害～ ・社会への影響 ・初回使用動機 ・感想

部分は教師の支援を示す。

表2　課題変遷の例（2）：うまく発展した場合

教師から見たグループの特性	Bは意欲・理解力とも高く、人望も厚い。またCも課題を多角的にとらえたり、まとめる力を持っている。他のメンバーも協力的で、少々難しい課題を設定しても十分にまとめることが期待できる。そこで、どんな課題を設定しても、さらに高い次元に持っていくよう支援したい。
1．レディネス調査結果 （喫煙関連部分のみ）	・なぜ人はタバコを吸いたがるのか。体に悪いことと知っていながらなぜ吸うのか。 ・喫煙は、吸っている人よりも周りの人の体に悪い。 ・タバコの中身は何？ ・どうして20歳から吸ってよいのか。 ・タバコの煙に含まれているもの。 ・喫煙による病気の怖さ。
2．資料や教科書等からの興味や関心 （課題発見用ワークシートより）	・7割の人が小、中学生の時から喫煙している。 ・タバコは麻薬と一緒である。 ・タバコを吸っていいことはないのか。 ・タバコ対策に政府が力を入れた。
課題発見後のカルテ ①取り組もうとしている分野 ②課題として設定しそうなキーワード ③課題設定における支援のポイント	 ①喫煙 ②世界禁煙デー、間接喫煙 ③社会・経済的側面からの課題追究に意欲がある。
3．①設定された課題 ②到達目標 （課題設定用ワークシートより）	①世界の各国と日本の喫煙対策の比較 ②日本と比較して世界の喫煙対策はどのようにしているのかをみんなに知ってもらう。
課題設定までの教師の支援（まとめ）	課題発見で「世界禁煙デー」に注目した。他のグループにはなかったので、課題に取り上げるよう働きかけた。課題設定では、諸外国ではかなり以前から公共の場での禁煙が徹底されているが、日本はどうかを考えさせた。さらに、交通機関での禁煙状況を調べてはどうかと助言したが、反応はなかった。また、ALTへのインタビューを通して、国民の禁煙意識の比較ができるのではないかと助言した。 それらの助言を通して、話し合いが活発になった。後半の学習計画では、「厚生省に聞く」という意見が出たが、的を絞れないと考え、聞きたい内容をはっきりさせたうえで、県庁や市役所、保健所に聞くよう助言した。
4．発表会テーマおよび内容	「NO SMOKING 日本と世界の禁煙事情」 ・強力に推進されている諸外国の喫煙対策 ・広告規制の比較 ・非喫煙者のための保護対策 ・世界禁煙デーについて

部分は教師の支援を示す。

5 授業者の感想と評価

本授業を含むこれまでの実践から、「課題学習において、課題発見場面が成功のカギを握っている」ということを痛感してきた。それは、見栄えのいい研究冊子を作ったり、参観者から拍手を浴びるような発表会を持ったりすることよりも、生徒自身が活動全体を通してその課題に正面から対峙できたかということの方を大切にしなければならないという実感を持ったからである。研究冊子や発表会の体裁は教師の強引なまでの支援によって作ることが可能だが、それが課題学習の成功とはいえない。

「良い課題」とは生徒が追究やまとめの活動まで意欲を持続し続けることができる課題のことである。この「良い課題」を生徒自身の手で発見し、自分たちなりに設定することによって、それ以降の活動に対して意欲を持ち続けられるのである。すなわち、教師にとって、生徒が「良い課題」を発見し、設定できるような支援をすることが重要である。

課題学習を始める前に、まず生徒の実態把握のためレディネス調査が必要である。ここでは既習の内容を確認したり、これから取り組む課題に関する予備知識がどれくらいあるかということよりも、その課題についてどんな興味・関心を持っているかを教師がつかんでおくことに主眼をおきたい。課題に対する生徒の興味・関心をつかんでおくことは課題設定場面でのグループの話し合いに対してその方向性を修正したり、思考の流れをゆさぶったりするためのヒントとなる。

もう一つのポイントとしてカルテの必要性を感じている。教師としてよりよい支援を考えたり、グループの追究活動を円滑に進めるために場面ごとのカルテを準備した。このカルテとは、レディネス調査結果の集約から始まり、前の時間や前の場面までの様子を記録したワークシートをもとに、活動の様子や支援の方法について事前に予想しておくものである。これは期待以上に教師の支援を的確なものにし、グループの実態に即した助言や方向修正を容易なものにする効果があった。本授業では、「レディネス調査のまとめ」「課題発見後」「課題追究」「発表会用」と段階を追ってカルテを作成した（一部を除き、P.23、24に掲載）。

中でも課題設定場面では、課題を発見しようと考えを出し合いながらも、逆に行き詰まってしまっている時に、その様子を見極め、カルテをもとに有効な助言をすることができた。また、レディネス調査結果を見ることで課題発見の方向修正をしたグループもあった。このように、カルテを使うことで、課題設定場面では「生徒自らが課題を設定した」といえる実感を持たせるような支援が可能になった。さらにカルテの活用によって、発表場面では、グループの発表内容を補足するエピソードの紹介や補足説明などを行なうこともできた。

本授業から今後の課題として、他学年での実践、インターネットなどを使った情報収集、発表形式の工夫、総合的な学習の時間へのリンクが考えられる。また、小単元から単元全体を範囲とする研究まで多様な実践を集約していくことが大切である。

6 まとめ

ア　課題学習前の準備について

・課題学習を実施する前に、①生徒の興味・関心　②課題学習の経験についてのレディネス調査は必要である。また、その結果を生徒にフィードバックすることは、課題発見に有効である。

・限られた時間の中では、課題設定に関わる資料は、生徒自身に収集させるよりも教師が準備することが有効である。教科書も資料の一例として考えられるが、情報量等の点で十分とは言えない。

・資料集の内容については、生徒の興味・関心を刺激するために、細かな内容よりもタイトル的なもの（例えば、新聞記事に見られるようなもの）がよいと考えられる。

イ　課題学習の必要時間数

・生徒の評価結果によれば、課題発見と課題設定に各々１時間程度、課題追究に数時間程度、課題発表に１グループ15分程度必要である。

ウ　ワークシート等の活用について

・ワークシートは、生徒に、課題発見から追究、まとめの手がかりを与えるものとして、また教師は授業の見通しを立てるものとして有用である。

・ワークシートを拡大コピーして掲示したり、コピーを他のグループに配布したりすることにより、その内容についてクラス全体で意見交換することができる。

・生徒の疑問や興味・関心を課題にまで発展させるための工夫として、例えば、次のような方法も考えられる。

①ブレインストーミング法を用いて、疑問をどんどん挙げ、カードに記入させて課題を絞り込んでいく。

②レディネス調査の結果を参考に、悪い課題にならないための最低条件を明らかにして、チェックリストカードにして生徒に返す。

エ　グループ活動について

・授業のグループ編成では、効率性を考えれば生活班を活用することが無難と考えられる。その理由は以下の通りである。

①課題学習は保健学習の時間だけでなく、放課後や休み時間を使ってまとめたり、追究したりすることが多いため生活班の方が活動しやすい。

②クラス内には対人関係が苦手な生徒も存在しうる。そのような場合には、人間的につながりのできているグループの方が活動がうまく展開する。

・生徒の自主性を尊重すれば、興味・関心別にグループを編成することも一案である。ただし、その活用法については、検討を要する。
・グループの構成人数を考えると、教師の準備、助言や支援の面、グループ全員が協力し合って追究できる人数という面から、本時は4～5人程度で6～7班から構成するのが適当と考えられる。
・個人への支援やみとりは机間指導や毎時間後提出するワークシートで行う。

オ　課題発見・課題設定における教師の支援について

・課題発見の授業終了後、各班のワークシートから各班がどの様な課題を追究していくのか、予想して次の課題設定の授業に臨む必要がある。
・生徒の興味・関心を揺さぶるための基本的な姿勢としては、押し付けではなくて、生徒のアイデアや意見を幅広く引き出せるように、肯定的な支援を行う必要がある。
・各グループや個人を丁寧に支援するためには、指導者の数は複数であることが望ましい。ティームティーチングの活用を検討すべきである。
・課題についての発表が、単なる調べ学習でなく「健康な生活に役立つ」アピールとなるように働きかけることが大切であろう。

カ　課題設定時の有用なアドバイスの例について

・子どもたちには思いつかないような事柄の具体的な提示：酒のよい点、依存症とは、アルコールの分解過程、日本と世界の喫煙対策、など
・課題設定の方向性や追究可能性に関する評価：薬物の怖さをしってもらうように、課題が大き過ぎる、など
・課題設定や課題追究の方法の示唆：実験教材をメインに、手紙を出して問い合わせてはどうか、など

資　料

レディネス調査用紙

課題学習事前調査アンケート

氏名（ ●●● ）

［記述式］

1　2年生の保健授業で「健康と環境」という課題学習に取り組みました。そのことについて、以下の問いに答えてください。

1）あなたのグループはどんなテーマで、どのような方法で追究しましたか。

テーマ	火葬きゃくろとごみ	方法	手紙を新田清掃センターと市役所に出し、市役所の資料を使った。新聞紙のカリとりも使った。

2）活動全体をふり返って、よかった点、改善すべき点を書いてください。

テーマについて
十分な範囲だったのでよかった。やりやすかった。

調査活動（追究活動）
富居中学校の用務員さんにインタビューしてビデオにとろうと楽しみにしていたが、できなかったので反省だ。

まとめと発表
主張をもっと多く取り入れてやりがいあるものにしたらがよかった。

2　これから「飲酒・喫煙・薬物」についての課題学習を行います。「飲酒・喫煙・薬物乱用」について知っていること、関心をもっていること、調べてみたいことをできるだけ多く、いろんな事を自由に書いてください。

飲酒について：
大人の人は子供がお酒を飲むと、成長がとまるなどいうが、本当の原因を分かっているのか、なぜ大人はお酒を飲むのか。

喫煙について：
たばこのけむりは、なぜ白くくさいのか、また、そのけむりにも何か含まれているのか、喫煙によって肺がためになって死ぬ可能性はないのか

薬物乱用について：
なんのために薬物を乱用するのか、シンナーなどには何が含まれているのか、どこまでやればいけない薬物なのか、！

課題発見用ワークシート

課題発見グループワークシート
～飲酒・喫煙・薬物～

5班　　班長（ ●●● ）

1　資料や教科書から興味や関心を持った事柄を出し合おう

- たばこを吸い初めたのは、7割が小中学生の時から。
- 消えたたばこCM
- たばこによる社会的損失

2　話し合いで出された事柄を分野別に分けてみよう

分　野	どんなことを知りたいか・どんな疑問を持っているか
医学・化学	●たばこを吸うと背が伸びないというのは本当か？ ●「ヤニ」とは何か？
経済・社会	●消えたたばこCM ●たばこによる社会的損失 ●たばこを吸わない人の保険料が安くなる。
法律・道徳	●たばこを吸い初めたのは、7割が小中学生の時から。 ●夜11時に自販が止まるのはナゼ？
個人・自分	●なぜたばこが体に悪いとわかっているのに吸うのか？

3　各グループの話し合いなどを参考にして、もう一度、自分たちの課題になりそうな事柄をより具体的に書いてみよう

「たばこを吸い初めたのは、7割が小中学生の時から」→これをどう調べる？

課題発見後のカルテ

課題学習実践例　段階別カルテ　（飲酒・喫煙・薬物乱用）

課題発見後のカルテ　　教　卓

6　班 1．喫煙、（飲酒） 2．タバコの女性、妊婦への影響 3．他の話題についても意見を十分に出し合わせてから課題を絞り込ませる	3　班 1．薬物乱用 2．［設られていない］ 3．無理に課題を押しつけず「ゆさぶり」をかける 4　班 1．飲酒 2．ワイン、自販機の規制 3．自販機について無理に押しつけないようにする 5　班 1．喫煙 2．未成年、社会的損失 3．喫煙からどう課題を絞っていくか注目	1　班 1．飲酒 2．酒は百薬の長 3．アルコールのよい所でほぼ決まりそうだ
7　班 1．喫煙 2．世界禁煙デー、間接喫煙 3．社会・経済的側面からの課題追究に意欲がある		2　班 1．飲酒 2．酒の害と酒のいい所 3．新たな課題を設定する可能性あり 話し合いと確認を十分に行わせる

1．課題発見で取り組もうと考えている分野
2．課題として設定しそうなキーワード
3．課題設定授業での支援のポイント

課題設定用ワークシート

～飲酒・喫煙・薬物～

［6時間目用］

7班　　班長（ ●●● ）

1　前の時間の話し合いや各グループの状況から、自分たちの課題を設定しよう
また、課題をどうやって調べ、まとめていくかアイデアを出し合おう

課題	世界の各国と日本の禁煙の比較
設定理由	どうして： 日本が最近禁煙に真剣に取り組むようになったが 世界の禁煙はどうなのだろうか！
到達目標	ここまでやれば： 日本と比較して世界の禁煙はどのようにしているのかを みんなに知ってもらう。
研究仮説	こうなるだろう： 日本の禁煙は世界から見て遅れている方だと思う。

2　自分たちの学習計画を立てよう（課題を解決するために必要な資料、情報材料、問い合わせ先、調査の日程など）

・世界禁煙デーについて厚生省に電話などで聞く。
・カナダの禁煙についてティファニー先生に聞く。
・たばこのある国とない国を調べる。
・日本の禁煙の対策について厚生省に聞く。
（これからのことも含む）（良い禁煙対策と悪かった禁煙対策を聞く）

ソムカワより：保健所とか市役所などが考えられます
JR東日本、全日空も興味があるなぁ。
これは政策だけでなく、国民の意識の違いってのは？

課題追究用のカルテ

課題追究用カルテ　　教　卓　　6月2日（火）

6　班	3　班	1　班
1．妊婦・女性と飲酒 2．設定した課題に広がりを出すために意見を出し合う 3．追究活動～まとめの見通しを確認し、主張性のある発表に発展させる	1．薬物乱用 2．資料のまとめ 3．まとめ方と発表でどのような工夫をするか	1．飲酒と健康 2．追究活動の中で、独自性をどう出していくかを検討する 3．河渡病院への取材を通して2班との違いを出すよう助言する
7　班	**4　班**	**2　班**
1．日本と世界の禁煙事情 2．世界禁煙デーのまとめ 3．県庁福祉保健部健康対策課から資料が届けば、その分析と検討を行うが、間に合わなければ、まとめ方の検討を先にさせる	1．飲酒と健康 2．ビールメーカーの事典を読んでまとめる 3．資料をどう発展させるか	1．飲酒の中毒・依存性 2．病院への質問内容 3．アルコール中毒患者の更正について、放課後河渡病院に出向くのでその準備をさせる
	5　班	
	1．喫煙と未成年 2．実験用具の作成、アンケートの集計 3．アンケートの考察方法	

1．前時に設定した課題
2．予想される本時の追究活動
3．支援のポイント

発表会用のカルテ

発表会用カルテ　　教　卓　　6月16日（火）17日（水）

6　班	3　班	1　班
1．飲酒喫煙の妊婦への影響 2．女性への飲酒喫煙の影響をどのようにまとめ、主張をこめるのか 3．4班同様、追質問で発表内容を深めるよう支援！	1．使うな危険　赤信号 2．薬乱をどれだけ身近なものとしてアピールするか 3．主張をさらに強調する	1．酒は百薬の長？ 2．アルコールの良さを追究しようとしたが、利点がなかった。これをどう主張に盛り込んでいくか。 3．研究の経緯に触れる
7　班	**4　班**	**2　班**
1．NO SMOKING～日本と世界の事情～ 2．多くの資料、ＡＬＴへのインタビューと盛り沢山 3．今現在の身近な生活へというよりも、将来につながる情報発信になるようように助言する	1．お酒の体内旅行 2．ビール会社発行のお酒事典をどう分析したか 3．内容を深めるよう追質問	1．アル中をとめろ！ 2．依存症の研究と中学生としてのアルコールへの向かい方 3．医学的アプローチに偏らず、分かりやすい発表になるように！
	5　班	
	1．公開実験～タバコの害～ 2．５分程度で喫煙実験を行う。実験が成功するか？ 3．手際よく進める支援を！	

1．発表テーマ
2．発表のポイント
3．教師の支援のポイント

評価班からの評価

ここでは、P.29に示す評価票を用い、授業を通して学習を進めた生徒が、自らの学習をどう評価しているかをアンケート調査し、その結果を分析することで、実践された保健授業の特徴の一端を明らかにすることを目指した。

今回利用する評価票は、20項目の質問と自由記述欄からなる。20項目の質問内容は以下の6つの観点で分類される。

A. 仲間と協力的に学習することができたか（＝協力的学習）
B. 新たな認識が身に付いたか（＝認識）
C. 興味や関心を持ち意欲的に学習することができたか（＝興味・関心・意欲）
D. 主体的・積極的に学習することができたか（＝自己学習）
E. 総合的な授業評価（＝総合）
F. 学習の内容から日常生活の保健行動に役立てられそうなものを見つけることができたか、また、学習と生活を照らし合わせることができたか（＝学習と生活の関わり）

この6つに分類する評価の観点と評価表の質問項目との対応は、A＝1～4、B＝5～8、C＝9～12、D＝13～16、E＝17，18、F＝19，20、となる。

これら6つの観点で分類し、それぞれの観点毎に点数を求め、生徒による授業の評価（学習過程評価）を得るものとした。回答はそれぞれ「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の三択で求め、各々3点、2点、1点の点数を与え、それぞれの観点別に点数を加算し平均値を求めた（Fは除く）。実際に用いるアンケート用紙は、同じ観点の質問がまとまらないよう、それぞれの質問を分散させて配置した。

評価結果

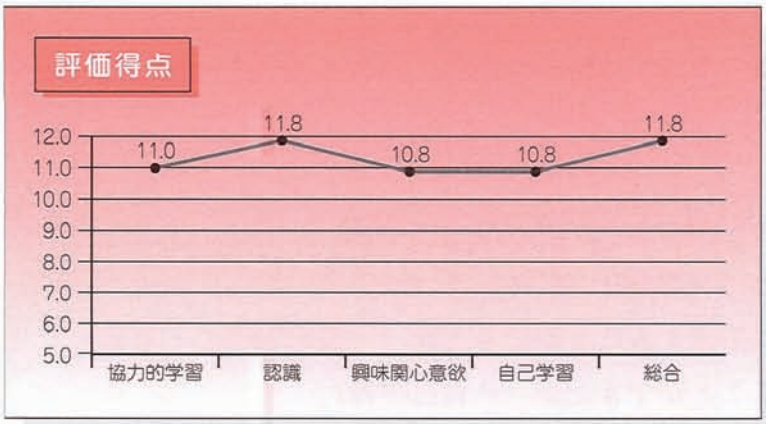
評価・アンケートの実施は、8時間構成の課題学習の最終授業が終わった時点において行った。

(1) 評価得点について

「協力的学習」の得点が高い理由として考えられることは、本授業がグループ活動による『課題学習』という形式をとっており、そこでの課題を追究していく場面において、生徒たち

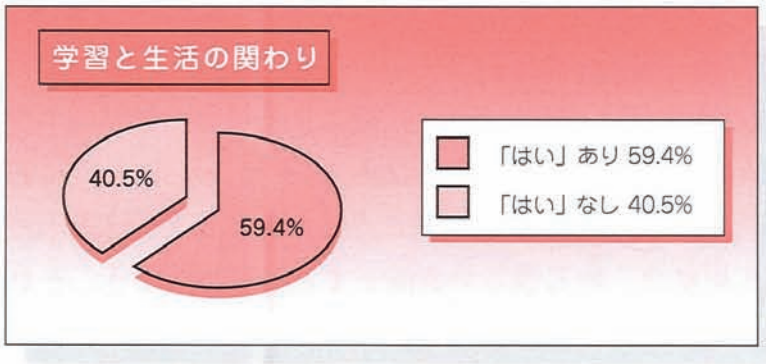
がグループの仲間と積極的に関わり、協力しあいながら学習を進めていくことができたからではないかと推察される。

また「認識」の得点が高い理由として考えられることは、基礎的な学習内容を単元の前半部分（課題学習の前）で扱っていたことと同時に、生徒たちが『課題学習』の場面においても、積極的に自分たちの疑問について答えを求めていった結果であると思われる。また、各グループが自分たちの追究内容を発表する場面においても、お互いの発表内容を相互評価していくことで、他のグループから示される情報にも注目し、そこからも多くのことを生徒たちが学んでいったからであると思われる。



(2) 学習と生活の関わりについて（F.の評価観点）

「学習と生活の関わり」の観点において、59.4%の生徒がその関わりを認めていることは、今回の「課題学習」での学習内容が、いわゆる「学校知（学校で教えられる知識が、学習者が生きている現実の社会や自然と遊離し、学習者の必要性から離れ、分断化・分節化され、記号化された知識として教えられているという概念）」としての批判に当てはまらない、『日常の生活場面で役立つ知識や態度を身に付ける学習』として、生徒たちに受け取られた結果であると推察される。今回の「喫煙・飲酒・薬物乱用防止」の学習内容を、生徒たちは現在・未来の生活場面において自分の健康を守るために意義あるものであると認識したものと思われる。この数値の高さは『課題学習』の有効性のひとつを示しているものと言えよう。



(3) 授業の感想（自由記述）について

自由記述欄を設け『今回の課題学習の授業で、皆さんが学んだ大切なことがらは、どのようなことなのでしょうか。以下の枠内に書き込んでください。』という指示を出した。生徒の記述をその内容から4つに分類した。

① 喫煙・飲酒・薬物乱用が体に及ぼす害についての理解

「タバコは吸わない方がいい。タバコは自分だけでなく周りにも害がある。」
「薬物は1度やるとやめられなくなるので"ぜったい"してはいけない。」
「飲酒も喫煙も薬物もほんとうにこわいものなんだということがわかりました。」
「タバコはとても悪いもので良いところはほとんど何もないので、僕は吸わない方がいいと思う。酒は今まで少量なら良いと思っていたが、良い所はなく、ストレス解消にしかならないということがわかった。」
「僕たちの班は妊婦の飲酒・喫煙について調べたが胎児にはかなり影響があることが理解できた。あまりいままで気にしていなかった胎児への影響が知れたことです。」

② 喫煙・飲酒・薬物乱用が体に及ぼす害についての理解と、その害を排除するための望ましい行動選択について

「今まではお酒やタバコは大人の特権ですごくあこがれがあったけど、今は、大人になってもあまりお酒を飲んだりタバコを吸わない方がいいと思った。」
「飲酒・喫煙・薬物乱用の3つはいいところがなく悪いことろが沢山あるので、これらを気をつけて将来に役立てていくこと。」
「お酒の体に対する悪影響。これが恐くなって、将来お酒をいっぱい飲もうとは思わなくなりました。」
「お酒・たばこは身近なところにあって、しようと思えばすぐできる。しかしそれには悪いことが沢山あって、けじめをつけなければならない。私達が大人になるにつれてもっとそのことを認識しなくてはならない。」
「大人になってから飲酒・喫煙をやめるのではなく、今のうちから心掛けておくこと。興味を持つことは良いことだけど、何でもほどほどに。でも薬物だけは興味があっても絶対に手をつけてはいけない。」
「薬物やタバコは基本的にすごく悪いものなんだということがわかった。酒はいい所もあるみたいだけど、悪い所（とくに依存症など）もたくさん発表されていた。体が完成したら飲む量を決めれば（それを守ることができれば）飲んでもいいのかなと思った。」

③ 喫煙・飲酒・薬物乱用の害から体を守るために必要となる、強い意志や態度、また勇気を持つことの価値について

「今回調べたことは、すべて自分の意志をしっかり持てば解決または未然に防げるものだったと思います。だから、自分の意志をしっかり持つということが大切だと思います。」
「タバコにしても酒にしても薬物にしてもみんな自分の意志で止めたりしなければならない。自分たちが大人になってもこの発表を忘れないで、お酒だったら適量にしたり、タバコは吸わない、薬物もしないと、自分の意志を持てると思う。」
「薬物乱用は絶対にしてはいけない。誘われても断わる勇気を持つこと。」

④ 「課題学習」という授業スタイルの価値について

「授業はずっと聞いているよりも自分たちで動いて調べたほうが面白いしやりがいがあると思った。」
「これから私たちが築き上げていく社会において、この授業を通して私たちがこれから何を主張してよいのか考えさせられたことがあった。だからこの発表がすべて大切だと思った。」
「自分の主張をもっていなくてはいけないこと。良い発表をするのはすごく大変なんだということ。」
「班活動では友達と協力することの大切さを学んだ。」

これら4つの分類内容は、本授業の特徴・特色の一端を表しているものであろう。すなわち、今回の課題学習を取り入れた保健の授業（単元）は、単に生徒に新しい知識を与えることができただけでなく、喫煙・飲酒・薬物乱用を行わないという行動選択にまで意識を向けさせることができており、またその行動選択を支える意志や態度の重要性、また、タバコ等の勧めを断わるといった対人関係（コミュニケーション）能力の重要性にまで学習が深められていた授業（単元）であったと言えるであろう。同時に、グループで議論し、調べ、発表するという今回の課題学習の授業スタイルに関する記述からも、生徒たちが、そこで「主体的な学習者」として自分たちの学びを深めていった様子がうかがわれる。

評価票・アンケート用紙

1　友達と助けあって学習できましたか。
2　友達の意見を聞いて、一緒に考えることができましたか。
3　友達から教えてもらったり、助けてもらったりしましたか。
4　友達と力を合わせて仲良く勉強することができましたか。

5　今回の勉強は、大切なことがらと思いましたか。
6　今回の勉強でこれからの生活に役立つことがあると思いましたか。
7　「アッ、ワカッタ」とか「アア、ソウカ」と思ったことがありましたか。
8　新しい発見や驚きがありましたか。

9　夢中になって勉強することができましたか。
10　今回の勉強は楽しかったですか。
11　「もっと知りたいもっと調べたい」と思うことがありましたか。
12　もっとつづけて勉強したいと思いましたか。

13　自分から進んで勉強することができましたか。
14　授業やグループでの活動中、わからないことや、疑問に思うことがあるときは、自分で調べたり、質問したりしましたか。
15　自分の意見を持つことができましたか。
16　「～を知りたい」、「～はっきりさせたい」と思いながら勉強することができましたか。

17　今回の保健の授業はよかったですか。
18　今回の保健の授業ではよい勉強をしましたか。

19　今回の保健の授業でこれまでの自分の生活を反省したり、これからの生活を変えていこうと思うようなことがらがありましたか。
20　今回の保健の授業でこれまでの自分の生活に自信がついたり、これからもそれを続けていこうと思うようなことがらがありましたか。

加えて自由記述欄（授業の感想）

（なお、この評価票は植田誠治が開発した「保健授業の教授－学習過程評価票」を参考にしつつ作成した。また、生徒には、この評価票の記述の内容が本人の成績等には全く関係がないことを予め伝え、回答を求めた。

参考文献

1）植田誠治、小学校保健授業の教授－学習過程評価票の開発、
学校保健研究、第40巻第1号、1998

3 課題学習のための準備を重視した単元計画 —「健康と環境」の単元における実践例—

1 はじめに

課題学習には、子供の関心や意欲を引き出し、思考力や判断力を育てるという優れた特質があり、実際、効果を上げている例も数多く見られるが、逆に問題が起こるケースも少なくない。例えば、課題学習においては一般に多くの時間を必要とするため、これまでの学習に比べて知識が不十分な状態で学習が終わってしまうという問題が起こっている。また、課題学習は学習の仕方について子供に任せる部分が多いのにも関わらず、課題を発見したり解決する力が子供に不足しているため、学習の目標とは合わないような不適切な課題を選んだり、本の書き写しといった不十分な課題の解決の仕方をすることなどの問題も起こっている。さらに、各グループごとの学習は活発に行われてもクラス全体としてのまとまった学習という点では不十分な場合が多いこと、他教科ではなく保健学習において課題学習を行う場合の独自性が必ずしも明確になっていないことなどの問題もある。

本研究授業においては、課題学習の長所を生かしながら、従来見られた問題に対する解決方法を見出すために以下の試みを行った。

ア 単元における基礎的な知識を保証するために

全単元の約半分の時間を用いて教師が単元全体を概説することにより、基礎的な知識を保証する。

イ 子供の課題学習を進める力を保証するために

①主体的な学習を始める前に、単元全域にわたって教師の概説を行い基礎的な知識を保証する。それと同時に、学習したことへの興味・関心を持たせ、疑問や研究したいことを明確化させる。

②課題の選び方、解決の仕方のモデルを教師が提示することにより、自分たちで主体的な課題学習が進められるようにする。

ウ 子供同士の交流を活性化させるために

①学習の発表の際にコメンテーターを置くことにより、能動的に発表を聞けるようにする。

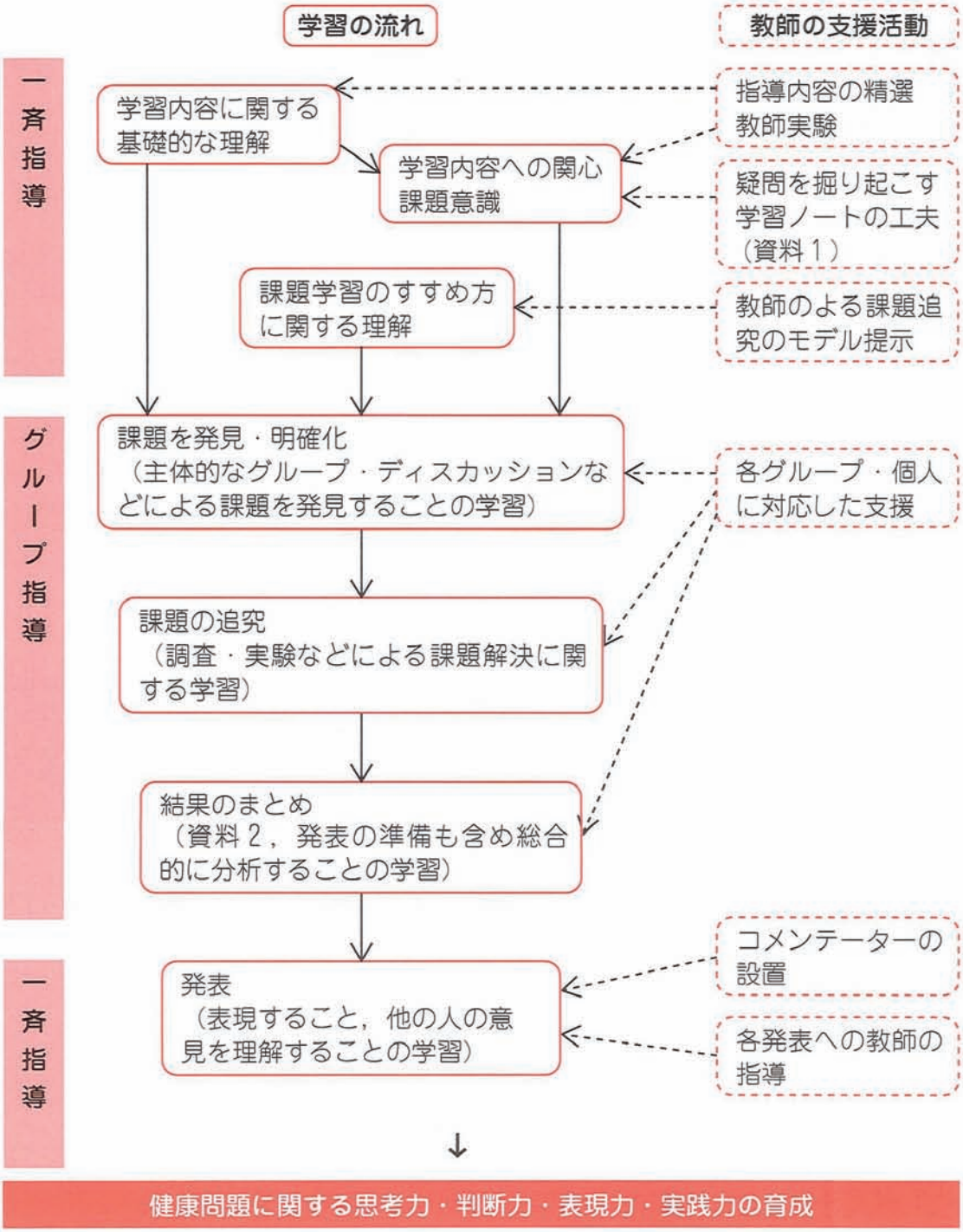
エ　課題学習において保健学習の固有性を打ち出すために

①課題の設定や追究の仕方において健康的な生活や保健行動とのつながりを強調する。

②教科書に書いてあるような基礎・基本を学ぶのではなく、それをいかに活用、応用していくかを課題学習で学ばせる。

模式図に示すと次のような形になる。

課題学習のための準備を重視した学習の流れ



2 単元計画（10時間）

時配	学習活動	評価基準	備考
1・2・3・4	◆基礎的学習による課題発見のための授業 ○一斉授業による学習内容の確認。 ○関心のある内容、調べたい内容、実験したい事などの確認。 ◇予想される内容例 ・空気の汚れ、明るさの調節・騒音の調査・水質の調査・ゴミ問題・オゾン層問題・地球温暖化問題等 ○グループ別学習課題の決定 ○モデル提示	○環境問題について関心を高め、具体的に考えることができる。 ○環境問題の課題を認識できる。	1～4時は連続したまとめ取り（週に3時間のペース） 4時と5時の間は3～4日間あける。
5	◆課題別による課題追究のし方の学習 ○課題学習（実験・調査→対策へ）の手順確認。 ○資料・情報の交換 ・事前に準備しておく。（文献、新聞の切り抜きなど） ○学習計画の作成 ・仮説の設定（調査・実験・対策） ・調査・実験方法の検討（あわせて用具、器具等の使用、借用方法） ・実験・調査日程などの設定	○課題の解決のための計画を立て、学習の見通しを持つことができる。 ○課題解決の取り組みに意欲的に参加できる。	5～8時は週1回の授業
6・7・8	◆課題別グループによる課題追究学習 ○学習計画に沿った調査・実験に取り組む。 ○調査・実験結果のまとめを行う。 ○自分たちでできる対策の検討を行う。 ・具体的な取り組みの検討（より身近で効果的な） ○対策を実施する。 ○発表の準備とまとめをする。	○計画的に課題解決のために取り組むことができる。 ○それぞれの役割を果たし積極的に取り組むことができる。	
9・10	◆学習のまとめ ○調べた内容と取り組みの発表 ・課題別に発表する。 ・コメンテータ班が中心となって内容を深める。 ○まとめと評価 ・学習と取り組みの両面から環境問題についての理解を深める。	○課題に対しての適切な発表ができる。 ○お互いを認め、質問・感想などを積極的に発言し理解を深めようと参加できる。 ○学習内容を理解し、自分たちの生活に生かすことができる。	9・10時は連続してとる。

3 実 践 例

ア　研究授業に関する基礎的データ

（ア）研究校　　浦和市立大原中学校
（イ）授業時期　　平成10年１月20日～２月27日に10時間
（ウ）授業対象　　中学校２年生１クラス
（エ）単元　　「健康と環境」（単元全体を研究対象とする）

イ　授業記録

	授　業　の　様　子	教師のコメント
一斉指導	第１時 ○学習の流れと内容について説明した。 ○課題学習につなげるため、通常の２倍の進度で進むことを予告した。 ○できるだけ身近な具体的事例などを取り上げ、理解を深めようとした。	◎この時間の内容からは、具体的な課題はつかみづらいようであった。
	第２時 ○暑さ寒さについては身近な問題でもあるが、教科書に結論的な書き方がされているため、深めるまで至らなかった。 ○空気の条件では室内の二酸化炭素・一酸化炭素量の測定を行って見せた。 ○明るさでは照度計を各自の手元に回し、実際の照度を知らせた。また、各家庭での学習机等の照度の工夫などうながした。 ○時間の都合もあって、騒音については深められなかった。	◎この時間は扱う内容が多すぎた。もう少し時間を取り、深めさせたい。
	第３時 ○水道水・湯冷まし・井戸水の塩素濃度、味の測定実験を行って見せた。興味・関心を引けた。 ○水の確保・節水等においても十分な理解が得られた。 ○し尿についてはその処理法についての意識が薄いことがわかった。もっと時間をかけて、具体的な資料（資料にしづらい内容か）等を参考に学習させる必要性を感じた。 ○ゴミについては、ことばでの「分別・リサイクル・再利用」はでてくるが、具体的な内容については、課題とした。	◎この時間では、生活していく上での身近な問題として多くの生徒の関心を引き出せた。
	第４時 ○環境汚染の具体例では、写真や、資料を持って説明したためその被害などより身近に感じさせることができた。 ○地球的な環境問題の原因と被害の説明から、自分たちの生活に直接つなげる内容を提示した。 ○今後の地球は、私たちの生活の仕方で大きく変化していく恐れがあることを示した。	◎この時間は、今までの学習内容のすべてを総括した「人と環境」といった内容を強く残すことができた。
	第５時 ○課題学習の進め方の説明では、具体的な実験・調査に基づく対策を行った例を挙げ、手順の確認を行った。	◎各班での資料交換と学習成果交換の作成では、教師サイドの準備（学校備品の数・保管場所等）が必要であった。 ◎上記の関係から、各班から事前に必要な用具のピックアップを行う必要性を感じた。

	授業の様子	教師のコメント
グループ指導		◎この時間では、班の話し合いの状況にずれが生じるのでアドバイスが必要である。
	第6時 ○グループ学習（実験・調査）の内容 1班 「温暖化について」 学校周辺での二酸化炭素濃度調査 2班 「環境汚染と私たちの生活」 理科室での酸性水の作成と10円玉への影響 3班 「ゴミの処理と問題」 学校周辺のゴミマップ作成のための調査 4班 「水と生活」 学校の上水道の調査・水質の違い 5班 「酸性雨について」 雨や雪の酸性度の測定とその影響 6班 「空気の条件」 二酸化炭素の濃度について実験	◎生徒は意欲的に行動できていたが、調査・実験が優先してしまい結果や対策につなげる発想をアドバイスしきれなかった。 ◎この時間は、班単位での調査・実験の時間で、場所と活動内容は把握していたが、生徒同士の会話や発想を実験記録以外に記録させると良かった。
	第7時 ○グループ学習（実験・調査）の内容 1班 「温暖化について」 排気ガスの二酸化炭素濃度（車・ストーブ） 2班 「環境汚染と私たちの生活」 理科室で酸性水の作成と10円玉への影響 3班 「ゴミの処理と問題」 ゴミマップ作成とゴミの分別回収について 4班 「水と生活」 水の博物館見学のまとめ 5班 「酸性雨について」 雨や雪の酸性度の測定と酸性水の木や石への影響の実験 6班 「空気の条件」 排気ガスの濃度と植物への影響の実験	◎前時の反省や失敗などからさらに工夫した実験や、結果の求めやすいものへ内容が変わっていき生徒の活動がより活発に積極的に感じた。 ◎教室と理科室中心で前の時間より見やすかった。活動が見えた分、アドバイス、声掛けもできた。
	第8時 ○各班の発表方法の確認を行う。 ○発表順の確認とコメンテータ班の確認を行う。 ○発表に使用する模造紙、コピー原紙等の配布。 使用する視聴覚機器の確認を行う。 ○各班ごとに実験のまとめの確認と発表原稿、模造紙の作成。 ○今までの実験の結果をまとめ、グラフや絵、写真などを取り入れ班で良く協力工夫できていた。 ○他の領域で模造紙での発表を経験しているので、取り組みもスムーズであった。	◎この時間は計画に「リハーサルも含む」としてあったがどの班もそこまでできなかった。もっと時間を取るか、発表の方法を新聞形式にし個人分担にする方法も考えられる。
一斉指導	第9、10時 ○班ごとの発表を行った。 1班 「温暖化を防ぐための対策」 2班 「酸性雨について」 3班 「ゴミの処理と問題」 4班 「水について」 5班 「酸性雨について」 6班 「空気の条件」 ○それぞれの班に質問がなされたが、実験内容の是非に関するものからゴミの処理でどうして焼却するのかなど幅広く質問が出た。 ○質問者が4～5名と特定化してしまう傾向がある。	◎発表時間・内容ともに充実していた。 実験が生かされた内容となっていた。 ◎「対策」では、身近な問題「ゴミ」「空気」については具体的な取り組みが示された。しかし「酸性雨」のような規模になると対策が一般的な内容になってしまっていた。 ◎コメンテータ班に深めるための質問例などを事前にアドバイス・指導しておくべきであった。

4 授業者の感想と評価

○事前の準備

①ノートの作成

・一斉授業を行う際に、個人の関心・課題を書き残せるノートの作成を行った。
・より短時間でまとめ・評価が記録できるものとした。
・授業の見通しがわかるものとした。

②アンケートの実施

・事前アンケートをとり生徒の実態（予備知識・関心）を把握した。
・アンケートの結果から生徒の関心のある内容・項目や理解度を把握することができた。

○授業に関して

①一斉授業

・一斉授業の導入で、より身近な問題として自分たちの生活に生かせる内容につながる実験調査及び発表会を行うことを予告した。関心・探求心へつながった。
・一斉授業を行い、環境問題全体について知らせ、身近な問題として課題を残すかたちの授業を展開した。
・一斉授業後の理解度、課題意識の確認が不十分であった。（小テスト、アンケート）

②時間配当の工夫

・４時間で一斉授業を扱ったが、急ぎ足といった感じであった。
・課題学習の範囲を絞って、その部分を少し時間をかけて授業の発展を図った方が良かったように思う。
・時間的には５～６時間取れば、その後の課題学習においても生かされると思う。

③課題学習（班活動）

・班編成の工夫
→計画当初は、課題別の班編成を考えていたが、日常の生活班（男女各３人）での活動を評価し、生活班での取り組みとした。その結果、昼休みに図書館で調べたり、放課後の活動の打ち合わせを行うなど学習活動の深化が図れた。
・教師側の班活動の把握と生徒間のお互いの活動内容の相互理解が不十分であった。
→ほぼ同じような内容を実験調査した班があった。

④発表会

・発表方法の工夫

→発表形式の統一化された部分と自由化された部分の両面で班独自の準備・工夫が見られた。

→担当グループの学習の深まりと聞くグループとのギャップがおおきかった。

→学習の深まりと言った部分でコメンテーター班の事前学習時間の確保と質問内容準備のための時間などの確保が必要であった。

⑤資料

・他教科の調べ学習の形式や、他校での保健の授業の発表用資料を提示した。

→資料提示は班活動の前に行った。

・視聴覚機器の利用

⑥まとめ

・各班で取り組んだ内容、現在の環境問題と身近な問題について簡単な感想文を書かせた。

→「小さなこと（自分でできること・身近なこと）から取り組みたい」

→「将来環境にやさしい仕事に就きたい」などが多かった。

○授業全体の評価

これまでの授業形態から比較すると学習への意欲や活動の活性化・理解の深化といった様々な面において明らかに変化が見られ、効果があったといえる。また、この授業の最大のポイントである「身近な問題として一人ひとりに考えさせ、自分の今後の実践（生活）につなげる・生かしていく」といった部分で時間をとったことが個人から班、クラスへと共通の意識へとつながり、学級経営（生活指導）の面でも良い影響をもたらした。

○今後の課題

・一斉授業の精選と配当時間

・グループ編成の工夫（課題別・生活班）

・実験・実証学習のための準備・場所、他教科との連携

・班活動の把握と生徒間の学習内容の相互理解

・発表方法の工夫

→担当グループの学習の深まりと聞くグループとのギャップ

→コメンテーター班の事前学習時間の確保と質問内容の事前準備

5 まとめ

ア　学習過程について

教師主導の一斉学習と生徒の自主的な課題学習を組み合わせた学習過程となっている。

１単元の学習時間が限られている中で、基礎的・基本的事項についての知識・理解を一斉学習で深め、興味・関心や思考力・判断力、さらに生活実践に生かす態度を課題学習で育てようという意図で計画された。

さらに、一斉学習の過程で疑問点を積み重ねて、課題学習の動機にまで高めることも意図した実践であった。

単元全体の学習の進め方は、生徒にもよく理解され、単元全体を教師主導の一斉指導で進める授業よりも主体的な活動が生き生きと展開されていた。

イ　この学習過程を支えるために様々な工夫がされ効果をあげた。課題及び感想も含め以下に示す。

（ア）　課題学習を始める前に、単元全体にわたって教師が概説を行い、基礎的な知識を保証するとともに、学習したことへの興味・関心を持たせ、疑問や研究したいことを明確化させた。

○　概説の時間が短いので、学習ノートを作成し、学習内容を効果的に整理し知識の定着を図った。

○　学習ノートにその時間に感じた疑問や興味を記入して記録として残し、この積み重ねが課題設定の出発点となるように計画した。

○　学習の中で教師もこのことを強調して指導した。

○　二酸化炭素、一酸化炭素の測定等の教師実験の工夫により、興味関心を引き起こし理解も深めることができた。

○　照度計を実際に使った測定も教師実験と同様に効果があった。

○　写真や資料を多用することにより理解を深めさせたり、問題意識を引き出すことができた。

○　本単元の学習では、知識の量は多くを求めないが、基本的な事項についてはほぼ全員に定着できた。

○　一定の知識を多数の生徒に効果的に獲得させるという、一斉学習の利点をかなり生かすことができた。

○　同じ教師指導であっても、知識提供に重点をおいた授業と、課題探しの動機付けに重点をおいた授業は異なると考えられる。今後は後者の授業に関してさらに検討する必要性が感じられた。

（イ） 課題の選び方、解決の仕方のモデルを教師が提示することにより、自分たちで主体的な課題学習が進められるようにした。

○ モデルについては、他校の授業で実際に行った課題学習を実例として示した。

○ 具体的な実験・調査にもとづいて、課題解決を自分たちの生活の中の対策として実践するところまで進めた例を示した。

○ このことによって課題学習の進め方についてイメージを持たせることができた。

（ウ） 生徒同士の交流を活性化させるために、学習の発表の際のコメンテーターを置き、能動的に発表を聞けるようにした。

○ コメントを出さなければならないというプレッシャーから、学習に対する集中の度合いは高くなった。

○ 客観的にコメントできるだけの知識や考えをもつことはむずかしいので、実態に応じた程度でのコメントを求めた。

○ コメンテーターは初めての体験でありとまどいを感じた生徒も多く、適切に機能させるためには継続的に学習する必要がある。

○ この学年の生徒でも、慣れればもっと適切なコメントが出せると思う。しかし、現状では、教師の助言等の支援がもっと必要であった。

（エ） 課題学習において保健学習の固有性を打ち出すために、課題の設定や追究の仕方において健康的な生活や保健活動とのつながりを強調した。

○ 教師は、オリエンテーションでは、健康的な保健行動にまで結びつく学習であることを強調した。

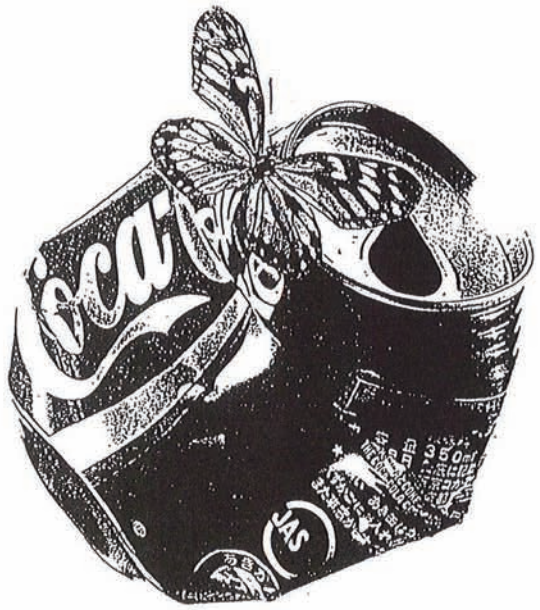
○ 強調は、学習の見通しについての説明の中で行った。

○ 生徒も「生活に生かす」意識をもって学習に取り組んでいた。

○ 「生活に生かす」意識がやや弱いグループもあったが、教師一人で全体を指導するという形では限界がある。その点に関しては、上記（イ）で述べた課題の選び方、解決の仕方のモデルの提示にさらなる工夫が必要かもしれない。

資料1 学習ノートの一部

保健学習ノート



2年　組　番 氏名

1，環境と適応

問い：暑いとき寒いとき、からだはそれぞれどんな状態になるだろうか。思いつくだけあげてみよう。

・暑いとき〔

・寒いとき〔

①暑いときと寒いときのからだの状態

②体温調節のしくみ

体熱の放散…

体熱の発生…

③適応能力

寒いとき…

暑いとき…

2，適応能力の発達と適応能力の限界

①からだの適応の力のいろいろ

長期的…

一時的…

2年保健ノート　<環境の調節と健康>

1，暑さ寒さとその調節

問い：現在の教室の温度は何度くらいか。快適か不快か？

＿＿＿℃くらい　（ 快適 ・ 不快 ）

①暑さ寒さを感じる条件

温熱環境の四要素
・気温

・湿度

・気流

・ふく射熱

②至適温度と防寒・防暑

至適温度とは…

学習などの軽労働における至適温度

防寒・防暑の工夫

……

……

③環境の調節と適応能力

②適応能力の発達

高地トレーニングはどんなスポーツに有効か？

……

……

③適応能力の限界

気温…

高地…

適応能力を発揮できない環境…

まとめ

評価と課題　　評価　A：良くできた　B：できた　C：できなかった

項　目	評　価	反　省
意欲的に学習に参加できた		
学習内容が十分理解できた		
ノートの活用ができた		
自分なりの課題を持つことができた		

課題と調べたい内容

2年A　ノート　<第5時>

1，学習の進め方について（手順の確認）
①グループの決定
②課題の確認（学習内容＝実験・調査内容の確認）
③学習計画の作成（第5時から第8時）
④調べ学習（実験も含む）を行う。
⑤発表を行う。（第9・10時）　※模造紙2枚以内・視聴覚機材、プリント可
　1グループ10分程度
2，資料・情報交換（新聞の切り抜き・参考文献等を事前に準備）

3，学習計画の作成
①仮説の設定と対策の検討
・○○の調査や□□実験を行って、◎◎すれば、▲▲なるだろう。
　実験・調査　　対策　　仮説
<テーマと仮説>

②実験・調査方法の検討
・いつ
・どこで
・どのようにしたらよいか
・必要な器具等（準備も含む）

③計画用紙の作成（別紙）

評価と課題　　評価　A：良くできた　B：できた　C：できなかった

項　目	評　価	反　省
意欲的に学習に参加できた		
学習内容が十分理解できた		
グループに協力できた		
ノートの活用ができた		
自分なりの課題を持つことができた		

課題と調べる内容・次回までの宿題

学習計画表　テーマ「　　」

○役割分担

◎			
○			

	学　習　活　動（実験・調査内容等）	活動場所・備考
6		
7		
8（発表準備）	・発表のリハーサルも行う	

資料 2 生徒の発表の一部

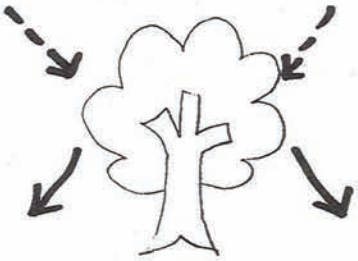
温暖化を防ぐための対策（1班）

1、自然を守り、増やすこと

植物は、CO_2を吸収したり、排出したりしている。そのCO_2の吸収固定量は、木を伐採することによって、下がってしまう。そうすると、二酸化炭素が増えてしまう。だから、CO_2の吸収固定量をさけないために、自然を守り、増やす必要がある。

→ 酸素

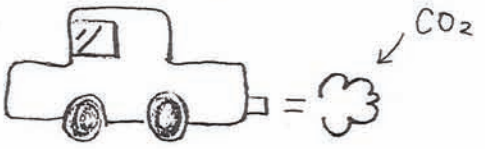
--→ 二酸化炭素



2、化石燃料の使用を減らす

化石燃料からは、大量の二酸化炭素が排出される。そのため化石燃料の使用を減らす必要がある。

例：電気を使わない，車に乗らない，必要な物以外は買わない など



私たちが考えた対策

ストーブのつけ消し当番を決めた。

水について　4班

水がくるまでには大変な道があります。中にはむだになってしまった水もあるでしょう。そこでなるべく水をむだにしないために
節水を心がけましょう。

例えば
- 風呂でのこり湯の半分再利用で90ℓ節水
- シャワーはこまめにとめる。流し続けると1分間に約12ℓむだになる。
- 歯磨きは流しっぱなしで磨くと30秒で5ℓです。コップなら3杯で0.6ℓ
- 洗濯で注水すすぎをためすすぎにすれば55ℓ節水

そこで

私達の班1人1人の家で節水をしました。
4班のある人の家の節水の結果（4人家族）

シャワー5分間　1人60ℓ×4人　240ℓ
歯磨き朝晩　10ℓ×4人　40ℓ

※実験は10日間

(240ℓ+40ℓ)×10日＝2800ℓ

10日間節水して2800ℓも節水できました。
他にも節水の方法はいろいろあります。水をむだにしないように少しの水でも節水をしましょう。

近年、都市化による川の汚れが目立っています。汚染の原因はよく知られている合成洗剤や油などがあります。

魚がすめるまでには・・・
○みそ汁1杯(200mℓ)でふろおけ(300ℓ)5杯分

これは、川の汚染と水のむだになります。また、使った油をすてている人はいませんか。ティッシュですいとるなどちょっとした心づかいで川きれいになります。ここで1番の原因を説明します。

合成洗剤は合成かいめん活せい剤といいます。これは、ふだん使っているシャンプーなど洗剤に含まれていて、体にも害があります。今害がというわけではなく大人になってからガンなどになります。だから薬を使っていなく、川にも体にもやさしいせっけん洗剤を使うようにしましょう。

読みもの

氷ができた時に白い部分を見たことがあると思いますが、白い部分の正体を知っていますか？「正体は水に含まれるミネラルの成分と空気です。」

水道の水はどこから？
4年生
草木ダム
渡良瀬川
思川開発
思川
鬼怒川
中禅寺湖
戸倉ダム
平川ダム
栗原川ダム
薗原ダム
奈良俣ダム
藤原ダム
相俣ダム
矢木沢ダム
川古ダム
片品川
赤谷川
吾妻川
利根川
神流川
下久保ダム
ハツ場ダム
中津川
荒川
滝沢ダム
浦山ダム
利根大堰
渡良瀬貯水池
武蔵水路
朝霞水路
朝霞
埼玉県南水道
関宿水門
野田導水路
江戸川
三郷
ダム（完成）
ダム（工事中及び計画中）
導水路（完成）
導水路（工事中及び計画中）
浄水場
取水堰

世界の酸性雨の被害 5到王

❀世界の状況



↑イギリス、カリーダイにある教会の酸性浸食

・アテネのパルテノン神殿、ニューヨークの自由の神像、ロンドンのセントポール寺院、インドのタージマハールなど有名な建築物は、すべて大気汚染の被害を受けています。

酸性物の降水によって、壊滅的にダメージを受けた山林。(アメリカ・ノースカロライナ州立公園内)



ヨーロッパ中央部では、すでに100万ヘクタールの森林に、約60%の被害を受けている。
そして、ポーランドなどでは21世紀までに、国内の森林は、全滅すると、警戒していて、北米大陸でも30万ヘクタールの森林に育成障害ヤの枯れが発生しています。

日本の酸性雨の被害 5到王

❀日本でも、酸性雨によって、被害がおこっています。



↑東京都内のビルにさがるコンクリートのつらら

●ビルにつららができた。

ビルをつくっているコンクリートのなかにも、カルシウムが、多くふくまれていて、酸性雨でとけたカルシウムが、鍾乳洞のなかにあるような、つらら状のものができてしまいました。



17-2 酸性雨による損害 鎌倉大仏

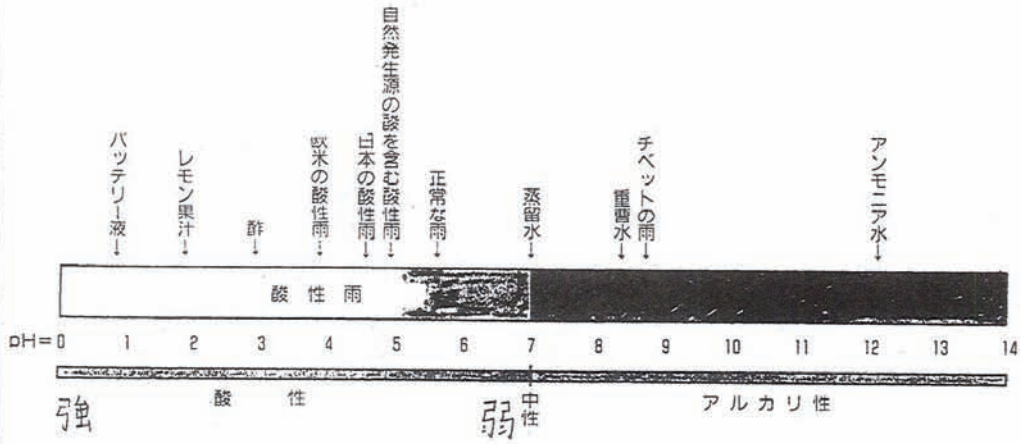
鎌倉の大仏も、酸性雨によって、被害がおこりました。

↓全国の酸性雨の状況



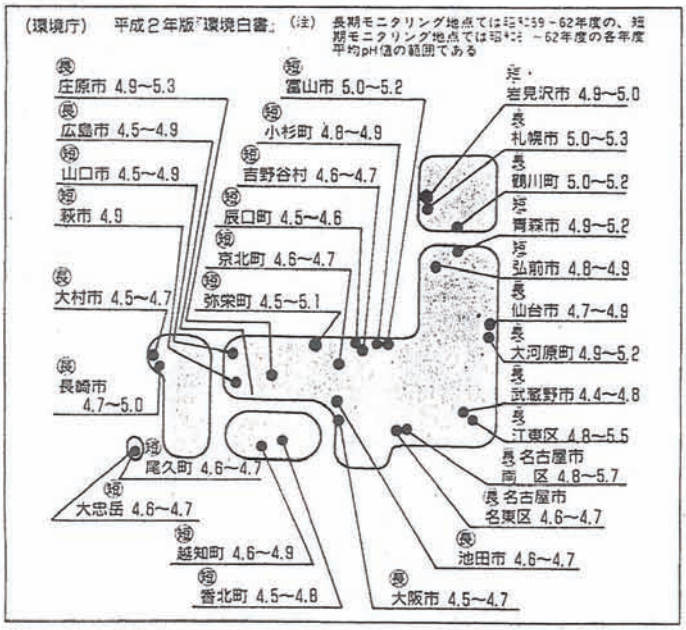
・東京で、酸性雨が、降ったのは、昭和63年の4月7日と平成元年・2年の4月6日です。
全国できに、4月・5月あたりに、酸性雨が、降っています。
だから、みなさんも、4月の雨には気を付けてください。

これが酸性の(pH)基準



特報 酸性雨新聞 2班

● 浦和で降っている雨は、pH.6ぐらいであまり強くはない。しかし、酸性雨が降る地域では、窒素酸化物などが化学反応を起こしオキシダントの濃度が高い。このような現象が起こっているため、酸性汚染物質との関連が考えられている。



日本に降っている酸性雨

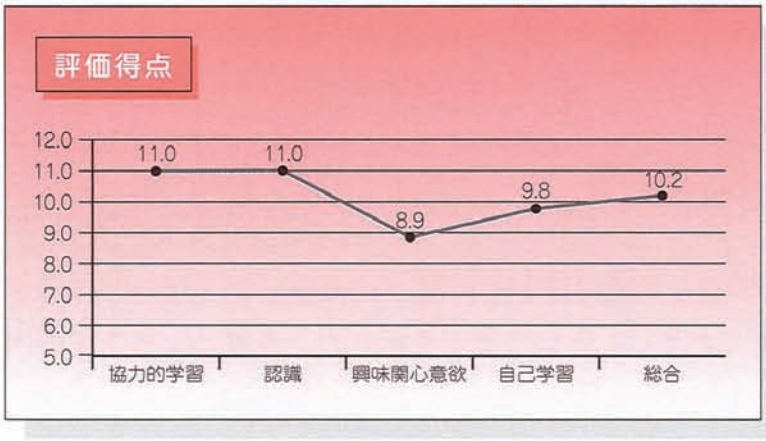
● 日本でも、pH4程度の酸性雨が、一般化しつつある。大気汚染だけでなく、上海など海外の工業地帯の大気汚染も大きな原因となっている。これが、原因で森林破壊などにも、大きく関係している。

評価班からの評価

評価結果

評価・アンケートの実施は、10時間構成の課題学習の最終授業が終わった時点において行った。（評価票：P.29）

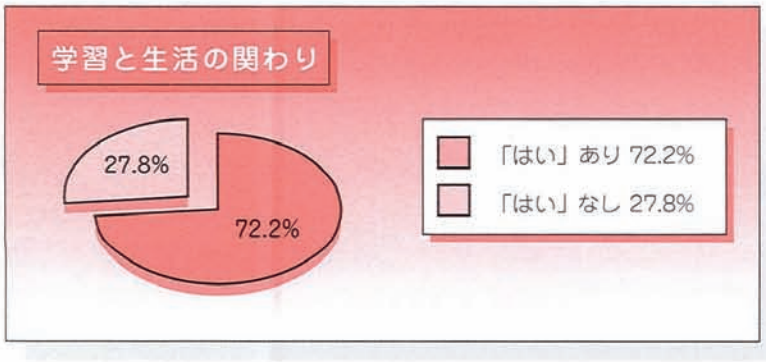
(1) 評価得点について



「協力的学習」の得点が高い理由として考えられることは、本授業がグループ活動による『課題学習』という形式をとっており、そこでの課題を追究していく場面において、生徒たちがグループの仲間と積極的に関わり、協力しあいながら学習を進めていくことができたからではないかと推察される。

また「認識」の得点が高い理由として考えられることは、基礎的な学習内容を単元の前半部分で扱っていたことと同時に、生徒たちが『課題学習』の場面においても、積極的に自分たちの疑問について答えを求めていった結果であると思われる。様々な知識を獲得しながら課題学習を取り組んでいったものと思われる。

(2) 学習と生活の関わりについて（F.の評価観点）



「学習と生活の関わり」の観点において、72.2%の生徒がその関わりを認めていることは、今回の「課題学習」での学習内容が、いわゆる「学校知（P.26参照）」としての批判に当てはまらない、『日常の生活場面で役立つ知識や態度を身に付ける学習』として、生徒たちに受け取られた結果であると推察される。この数値の高さは「課題学習」の有効性のひとつを示しているものと言えよう。

(3) 授業の感想（自由記述）について

自由記述欄を設け『質問項目19,20（学習と生活の関わりの観点）について「はい」に○をつけた方は、その具体的内容を記述してください』という指示を出した。生徒の記述をその内容から3つに分類した。

① 学習をきっかけとした日常生活の振り返りと新たに得た知識について

「この勉強をして学校での水の無駄遣いをなくそうと思った。特に酸性雨についてはおどろいた。こんな被害がでるとは思わなかった。僕たちの水の調査はおもしろかった。今回の勉強をしてよかったと思う。」

「私は今まで水を無駄遣いし、水の大切さの事をわすれていたようです。でも、自分たちで調べてみて、水がどんなに大切なのか分かりました。」

② 学習をきっかけとした日常生活の振り返りと環境保全に向けた意識・行動の改革について

「空気についていろいろ考えました。車に乗ったり、スプレーを使ったり、ゴミを気軽に捨てたり、何気なくやってしまっているけれども、気をつけることがたくさんあることがわかったので、気をつけようと思います。」

「いつもリサイクルなんてめんどくさいとか思っていたけど、大切なことが分かったから、これからの生活を変えていこうと思った。」

「今までは水の節水やりリサイクルなど、あまりしていなかったけど、今回の授業で水などを大切に使おうと思った。」

③ 学習をきっかけとした日常生活の振り返りと環境保全に向けた具体的な対策の立案について

「今までは水はいつでも出てくるもので大切に使おうとはしていなかったが、水について調べてみて水の大切さがわかった。そこでトイレの受水槽のような所へペットボトルを入れて節水をしようと思います。」

「水を出しっぱなしにしたりガスをつけっぱなしにしていたので、しっかり止めて別のことをしたい。」

「自分の班で調べたことや、他の人の調べたことの中で、根本原因はすべて同じことろにたどりつくことがわかった。それはゴミ。今まではペットボトルはゴミとして出していたし、ノートとかの紙類もかなり無駄遣いをしていた。でもこれからは、できるだけリサイクルをしたりして、環境問題の解決に少しでも役立ちたいと思った。」

これら3つの分類内容は、本授業の特徴・特色の一端を表しているものであろう。今回の課題学習を取り入れた保健の授業（単元）は、単に生徒に新しい知識を与えることができただけでなく、リサイクル・節約といった環境保全につながる行動をするためには個々人の意識の改革が不可欠であることまで学ばせることができた授業（単元）であったと言えるであろう。また同時に、これからの自分たちの生活のなかで、環境保全に向けて実際にどのような行動を実践することができるのかについて、その具体例を構想できるにまで学習が深められていた授業（単元）であったと言えるであろう。

参考文献

1）文部省、小学校体育指導資料　新しい学力観に立つ体育科の授業の工夫、1995

2）高橋浩之、健康教育への招待、大修館書店、1996



「授業書」による保健の授業を
どう進めるか

1 「授業書」方式による保健の授業の特色

「授業書」は、仮説実験授業における一種の指導案・教科書・ノート兼用の印刷物である。したがって、「授業書」による保健授業とは、仮説実験授業の方式に学んでおこなわれる保健授業を意味する。

この仮説実験授業とは、板倉聖宣氏によって提唱された＜科学上のもっとも基本的な概念や原理的な法則＞を教えることを意図した科学教育のための授業理論である。板倉氏によれば、この理論はもともと科学史と認識論に関する研究の成果を基盤としたものであり、「問題－予想－討論－実験（検証）」といった一連のプロセスが授業の中心におかれている。すなわち、

①見かけは違うが、本質的には同一の概念・法則に支配される一連の「問題」を次々と与えて、

②各人に「予想」を立てさせ、

③その考え（仮説）を出し合わせながら「討論」させたあと、

④「実験（予想の成否を確かめようとする活動一般）」によって、どの「予想」が正しかったのかを知らせるうちに、目的とした概念・法則を確実に身につけさせようとするものである。

このように、その授業プロセスにおいては、「予想（仮説）－実験」の契機を意識的にトコトンまで適用して展開する（板倉聖宣『科学と方法』季節社、1975年）。それは、そもそも科学の歴史において科学者たちは「予想（仮説）－実験」の繰り返しによってさまざまな科学上の概念や法則を明らかにしてきたのであって、そういうプロセスなしには科学の発展はなかった（板倉聖宣、前掲書）という考えに基づいている。

そこで、仮説実験授業では、「子どもが学校で科学を学ぶ場合の認識活動も、基本的には＜科学者の認識活動＞と同じでなければならない」（板倉聖宣『仮説実験授業』明治図書、1963年）とする。言い換えれば、子どもの科学的認識は、教師から一方的に与えられる情報に依存するよりは、むしろ子ども自身が考えていた「予想」と「真実」とのズレを自ら発見することによって深まっていく、というわけである。

さらに仮説実験授業では、各人の「予想」とともに、「クラスの集団的な討論過程」も授業運営上できわめて重視することも大きな特色である。

「他人のすぐれたアイディアは積極的に取り入れ、間違った考えは徹底的に批判し、自分の考えが正しいと思ったらみんなから孤立してでも自説を守り、他人を納得させるだけの論理と証拠をそろえられるようにしなければならない」（板倉聖宣『仮説実験授業』仮説社、1974年）

というわけである。しかも、ここで注目されることは、子どもたちはこのような過程の中で、

実にさまざまなことを学びとっていることである。「理由」の出し合いの中で、1つの「問題」に対していろいろな考え方が出来るということ、議論の中で「必ずしも多数派が正しいとは限らない」ということ、「間違うことは恥ずかしいことではない」ということ（庄司和晃『仮説実験授業と認識の理論』季節社、1976年）等々だ。

＊

ところで、仮説実験授業について、「クイズばかりで科学教育といえるか」という批判を耳にすることがある。それでは、教授学においては、どのように評されているのだろうか。

「授業の中にクイズを取り入れるというより、授業の全体がクイズとして組織されている授業、クイズから生まれた授業がある。仮説実験授業がそれである。仮説実験授業は、クイズの形式と科学教育とをうまく結びつけた一大発明なのである。（中略）しかし、このクイズ形式が科学教育と結びつかず、いわゆる『単なるクイズ』になる危険性はいつも存在する。（中略）仮説実験授業は問題の質を工夫することによって、この制約を克服したといえる」（藤岡信勝『教材づくりの発想』日本書籍、1991年）

一方、この授業を「ゲーム」との比較において論じたものもある。

「仮説実験授業はゲームではない。直接『勝ち・負け』を競うものではないからである。しかし、授業の中で意見が分かれ、論争が起こると、それは一種のゲームの性格を帯びる。（中略）ありとあらゆる経験・知識を総動員する。驚くほど巧妙な理屈を考え出したりする。子どもは授業をゲーム化してしまうのである。このことは、仮説実験授業の授業としての成功のかなり大きな要因である」（藤岡信勝「ゲーム・クイズは授業に何をもたらすか」『授業研究』1985年11月号）

このような「授業書」による授業研究の方法に学んだ保健の授業実践では、「子どもたちは『問題』に真剣に取り組み、考え、そして意見を述べ、討論をする。楽しい、わかりやすい保健の授業が可能となった。従前は発問をしても反応してくれなかったクラスの子どもたちが、問題を考え、予想の選択肢を選んだ理由を発言するようになる」（保健教材研究会『新版「授業書」による保健の授業』大修館書店、1999年）といわれる。

そこで、本実践においては、このような「授業書」方式による保健授業の特色を生かしながら、そこで学んだ内容からさらに「新たな関連する疑問・課題を発見」し、「課題の解決に向かって自ら取り組む（主体的な判断・行動・問題解決）」ことを目指す課題学習への発展も意識した授業づくりを試みた。

2 課題学習の導入として「授業書」を使う
—授業書「＜オゾン層＞を守ろう！～『宇宙船地球号』と私たち～」—

1 授業の構想

(ア)『宇宙船地球号』をめぐる興味深い２つの事実

今回の授業のテーマは、学校における「環境教育」の一貫として、授業書「＜オゾン層＞を守ろう！～『宇宙船地球号』と私たち～」を作成した。

本授業書のねらいは、日常的な直感としての「無限大にありそうな空気の層（大気）」も、じつは地球的な規模から見れば、限りのある「きわめて薄い層」に過ぎないという事実（NHK取材班『新地球物語③宇宙船「地球号」のゆくえ』日本放送出版協会）を驚きをもって気づかせることにある。このような科学的事実の認識は、緊急的な課題といわれる「オゾン層の破壊による紫外線の害」「地球温暖化」「異常気象」「酸性雨」など、今日のあらゆる環境問題の理解の基盤となり得る（NHK取材班『地球大紀行（６）多重バリアーが守る生命の星』日本放送出版協会） からだ。

特に、1989年にヘルシンキで開かれたウィーン条約およびモントリオール議定書に関わる第１回締約国会議では、日本は20世紀末までに特定のフロンの全廃を表明した。この会議で採択されたヘルシンキ宣言では、参加国が遅くとも2000年までに規制対象フロンの全廃を申し合わせた。このようにフロンの規制に関しては、世界各国が足並みをそろえて地球を守ろうとしていることは周知のとおりである（朝日新聞「地球環境」取材班『地球環境最前線』朝日新聞社、1990年）。

＊

ところで、授業づくりの立場から、ここにきわめて興味深い「２つの事実」を発見することができる

その１つは、実は意外なことに、「フロンは、空気よりも重い気体である」ということだ。とすれば、当然のことながら疑問が生じる。

> では、なぜ「空気よりも重いフロン」が、はるか上空のオゾン層を地球的規模で破壊できるのか？

この疑問は言われてみれば、児童生徒のみならず、大人にとってもきわめて興味深い内容に違いない（NHK「クイズ百点満点」制作班『NHKクイズ百点満点・環境問題総集編』徳間書店、1990年）。

そして、そのような疑問への主体的な問いかけをとおして、

①「大気は太陽光線で暖められて膨脹して上昇し、上空で冷えて下降する」という＜対流＞の存在を改めて認識することができ、

②一方で、そのようなダイナミックな大気の動きが、実は「有害ガスや汚染物質までをも地球規模で拡散させる結果にもなっている」

という驚くべき“皮肉な事実”の発見へと誘う。

さらに２つめは、「地球を取り巻く大気の層の厚さは、地球の直径と比較すると、あまりにも薄い存在である」ということだ。例えば、仮説実験授業研究会による『授業書＜地球＞』によれば、「直径が130cmの風船を地球に例えた場合、地球のまわりの空気の層は１ミリ程度に過ぎない」という。板倉聖宣氏は言う。

「私たちの呼吸できる空気はそのくらいしかないわけです。こう考えると、『宇宙船地球号の空気を大切に』というのも切実になってきます」（板倉聖宣「授業書＜地球＞の構想と解説」『たのしい授業』創刊号、1983年）

また、板倉氏は、「宇宙船地球号」という表現の使用についても、「こういう授業をやっておくと、公害問題を考えるときの基礎のイメージができます」という。

＊

このように見ると、以上の２つの事実は、単なる“意外性のあるトピック”としてだけの価値に留まらない。多様でダイナミックな地球の環境問題を考えていくうえで、きわめて根源的な価値を有し、その後の学習活動（課題学習）の発展にとっても、さらに多くの「関連した課題の発見」を促し、その「課題解決」の指針に際しても適用・応用のきく一般的な概念を内包しているといえよう。

（イ）課題学習の導入として、なぜ「授業書」か

ところで、一般的に「授業書」方式による授業の特徴は、正解が特定される「クローズド・エンド」のパターンにある。この方式による授業では、日常的な直感や常識と鋭く対立する「問題」をめぐって、「予想－討論－実験（検証）」のプロセスをとおすことにより「科学的保健認識の成立」を目指すものである。

しかしながら、この方式で保健分野における多くの学習内容を扱うことは、実際の教育現場での「限られた時間枠」において困難を伴うことが多い。このことは、「授業書」に取り組む多くの現場教師が実感することでもある。

一方、「課題学習」の実施にあたっても、「事前に、生徒が自分なりの意見や疑問をもち、それを表明できるような授業、生徒の好奇心を引き出し、生徒が主体的に乗り込んでいけるような授業を行ない、課題学習に取り組める意欲と力をつけておく（P.4）」ことが必要なことは述べるまでもなく、また個人やグループによる「課題解決」のためのの時間を教育課程においてどのように位置づけ、確保するかは、「授業書」方式の場合と同様に大きな問題である。

そこで、本授業づくりでは、上に述べてきたような興味深い切り口から構成した「授業書」によって、まずは『宇宙船地球号』の乗組員として「地球環境の将来や人類の危機や課題」を「驚き」をもって学び、その経験をバネに「自らの力で関連した課題を見つけ、主体的に調査・追究・判断し、その発表や討論をとおして課題解決への意欲化をはかる」ことを目指して、3時間にわたる授業を実践する。言い換えれば、「授業書」による授業を「課題発見への橋渡し（動機づけ）」としながら、以後の積極的な「課題学習（主体的な判断・行動・問題解決）」へ展開・発展させることを目指した保健授業モデルの一提案である。

2 授業の計画と実践

- 【教育内容研究】グローバルな視点からの「環境教育」の典型教材として、「フロンの問題」をテーマに教材を8年にわたり構想。その間、次の2つの視点からアプローチした。
  （ア）『NHK〔地球大紀行⑥〕多重バリアーが守る生命の星』（日本放送出版協会、1988年）並びに『宇宙船「地球号」のゆくえ』（日本放送出版協会、1989年）より地球環境と健康問題の深い関わりを保健教育内容の立場から検討すると共に、NHK・TV「クイズ百点満点」における「フロン特集」（『NHKクイズ百点満点·環境問題総集編』徳間書店、1990年）により教材の構成方法にヒントを得た。
  （イ）仮説実験授業研究会による『授業書＜地球＞』（板倉聖宣「授業書＜地球＞の構想と解説」『たのしい授業』創刊号、1983年）における「地球の大気の薄さ」をテーマとした教材構成（第1部：地球の表面の「問題3（空気の層は模型でどのくらいまであるか）」）を検討し、保健教育における「環境と健康の視点から新教材のフレームワークを構想。
- 【教材化】上の教育内容研究を踏まえて、「フロンの重さ」と「地球の大気の薄さ」を2本柱とした「環境と健康（人間の健康をその社会・活動と自然環境との相互関連）」の「授業書案」を作成。
- 【実験授業①】上の「授業書案」を用いて1996年～1998年にかけて、中学（8クラス）・高校（3クラス）及び大学（教員養成課程の授業：計430名）において実験授業を実施。その授業分析（「問題の具体性」「討論の模様」「討論前後の＜予想分布＞の変化」「教授行為」）、感想文の分析・検討から、学習内容の過多による内容精選の必要性が明確化。
- 【実験授業②】上の実験授業を踏まえて「授業書」の内容を精選・修正し、1998年10月に大分市A中学校（2学年、1クラス、40名）において「授業書」による授業を実施（10／30）。
- 授業後、一定の期間を与えてグループ別による「掲示ニュース」の共同制作に取り組ませ、さらに2時間にわたる発表会（質疑応答含む）を実施した（11／24及び12／1）。

以上のうち、【実験授業②】が今回の実践報告である。

本授業実践は、実践校における「テーマ：地球環境と私たち（A中学・環境教育月間）」の一貫として、「学級活動」の時間枠の中で実施された。今回は紙面の都合により、第1時の授業「＜オゾン層＞を守ろう！～『宇宙船地球号』と私たち～」の授業記録を中心に報告する。

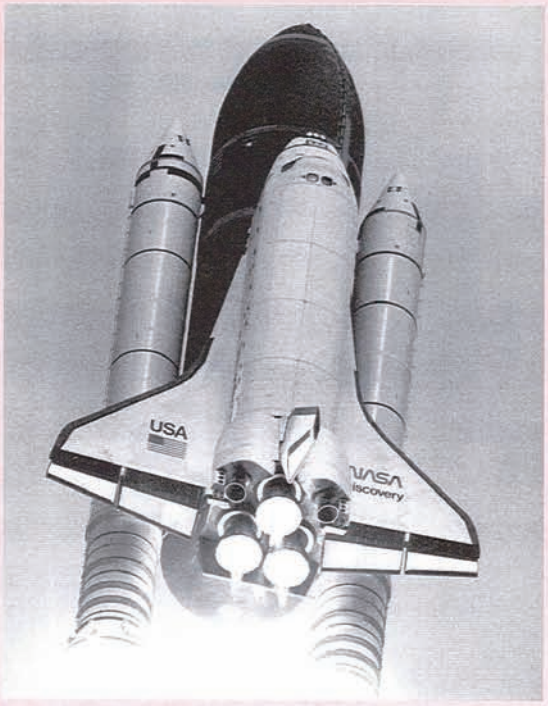
3 「授業書」と授業実践
—「＜オゾン層＞を守ろう！～『宇宙船地球号』と私たち～」（中学2年）—

☞ はじめに、NHK・TV『NHKジュニアスペシャル・地球大紀行（第6回）多重バリアーが守る生命の星』（NHKソフトウェアよりビデオ教材化）から、スペースシャトルの発射場面の映像をビデオにより放映する。

［1ページ］

宇宙への旅立ち！

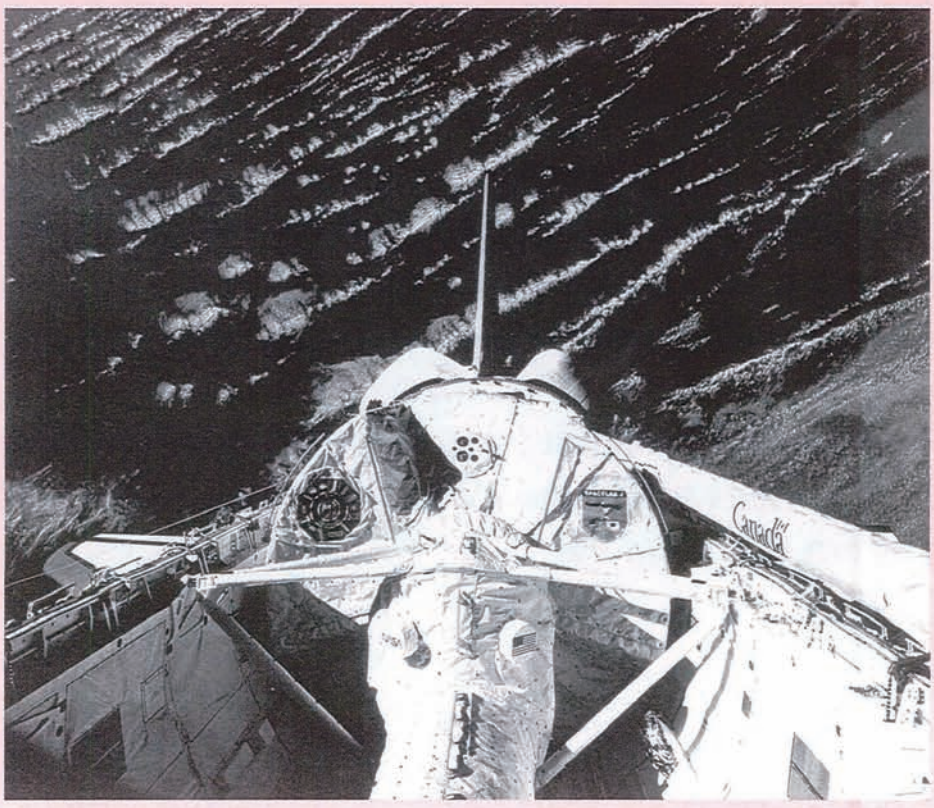
写真は、スペースシャトルに乗って、宇宙に飛び立ったところです。
シャトルのコクピットに座っていると、地響きのような振動が
からだにも伝わってきます。
いま、ものすごい爆音とともに、スペースシャトルは飛び立ちました。



〔写真提供：NASA〕

［2ページ］

打ち上げは大成功！
発射40分後には、あっという間に地上300kmの地点。
ここは、もうすっかり宇宙空間です。
眺めは壮大です！
青く輝く海。あざやかなオレンジ色の砂漠。
それらが真っ暗な宇宙を背景に、
今、眼下にまばゆいばかりに浮かんでいます。
こうやって見ると、
地球って、やっぱり宇宙に浮かぶ“青い星”なんだね。
「地球って、やっぱり青かったね！」
「このように地球が“青く光る”のは、
地球を取り巻く大気に“酸素”があるからだよ」
「大気って？」
「地面より上の空気の層のことだよ」

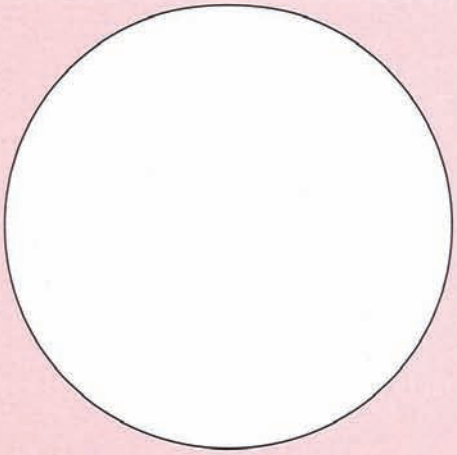


〔写真提供：NASA〕

☞ カラーの拡大写真を提示。ただし、次の【問題1】との関係から、「地平線が見えない写真」とする。

［3ページ］

【問題1】
それでは、もしも地球を「リンゴの大きさ」にたとえると、
大気はどれくらいの厚さになるのでしょう？
下の円を地球としたとき、それを取り巻く「大気の厚さ」を書き入れましょう。



T　では、グループごとに予想を見せ合ってみようか。

☞　ほとんどの生徒の予想は、下にその一部を紹介するように、いずれも大気の厚さの予想としては、地球を大きく取り巻く厚さであった。

なお、この正解として次ページの「お話（もしも地球を“りんご”にたとえると取り巻く大気の厚さは“りんごの皮”）」にもあるように、事実上、1ミリに満たない幅（0.2ミリ）の線を引くには、普通の鉛筆ではほとんど無理である。そこで、あえて「0.2ミリの線を引いてごらん」と指示することによって、改めて「大気の層の薄さ」に気づかせた。



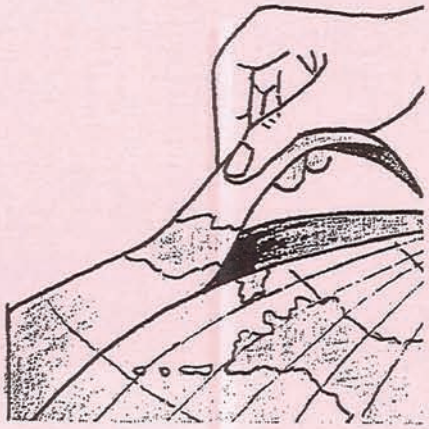
［4ページ］

もしも地球を“りんご”にたとえると
取り巻く大気の厚さは“りんごの皮”

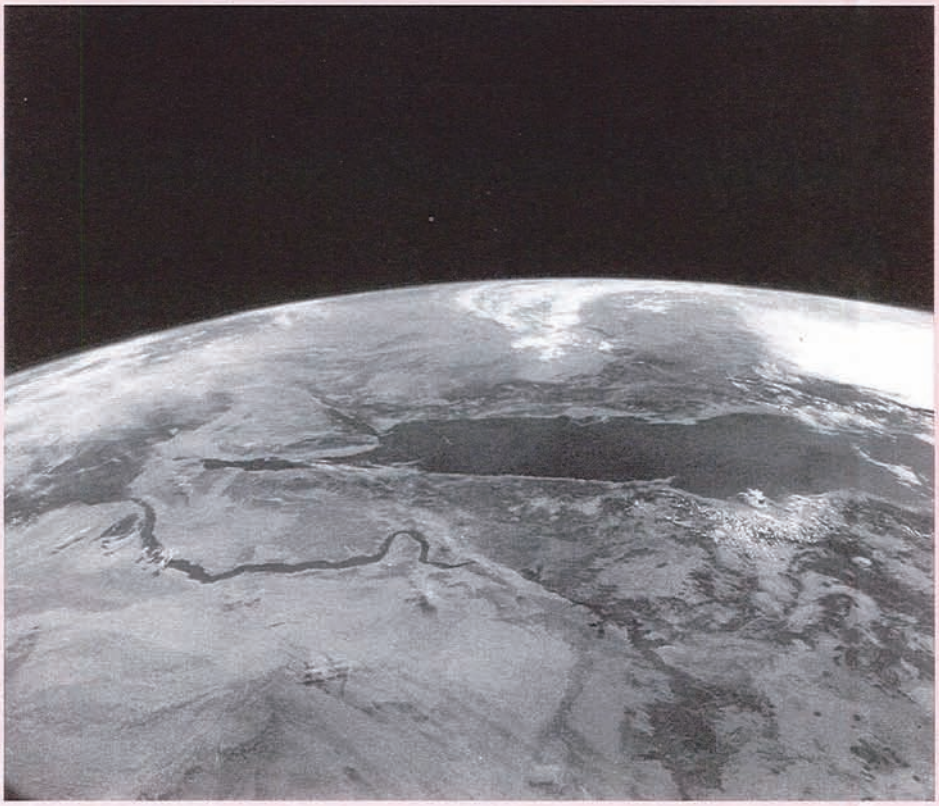
「もしも地球をリンゴの大きさとするなら、
大気はその“皮の厚さ（0.2ミリ）”にしかならないんだよ」
「えっ！“大気の層”って、そんなに薄いの…」

下は、宇宙から見た大気の層です。
この写真では、地球のふちの部分のおよそ１ミリの幅のところが、大気の層になります。
だから、地球をりんごにたとえると、
わずか１ミリにも満たない薄さ（0.2ミリ）なのです。

ところで、太陽から放出される強力な紫外線は
私たちの皮膚を通過して内部の細胞をこわしたり、
遺伝子をキズつけたりして、健康に害を及ぼします。
その有害な紫外線から私たちを守ってくれているのが、
大気中にあるオゾン層です。



生物が呼吸できる空気の層は、こんなに薄い



〔写真提供：NASA〕

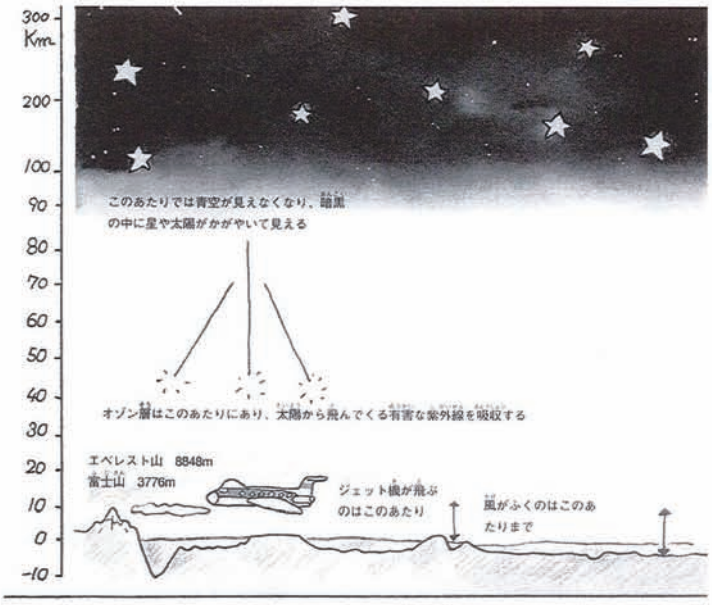
［5ページ］

＜オゾン層＞は、地球のパラソル
＜オゾン層＞ができて、はじめて地上の生物は栄えた!!

ひときわ強く輝く太陽の光。
その太陽からは、さまざまな波長のエネルギーが放出されています。
その中でも強力な紫外線は、
皮膚を通過して内部の細胞をこわしたり、遺伝子をキズつけたりして、
私たちの健康に害を及ぼす可能性があります。
でも、大丈夫。
「成層圏」という所にある＜オゾン層＞によって、
有害な紫外線は地上に届く前に、ほとんどカットされるからです。

ところが、いまこの＜オゾン層＞をめぐって、
大変心配な問題がクローズアップされています。
冷蔵庫やスプレーなどで広く使われている「フロン」という物質が、
なんと上空を取り巻く＜オゾン層＞をこわしてしまうというのです。

【大気の層】

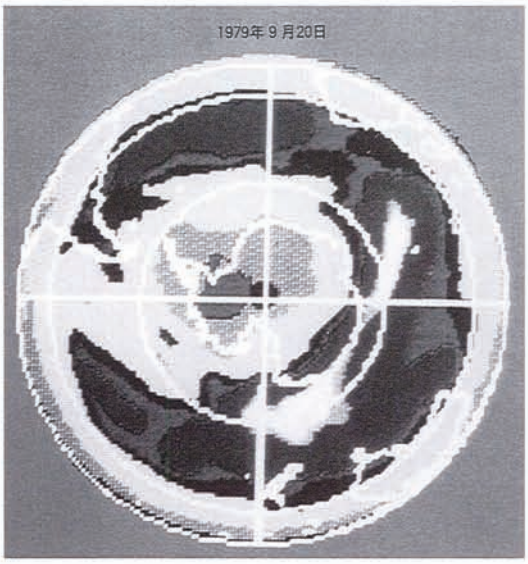


●便利な生活を支えてきた「夢の物質・フロン」
フロンガスの平均寿命は約100年。
大変壊れにくく、また無害なガスとして、
これまでスプレーをはじめクーラー、テレビ、冷蔵庫など
さまざまな電気製品に使われてきました。
それは、あまりにも便利なガスとして、
「夢の物質」「20世紀最大の発明」とも称されてきました。

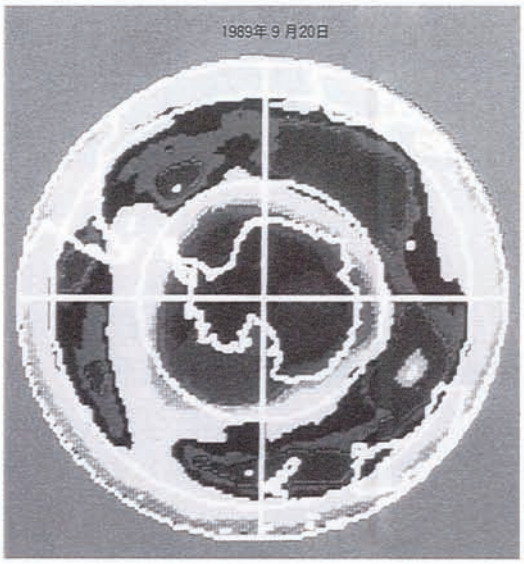
［6ページ］

＊

ところが、このフロンが分解されないまま成層圏にたどりつき、
その化学変化によって＜オゾン層＞をこわすということがわかってきたのです。



1979年９月



1989年９月

アメリカの人工衛星ニンバス７号が測定した南極上空の＜オゾン＞の量では、1979年とくらべて、10年後の1989年には上空の＜オゾン＞が明らかに減っていたことが確認された。

（『〔地球の環境問題シリーズ⑥〕フロンガスがオゾン層をこわす～紫外線をふせぐオゾン層～』ポプラ社、p.18～19より）

【問題２】

かつて、私たちの生活に密着したさまざまなスプレーから“シュッ”と空中に放出されたフロン。それでは、このフロンの重さはどれくらいなのでしょう。

（予想）ア、空気より重い
イ、空気とほぼ同じ
ウ、空気より軽い

T　では、予想の理由を聞いてみようかな。はじめに（ア）を選んだ人から、どうかな？

C　なんとなくだけど…。スプレーの下に溜まっているから。

T　えっ？じゃあ、どうして、上に上がっていくのかな？

C　空気に触れると、反応して、軽くなる…。

T　なるほど。それなら、わかるね。では、（イ）を選んだ人の理由は？

C　やっぱり、空気中に出ると反応して軽くなる。

予想分布	
ア、空気より重い	1
イ、空気とほぼ同じ	3
ウ、空気より軽い	35

☞ 教師はいずれの「予想」にも、あえて「肯定的」に反応している。これによって、「少数派」も安心して意見を述べることができる雰囲気が形成されるようだ。

T　なるほど。では、（ウ）を選んだ人の理由は？
C　軽くなきゃ、おかしいよ。上空に上がっていくから。
T　うん、そうだよね。
T　では、いろいろな考えが出たから、もう１度だけ、予想の変更を認めることにします。

	予想分布の変化
ア、空気より重い	1 ⇒ 2
イ、空気とほぼ同じ	3 ⇒ 6
ウ、空気より軽い	35 ⇒ 31

［7ページ］

地球の危機！フロンによる＜オゾン層＞の破壊

私たちの生活に密着したスプレーから
“シュッ”と空中に放出されたフロン。
ところが、このフロンの重さは「空気より重い」のです。
【問題３】
あれれっ？フロンは「空気より重い」？
だったら、どうして成層圏のようなあんな高い所まで上って行けるのでしょう？

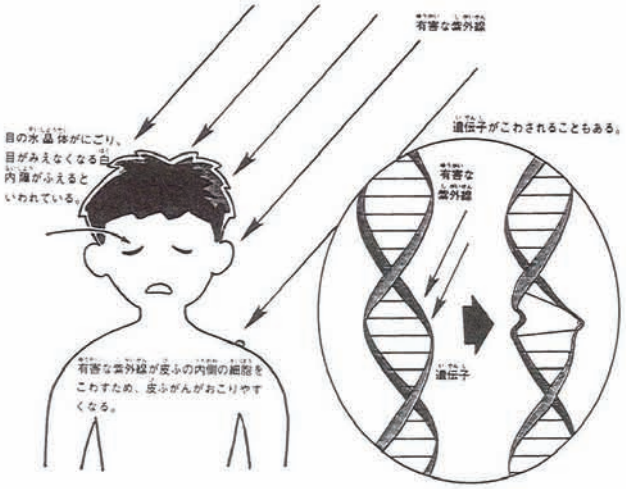
もしも、＜オゾン層＞がなくなったら…

もしも、地球を取り巻く＜オゾン層＞がなくなったら――――

当然、大量の紫外線が地表面にふりそそぎ、硬い鱗や殻におおわれたゴキブリなどを除いて、地上の生物のほとんどは絶滅します。

また海面下10mくらいまでは、魚もすめなくなるでしょう。

人間のからだへの影響



有害な紫外線は皮膚の外側を通過して内部の細胞をこわします。また、遺伝子をキズつけたり、皮膚がんをおこしたり、老化を早めたりします。

（『〔地球の環境問題シリーズ⑥〕フロンガスがオゾン層をこわす～紫外線をふせぐオゾン層～』ポプラ社、p.27より）

T　さて、どうだろう。グループで出た考えを発表してくれる？
　　まずは、１班はどお？
C　太陽の熱で蒸発して、気化するから。
C　やっぱり、空気と混ざると化学反応で軽くなる。
C　気流に乗って舞い上がる。
C　時間が経つと、だんだん軽くなる。
C　えっ～、全然、わかりません・・・。

［8ページ］

＜オゾン層＞破壊の秘密

「空気より重いフロン」は、
どうして成層圏のようなあんな高い所まで上って行けるのでしょう？
もっともな疑問ですね。



その謎を解くキーワードは、空気の「対流」です、
　①大気は太陽の光で暖められて膨脹し、
　②上空で冷えて下降する
という「対流」をいつもくり返しています。
そこで、このような大気の動きに乗って、
フロンも上空の＜オゾン層＞まで達してしまうのです。
そして、地上よりも、さらに強力な紫外線と出会って、
分解を始め、塩素原子を放出します。
この塩素原子の破壊力は大きく、原子１個で数万個のオゾンが壊されてしまいます。
また、地上で放出されたフロンは、 成層圏の上のほうに届くまでには10年以上もかかります。
しかも、フロンの平均寿命は、なんと約100年。
だから、たとえ今すぐにフロンの使用をやめたとしても、今後何10年にわたって、なおオゾンは壊され続けていくのです。



［9ページ］

地球が皮膚病になった！

～『宇宙船地球号』と共に生きるために～

私たちの住む地球は、『宇宙船』です。
秒速29.78kmという猛スピードで、太陽のまわりを回っているのです。
でも、この『宇宙船地球号』は、
とても薄い空気の膜（大気の層）でおおわれているだけです。
それが最近、心配なことがわかってきました。
まるで“皮膚病”になったというのです。
オゾン層にもっと大きな穴が空いたら、
21世紀の私たちは、どうなるでしょうか…。



〔写真提供：NASA〕

【課題研究】

そこで、いまオゾン層を守るために、世界中の国々が集まって協議をしています。
いや、オゾン層の問題ばかりではありません。
最近、よく耳にする「地球温暖化」とは？「酸性雨」とは？「異常気象」とは？
いったい、世界中の人々は、いまどのようなことについて話し合っているのでしょう。
そして、私たち１人ひとりにできることとは…？
それでは、グループで、どのようなテーマがあるか話し合って、
各自で資料（新聞記事、本、雑誌など）を集め、発表しあいましょう。

［　　］

●「掲示ニュース」の共同制作及びグループ発表会（2時間）

以上の授業を踏まえた後、一定の期間（3週間）を与えてグループ別による「掲示ニュース」の共同制作に取り組ませ、さらに2時間にわたる発表会（質疑応答含む）を実施した。

9グループによる「発表テーマ」は以下のようなものであった。

①トキ、すでに遅し…？
②今、地球が危ない！地球防衛隊出動
③怪獣ゴミラーＶＳ．リサイクルマン
④地球温暖化は進行していた
⑤地球環境ニュース～学校の焼却炉は今～
⑥すっぱい雨が降る
⑦大自然の逆襲
⑧酸性雨で地球が死んでいく
⑨地球を守る大切な日傘～オゾン層～

このように9グループのうち、導入の授業で扱った「大気の層の薄さ」の問題に直接関連したテーマは「5つの班」、直接は関連しないテーマは「4つの班」であった。

2時間にわたる発表会の手順は下のとおりである。

①作品発表
②質疑応答（司会は教師）
③各グループでディスカッションにより、「ベスト3」を選出する（その際、「所属のグループ」は選出対象としないこととした）。
④各グループで「ベスト3」の「選出理由」のレポートを作成し提出する。いわば選出プロセスにおけるグループ討議内容の公表である。

この中で①②の「発表と質疑応答」の重要性はもとより、③④におけるグループ・ディスカッションも、各グループの発表内容を「個人の印象」のみならずグループ討議によって検討するため、大変意義のある試みだった。

以下、紙面の都合により、投票により選出された「ベスト2」について講評を含めて紹介する。

〔1位〕　「怪獣ゴミラーＶＳ．リサイクルマン」

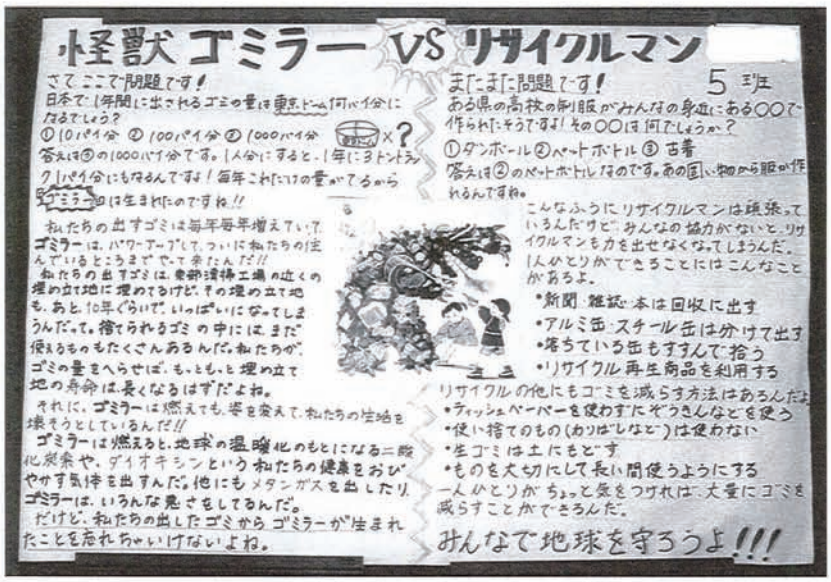
わかりやすいキャラクターの設定による「緊張関係」が大変好評だった。2つのクイズは、キャラクター役の生徒が提示。「問い」と「答え」の対応関係が明瞭であり、キャラクター設定の意図が明確。その「予想選択」の表明は各グループ毎の討議による発表とした。

また、ゴミ問題に関しては、

「前の授業でも習ったように、ゴミラーは地球を取り巻くオゾン層にも大きな穴を空けるのです」

として、口頭であるが「フロンの廃棄」についてもあえて触れた。このことは、「授業書」による導入授業との関連を示唆したものであり、「授業実践の相乗効果」の観点からもきわめて意義深い。

〔Q－1〕日本で1年間に出されるゴミの量は、東京ドーム何杯分になるでしょう？ ①１０杯分 ②１００杯分 ③１０００杯分	〔Q－2〕ある県の高校の制服が、みんなの身近にある○○で作られたそうです！その○○とは何でしょうか？ ①ダンボール ②ペットボトル ③古着



〔2位〕　「今、地球が危ない！地球防衛隊出動」

「史上最大の毒物（ダイオキシン）」「オゾン層が食べられる」「毛布を着すぎた地球（温暖化）」「すっぱい雨がふる」の4部により構成。このうちの3部は「地球を取り巻く薄い大気の層と」不可分の関係にあり、「授業書」による導入授業に影響されたという。



4 授業者の感想と評価

授業者であり、当該クラスの学級担任でもあるＳ先生より、次のようなコメントを寄せていただいた。

「はじめに、この度、本校の環境教育月間『テーマ：地球環境と私たち』の一貫として、大変興味深い授業案のご提供をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。実は、本校は市内の中学校でも特に多くの生徒指導上の問題を抱えておりまして、日頃より生徒の授業態度はもとより、席順にも細心の注意を払わざるを得ない状況でやっております。そのような中で、３時間にわたる授業実践は、生徒のみならず私にとりましても誠に貴重な経験となりました。

まず『授業書』については、事前にご指導いただいておりましたが、それでも大きな不安をもって授業に臨みました。しかし、これまでの教師主導の授業運営とはまったく異なり、いつの間にか、生徒たちがいたるところで活発に討論を始めた様子を目の当りにして、普段の自分自身の教材研究の不足を痛感させられると共に、教師の働きかけ次第では、こんなに生徒の反応が違うものかと思い知らされました。特に用意された各〔問題〕で大多数の生徒の予想が次々と覆される様子には、授業者自身が驚かされたというのが正直な印象です。

次に２時間にわたるグループ発表では、『授業書』による授業の時点から同一のメンバーの編成にしましたが、クラス内の人間関係を配慮したものとしました。ただ、学内事情から、その詳細を公にできないことをお詫びいたしますが、当初心配されたメンバーの協力関係も、各作品の出来具合に見られますように予想以上の成果がありました。

勿論、この３時間の授業でもって、即、生徒たちの環境問題に対する意識と行動が目に見えて変わることは望めませんが、これまでの教師主導の授業に慣れ、訓話を中心とした生活指導に嫌気がさしていた生徒たちにとりまして、『授業書』による「考える保健授業」やグループ編成による『掲示ニュース』の作成は、きわめて新鮮な経験となったことは確かです。指導を終えて１ヵ月たちますが、あの共同制作の取り組みの経験は、その後のクラスの雰囲気にも好影響をもたらしているような気がいたします。とりとめのない感想となりましたが、ご報告とさせていただきます。」

5 ま と め

それでは、「授業者による感想と評価」を基としながら、本実践の成果と課題を次の２つの視点からまとめてみよう。

１つは、「授業書」による保健授業のねらいである「問題－予想－討論－検証」のプロセスをとおした「考える授業」がある程度達成されたのではないか、ということである。その根拠となるデータとしては、一般的には、いわゆる「生徒の感想文」や「授業後のアンケート調査」

が重視される傾向にある。ここではそれに加えて、とくに授業中の生徒の「＜予想分布＞の分散」から生じる「討論内容の論理分析」や、「討論後の＜予想の変更＞」に伴う思考過程にも焦点を当てた教授学的な視点から考察する。

まず、授業記録では、【問題１】をめぐって、次のような討論が展開されている。

予想分布	
ア、空気より重い	1
イ、空気とほぼ同じ	3
ウ、空気より軽い	35

T　では、予想の理由を聞いてみようかな。はじめに（ア）を選んだ人から、どうかな？

C　なんとなくだけど…。スプレーの下に溜まっているから。

T　えっ？じゃあ、どうして、上に上がっていくのかな？

C　空気に触れると、反応して、軽くなる…

T　なるほど。それなら、わかるね。では、（イ）を選んだ人の理由は？

C　やっぱり、空気中に出ると反応して軽くなる。

☞教師はいずれの「予想」にも、あえて「肯定的」に反応している。これによって、「少数派」も安心して意見を述べることができる雰囲気が形成されるようだ。

T　なるほど。では、（ウ）を選んだ人の理由は？

C　軽くなきゃ、おかしいよ。上空に上がっていくから。

T　うん、そうだよね。では、いろいろな考えが出たから、もう１度だけ、予想の変更を認めることにします。

ここで教師は、下線部の「軽くなきゃ、おかしいよ。上空に上がっていくから」という「圧倒的多数の論理」の後に、あえて「予想の変更」を認めている。ところが、その後、興味深い事態が生起する。次のような「討論後の予想分布の変更」である。

	予想分布の変化
ア、空気より重い	1 ⇒ 2
イ、空気とほぼ同じ	3 ⇒ 6
ウ、空気より軽い	35 ⇒ 31

きわめて興味深いことに、「大多数の予想」から、４名の生徒があえて「少数派」に鞍替えしているのである。これは何を意味するのか。

それは、まさに「少数派の論理」に共感あるいは納得した結果であり、何よりも生徒たちが「自分の頭」で主体的に考えた証しである。

そして、このような「予想分布の変更」の事実は、事後の感想文との綿密な照合により一層の分析を可能にする。例えば、（ウ）から（イ）へ「予想変更」した３人のうちの１人（K君）

は、「授業後の感想文」で次のように述べている。

> 今日の授業のクイズは、最初はテレビみたいだなと感じてたけど、それよりももっとおもしろかった。○君と△君のたった２人が正解だったから。

ここで、補足説明が必要となる。A先生の話によれば、正解者の○君と△君は普段はあまり目立たない生徒だという。しかも、たった１人で（ア）を予想した○君に比較的気の合う△君が同調して「予想変更」した結果、この２人が正解となったというのだ。

A先生は言う。

> あそこで、クラスの雰囲気がいっきに変わりました。何しろ、普段成績の良い子たちが全員不正解だったんですよ。

すなわち、一見些細とも思えるこの出来事が、全３時間にわたる生徒たちの積極性を呼び起こす前半のキーポイントとなったというのだ。

一般に「授業の評価」としては、授業後の評価アンケートを基にした統計的な見地からの検討がなされることが多い。そのような評価方法に加えて、上で考察したような教授学的な視点からの評価の試みは、具体的な「授業場面」における討論（発言）内容を「論理的に分析」したり、個々の生徒の思考過程を「追跡的に分析・検討」することにより、統計的な手法のみでは明らかにできない「授業過程の立体的な分析・評価」への新たな可能性を開く視点と思われる。

一般論として、「授業後の感想文」の扱いは、単に「羅列」「紹介」するだけの場合が多いといえる現状において、今後は以上のような視点からの授業の立体的な分析・評価の観点も必要であるといえるだろう。

＊

そして２つは、課題学習の導入教材としての「授業書」方式についての検討である。課題学習を進めるにあたっては、「事前に、生徒が自分なりの意見や疑問をもち、それを表明できるような授業生徒の好奇心を引き出し、生徒が主体的に乗り込んでいけるような授業をおこない、課題学習に取り組める意欲と力をつけておくことが必要」（本書、P.4）であることは述べるまでもない。

そこで、「生徒の知的好奇心を引き出し、課題学習に取り組める意欲と力」を触発させるために、その導入で「授業書」によるインパクトのある「問題」を設定し、以後の自らの積極的な「課題発見」から「主体的な判断・行動・問題解決」へ展開させることを目指したわけである。

この取り組みについては、既に紹介したように「授業書」方式による授業で学んだ

> 地球を取り巻く大気は、宇宙から降りそそぐ有害な紫外線などから地上の生命を守る大切なバリアーでありながら、実は想像以上に薄くてデリケートな存在である。

という気づきと驚きが明らかに＜起点＞となり、その経験がその後の「地球環境問題をめぐる関連テーマの設定・追求（主体的な判断・行動・問題解決）」にあたっても大きな影響を及ぼしていたことが伺えた。ともあれ、「自らの課題を見つけ、主体的に判断・行動して、よりよく問題を解決する力」の育成を目指す課題学習の「導入」方法については、今後、より一層の創意工夫と成果の蓄積が期待される。

謝　辞

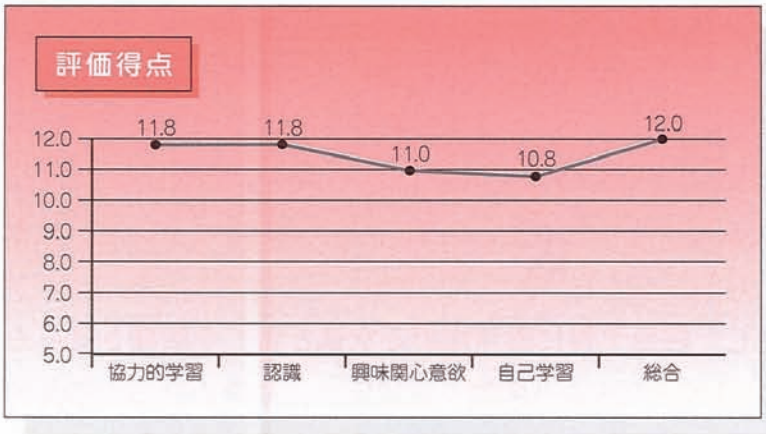
本教材におけるNASA（アメリカ航空宇宙局）の写真引用にあたり、NASAジャーナリスト・若居　亘氏に大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。

評価班からの評価

評価結果

評価・アンケートの実施は、1.「授業書」による授業、2.課題学習（壁新聞作成）、3.課題学習（発表会）という、3時間構成の授業が終わった時点において行った。（評価票略）

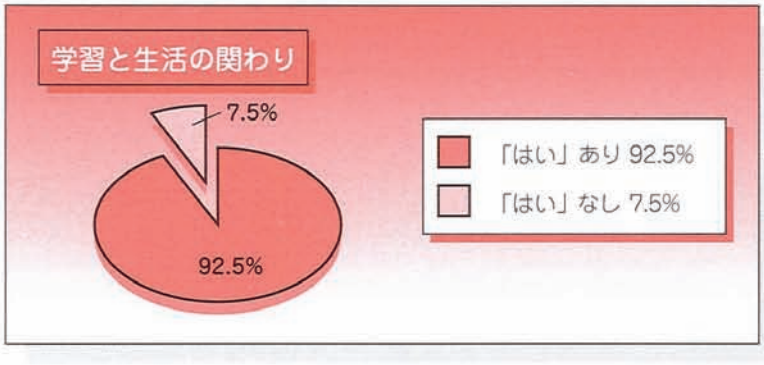
(1) 評価得点について



「協力的学習」の観点、「認識」の観点、また「興味・関心・意欲」、「自己学習」、「総合」のすべての得点が高い値を示しており、多くの生徒がそれぞれの観点について肯定的な評価を行っていることが明らかになった。

(2) 学習と生活の関わりについて（F.の評価観点）

「学習と生活の関わり」の観点において、92.5%の生徒がその関わりを認めていることは、今回の「授業書」と「課題学習」を取り入れた学習内容が、いわゆる「学校知（P.26参照）」



としての批判に当てはまらない、『日常の生活場面で役立つ知識や態度を身に付ける学習』として、生徒たちに受け取られたものと推察される。今回の「環境保全」の学習内容が、生徒の現在・未来の生活場面において、環境を守りそして自分の健康を守るために意義あるものであると、生徒たちに判断されたものと推察される。この数値の高さは「「授業書」による保健の授業」と「課題学習」を組み合わせて実施する授業構成の有効性のひとつを示しているものと言えよう。

参考文献

1）保健教材研究会・編、新版「授業書」方式による保健の授業、大修館書店、1999
2）保健教材研究会・編、続「授業書」方式による保健の授業、大修館書店、1991
3）板倉聖宣、仮説実験授業～授業書＜ばねと力＞によるその具体化～、仮説社、1974
4）板倉聖宣、仮説実験授業のABC、仮説社、1977
5）板倉聖宣、科学と方法、季節社、1970
6）板倉聖宣、授業書＜地球＞の構想と解説、たのしい授業、創刊号、1983
7）庄司和晃、仮説実験授業の論理、明治図書、1988
8）庄司和晃、仮説実験授業と認識の理論、季節社、1976
9）庄司和晃、科学的思考とは何か、明治図書、1978
10）NHK取材班、〔新地球物語③〕宇宙船「地球号」のゆくえ、日本放送出版協会、1988
11）NHK取材班、〔地球大紀行⑥〕多重バリアーが守る生命の星、日本放送出版協会、1989
12）NHK取材班、〔地球汚染①〕大気に異変が起きている、日本放送出版協会、1989
13）NHK「クイズ百点満点」制作班、NHKクイズ百点満点・環境問題総集編、徳間書店、1990
14）朝日新聞「地球環境」取材班、地球環境最前線、朝日新聞社、1990
15）桐生広人・山岡寛人、〔調べ学習に役立つ環境の本③〕オゾンホールの謎、童心社、1999
16）川口啓明、〔地球環境・子ども探検隊④〕ぼくらは大気のパトロール隊、フレーベル館、1997
17）〔地球環境・子ども探検隊⑧〕ぼくらのミニ地球をつくろう、フレーベル館、1997
18）トニー・ヘアー（三原道広・訳）、フロンはなぜオゾン層をこわすのか？、偕成社、1992
19）佐藤群巳（監修）、オゾン層の破壊をふせごう～日光・大気・健康～、ほるぷ社、1998
20）奈須紀幸・伊藤和明（編）、〔地球の環境問題シリーズ⑥〕フロンガスがオゾン層をこわす～紫外線をふせぐオゾン層～、ポプラ社、1991

Ⅳ

ライフスキル学習をどう進めるか
―「喫煙・飲酒・薬物乱用防止」を通して―

1 今日の健康課題とライフスキル教育

本実践においては、青少年の現在および将来の健康に深く関わっている喫煙・飲酒・薬物乱用問題を取り上げ、その防止のためにライフスキル、とりわけ効果的なコミュニケーション能力を育てることに主眼を置いたプログラムを開発し、その形成的評価を行うことを主な目的としている。以下では、本実践の背景について述べる。

1 今日の健康課題と学校健康教育の役割

今日の日本や欧米諸国では、その死亡原因の多くが、人の取る行動と深い関係がある。

米国の疾病管理・予防センター（CDC）は、青少年の現在および将来の健康に深く関わる行動を「危険行動」という概念でまとめ（表１）、こうした行動が習慣化する前に、健康教育を行うことの重要性を指摘している。

表1　青少年の6つの危険行動（CDC、勝野眞吾訳）

1．故意または不慮の事故に関する行動
2．喫煙
3．飲酒および薬物乱用
4．望まない妊娠、HIVを含む性感染症に関係する性行動
5．不健康な食生活
6．運動不足

（勝野眞吾．思春期の危険行動を予防する健康教育ライフスキル．健康な子ども．28(10)、12～13、1999）

こうした点から、新しい学習指導要領において、

1）保健学習が小学校３年から実施される

2）「総合的な学習の時間」において、テーマとして「福祉・健康」が取り扱われる

3）内容面では、生活習慣病の予防、心の健康の増進、薬物乱用や性の逸脱行動など問題行動の防止等に重点が置かれる、

以上のような改訂がなされたことの意義は大きい。

2 従来の健康教育の問題点と改善の方向性

残念ながら、これまで我が国の学校で実施されてきた健康教育は、必ずしも先に述べたような社会的ニーズに応えられるものではなかった。その最大の理由は、これまでの健康教育のほとんどが「知識中心型」もしくは「脅し型」の健康教育であったことにある。もちろん健康教育において知識を提供することは意義のあることである。しかし、知識を獲得するだけでは必ずしも行動に結び付かない。なぜなら、青少年の危険行動に限らず、人の取る行動には多くの要因が関係しており、知識はそうした要因の一つでしかないからである。

今日の健康教育プログラムの開発に大きな影響を与えたグリーン（Green LW）は、健康教育に盛り込むべき内容を考える際に、行動形成に関わる要因を先行因子（動機づけに関わる要因）、促進因子（動機を行動に結び付ける要因）、強化因子（行動の持続に関わる要因）の3つのグループに分けることが有効であるとしている。図1は、こうした考えのもとに考案されたプリシードモデルを、喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育に適用した例である。

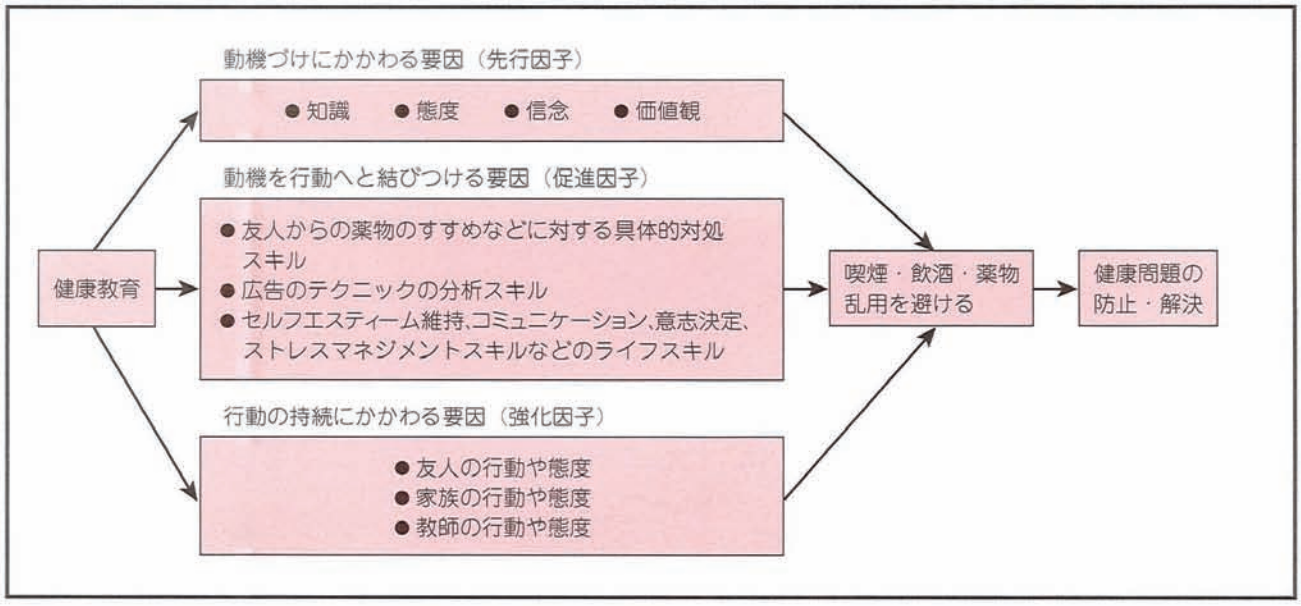


図1　プリシードモデルの喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育への適用
（日本学校保健会編．新訂　喫煙・飲酒・薬物乱用防止に関する指導の手引　小学校編．第一法規出版、1997）

図1は、知識はある行動を取ろうという動機付けに深い関わりを持っているが、実際の行動に結び付けるためには、友人やマスメディアの圧力に対処するための具体的スキルとともに、セルフエスティーム（健全な自尊心）の形成、コミュニケーション、意志決定、ストレスマネジメントスキルなど、人が生きて行く上で不可欠な基本的・一般的心理社会能力（ライフスキル）を育てることが不可欠であることを示している。

3 ライフスキル教育の背景とその有効性

欧米においてライフスキル教育が行われるようになったきっかけは、1950、60年代の伝統的喫煙防止教育の失敗であった。この時期の喫煙防止教育は、ただ単に喫煙の影響に関する情報を提供したり、動物実験など、よりインパクトのある手法を用いて恐怖心を引き起こし、喫煙開始を防止しようとした（図２）。こうした教育の基礎にある考えは、喫煙に関する正しい知識を持ち、否定的な態度を形成すれば、子どもたちは合理的な意志決定を下すだろうというものである。しかし、実際にはこうした方法によって喫煙を防止することはできず、助長する場合すらあった。

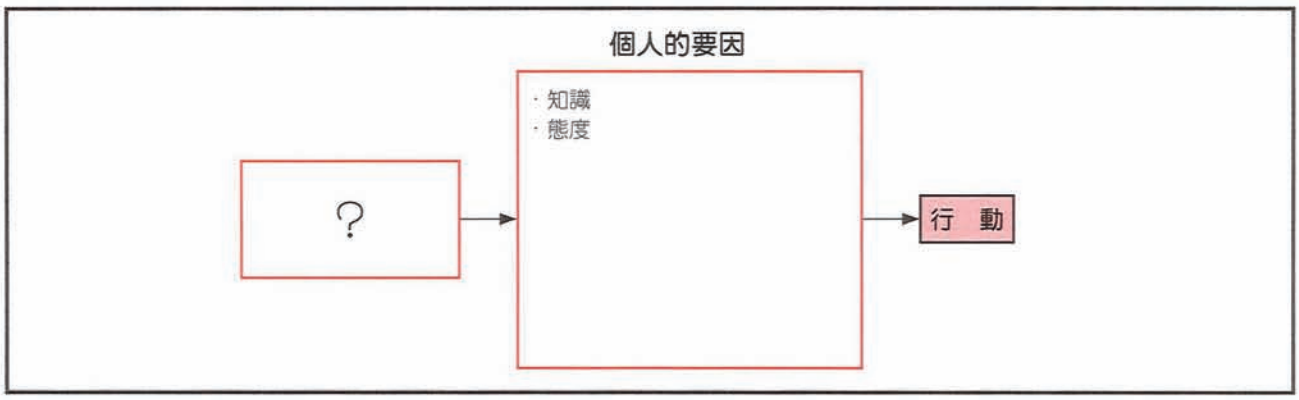


図2　伝統的喫煙防止教育
（JKYB研究会編．第7回JKYB健康教育ワークショップ報告書．1998）

「知識中心型」ないし「脅し型」の喫煙防止教育の失敗を踏まえ、70年代に青少年の喫煙行動形成に関わる要因についての研究が進んだ。まず最初に、青少年の喫煙開始には両親、きょうだい、友人などの周囲の人々の行動や態度、あるいはマスメディアなどの社会的要因が大きな役割を果たしていることが明らかになった（図３）。

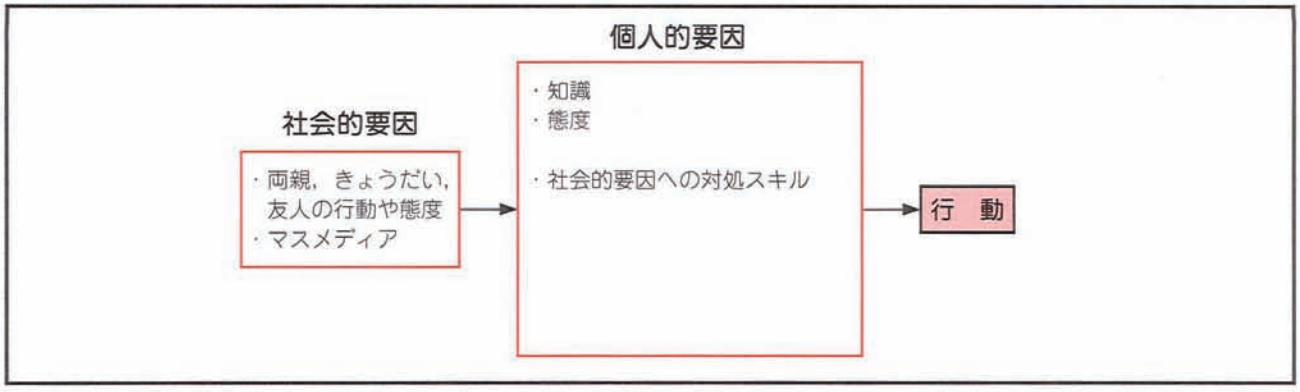


図3　行動形成に影響する社会的要因
（JKYB研究会編．第7回JKYB健康教育ワークショップ報告書．1998）

加えて、自分には能力や価値がないと感じていたり（低いセルフエスティーム）、自分の考えや気持ちを効果的に相手に伝えるコミュニケーション、感情やストレスを上手にコントロールするストレスマネジメント、問題状況において合理的に解決策を選択する意志決定など、日常生活の様々な問題に建設的かつ効果的に対処するのに必要な基本的心理社会能力（ライフスキル）のレベルの低い青少年が、社会的要因の影響を受けやすく、喫煙などの危険行動を取りやすいことが明らかになった（図４）。

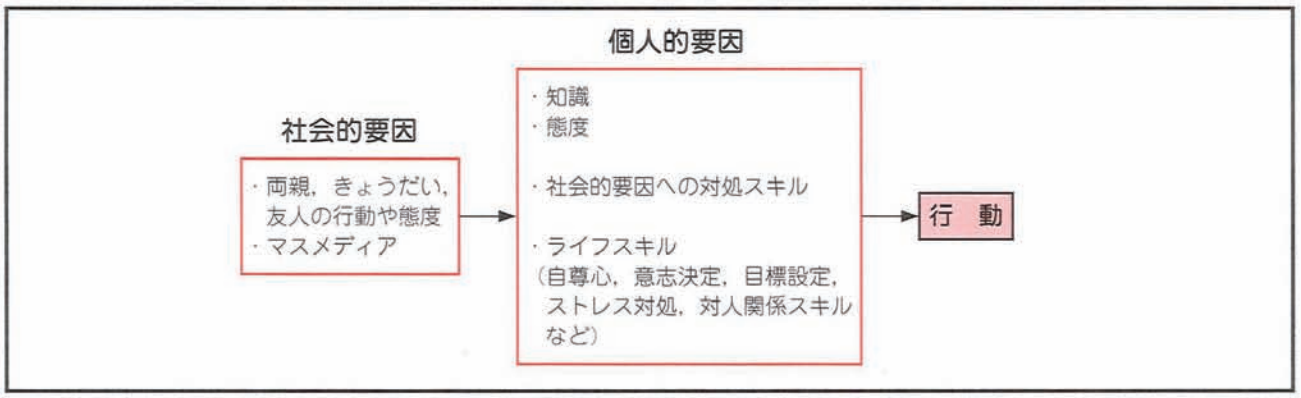


図4　行動形成に影響するライフスキル
（JKYB研究会編．第7回JKYB健康教育ワークショップ報告書．1998）

こうした行動科学の成果に基づいて、ライフスキル教育を1970年代に初めて取り入れたのは、コーネル医科大学のボトヴィン（Botvin GJ）であった。

ボトヴィンは、まず喫煙防止教育にライフスキル教育を導入して有効性を確認した後、飲酒とマリファナ防止の内容を含む全18時間の中学１年生用のLife Skills Training（LST）プログラムを完成した（表２）。

その後の評価研究によって、LSTプログラムは喫煙・飲酒・薬物乱用の防止に有効であり、長期間その効果が持続することが明らかになった。

表2　LSTプログラム
（川畑徹朗．今、なぜライフスキルなのか　養護教諭はどう取り入れたらよいか．健康な子ども、28(10)、9～11、1999）

（1）知識と情報	
1	喫煙：誤解と真実
2	喫煙の急性の生理的影響
3	飲酒：誤解と真実（オプション）
4	マリファナ：誤解と真実（オプション）
（2）意志決定	
5，6	効果的で責任ある意志決定の方法
7，8	たばこ・アルコール広告のテクニック分析
（3）目標設定とセルフエスティームの形成	
9，10	自己イメージと自己改善計画（８週間）
（4）不安への対処	
11，12	リラクゼーション、深呼吸、前向き思考
（5）社会的スキル	
13，14	コミュニケーション能力（言語・非言語）
15	社会的スキル１（基本的会話法、賞賛）
16	社会的スキル２（異性関係）
17，18	自己主張（仲間からの圧力への対処）

そして現在、喫煙・飲酒・薬物乱用、思春期妊娠やエイズを含む性感染症に関係する性行動などの身体的健康に直接つながる行動だけでなく、いじめ、暴力、不登校など、知的・情緒的・社会的発達に関係する危険行動にもライフスキル教育は適用され、その有効性が立証されている（図５）。言い換えると、文化的・社会的背景の違いを超えて、思春期の危険行動の背景には共通してライフスキルの問題が存在しており、ライフスキルの形成なくしては本質的な問題解決には至らないと考えられるようになってきている。

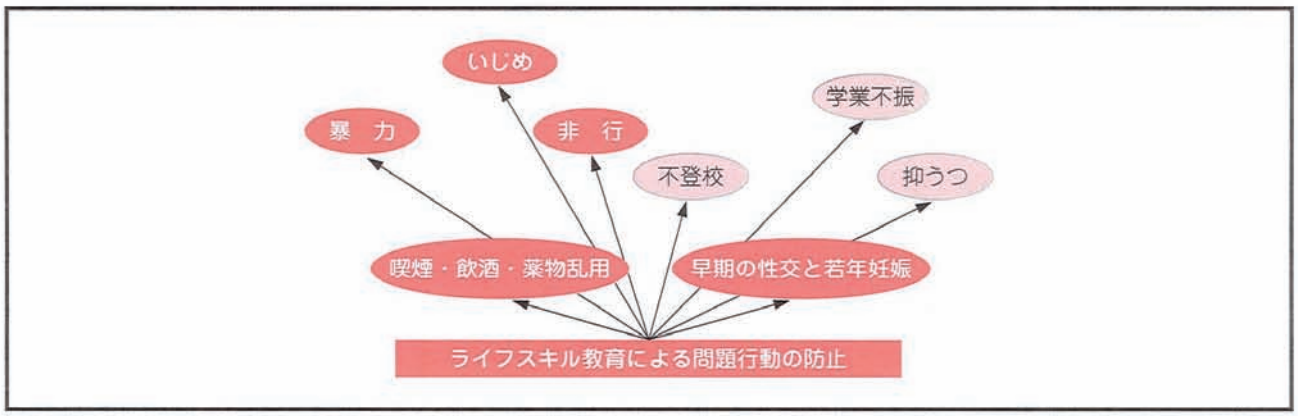


図5　ライフスキル教育の適用の広がり
（JKYB研究会編．ライフスキルを育む食生活教育．東山書房、1998）

ライフスキルの形成は、これからの学校教育の主要目標である「生きる力」の形成にも寄与するものと考えられている（図６）。「生きる力」の第一の要素と深い関わりのあるのが、目標設定スキルや意志決定スキルなどの認知的スキルであり、「生きる力」の第二の要素と深い関わりのあるのが、ストレスマネジメントスキル、対人関係スキルであると考えられる。また、「生きる力」の要素としては明示されていないが、高いセルフエスティームを持つことは「生きる力」の土台となるものである。

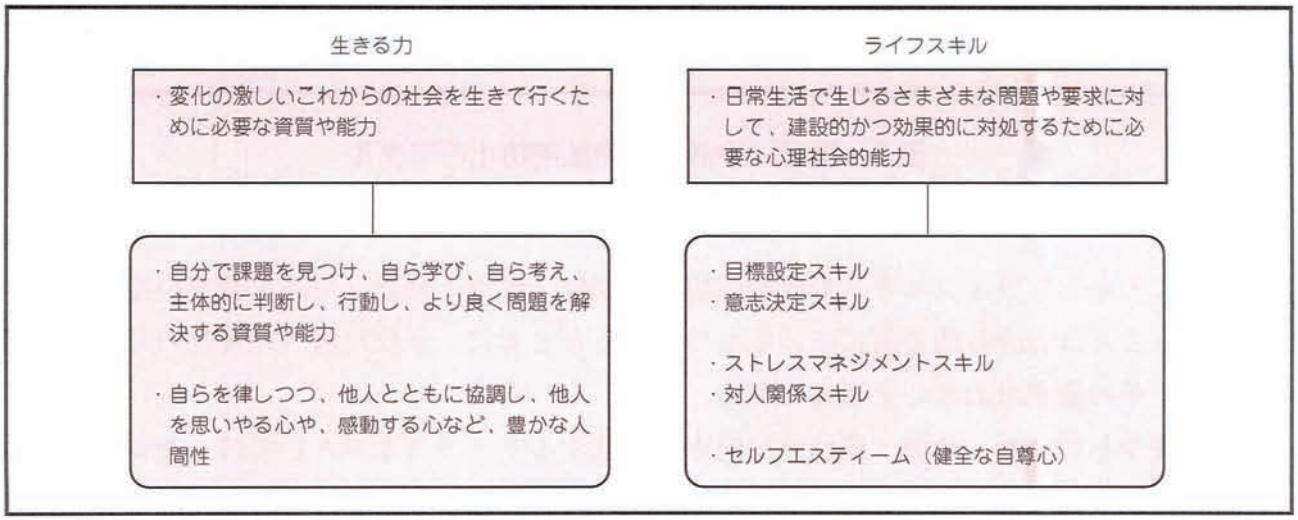


図6　「生きる力」とライフスキル
（JKYB研究会編．ライフスキルを育む食生活教育．東山書房、1998）

2 ライフスキル形成を重視する学習のモデルと実践 —「喫煙・飲酒・薬物乱用防止」を通して—

1 喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育の授業モデル提示の意義

既に述べたように、喫煙・飲酒・薬物乱用の防止は、今回の学習指導要領の改訂において最も重視されるようになった学習内容の一つであるとともに、行動科学の成果を積極的に取り入れることが求められている領域でもある。

また、日本学校保健会「喫煙・飲酒・薬物乱用防止指導研究委員会」は、喫煙・飲酒・薬物乱用問題を含む様々な危険行動を予防するための基礎として、小学校低学年から全ての子どもに対して、家庭や地域と連携しながら、教育課程全体を通じてライフスキルを形成することが必要であるとの基本構想の下に、喫煙・飲酒・薬物乱用防止と薬物乱用防止に関する指導手引書を開発している（図7）。

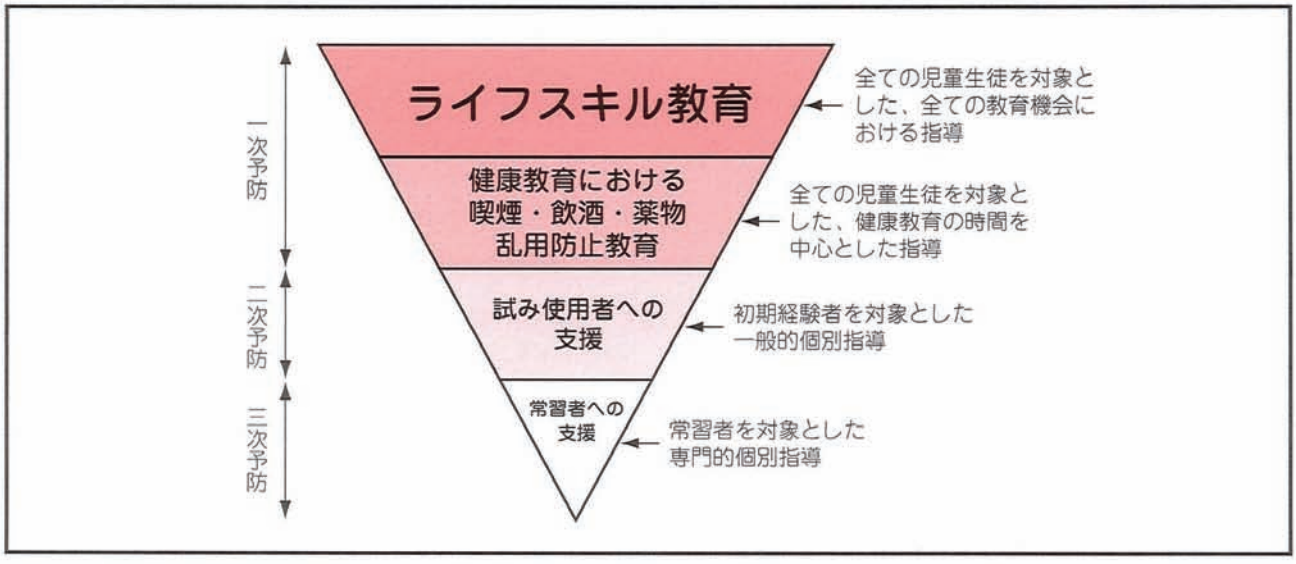


図7 喫煙・飲酒・薬物乱用防止のモデル
（川畑徹朗．喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育で重要なこと．体育科教育．45(11)、29～32、1997）

以上のことから、ライフスキル形成を重視する喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育の授業モデルを提示することは、今日的要請に応えるものであるとともに、学校現場への普及の可能性が極めて高く、その意義は大きいと考えられる。

なお、青少年の喫煙・飲酒・薬物乱用防止に関連するライフスキルとしては、セルフエスティームの形成、ストレスマネジメント、意志決定、目標設定などのライフスキルも重要である

が、その全てを取り扱うことはできない。そこでここでは、喫煙・飲酒・薬物乱用の直接的きっかけとして最も大きいのが仲間からの圧力であることを考慮し、自分の望まないことをするように人から圧力を受ける場面において、自分の気持ちを率直に表現し、自分の立場を主張するために必要な自己主張コミュニケーションスキルの習得を目指すこととした。

2 喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育の内容構成モデル

これまでの国内外の喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育の有効性に関する評価研究の結果に基づいて、内容の構成要素を４つに分類し、単元計画を立案した（図８）。

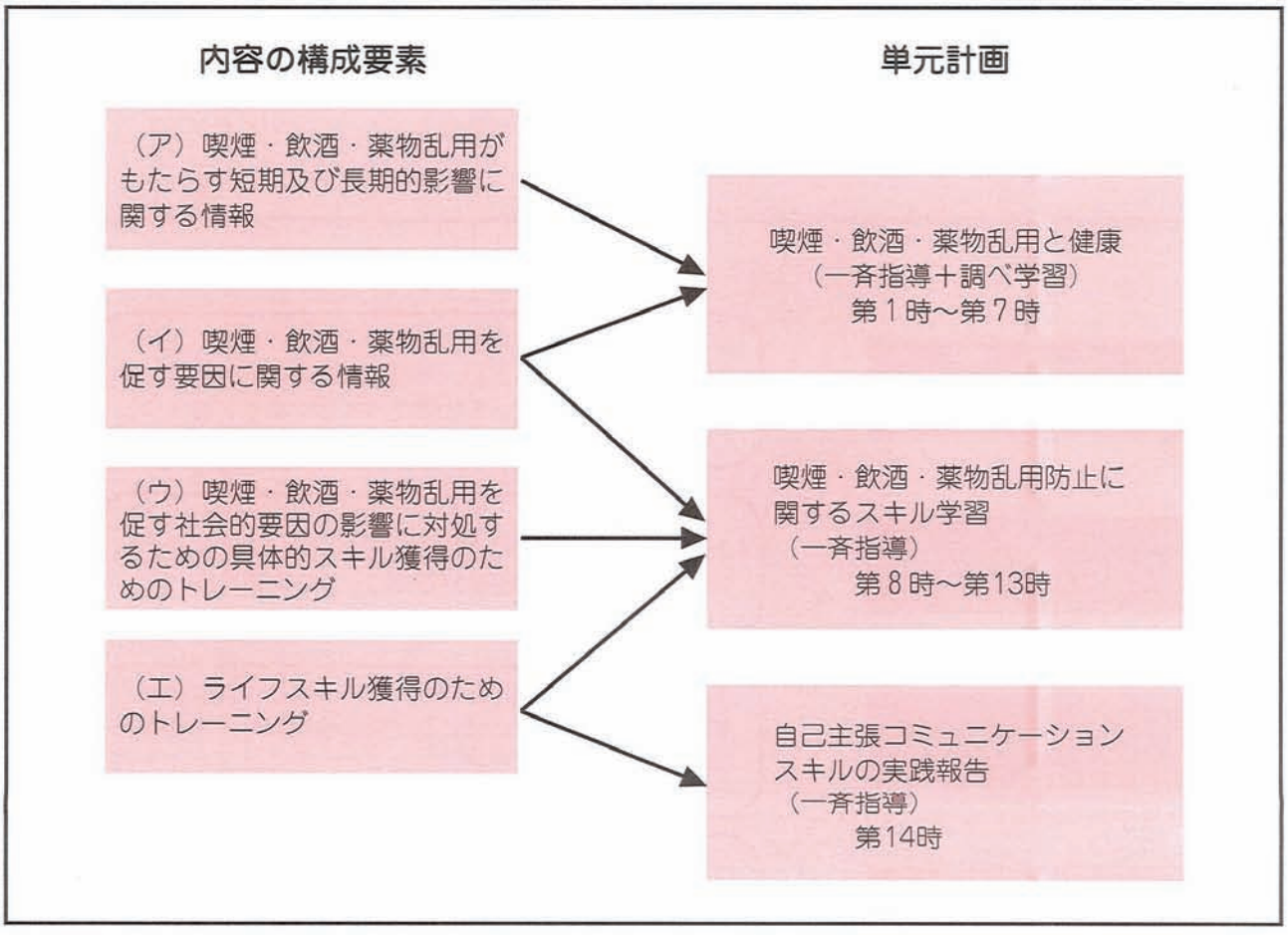


図8　喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育の内容構成

（ア）に関しては、喫煙・飲酒・薬物乱用をしないという動機付けにつながりやすい短期的影響を中心的内容とした。また、教師からの一方的知識の伝達に終わるのではなく、調べ学習などを積極的に取り入れることとした。

（イ）に関しては、調べ学習を通じて、喫煙・飲酒・薬物乱用に関する意志決定には広告や

仲間が大きな影響を与えていることを理解させ、対処スキル形成の必要性を認識させることとした。

（ウ）に関しては、広告分析を通じて、広告の影響への対処能力の形成を目指した。また、ロールプレイングを通じて、仲間の影響への対処能力の形成を目指した。

（エ）に関しては、ライフスキルの一つである自己主張コミュニケーションを喫煙・飲酒・薬物乱用防止の学習を通じてトレーニングするとともに、日常生活の様々な場面において自己主張コミュニケーションを適用するように促し、その強化を図ることとした。

3 ライフスキル学習のモデル

ア　スキル学習の過程

一般にライフスキルを始めとするスキルの学習過程は、①確認する、②関係づける、③練習する、④応用する、４つのステップを踏んで進められる（図９）。

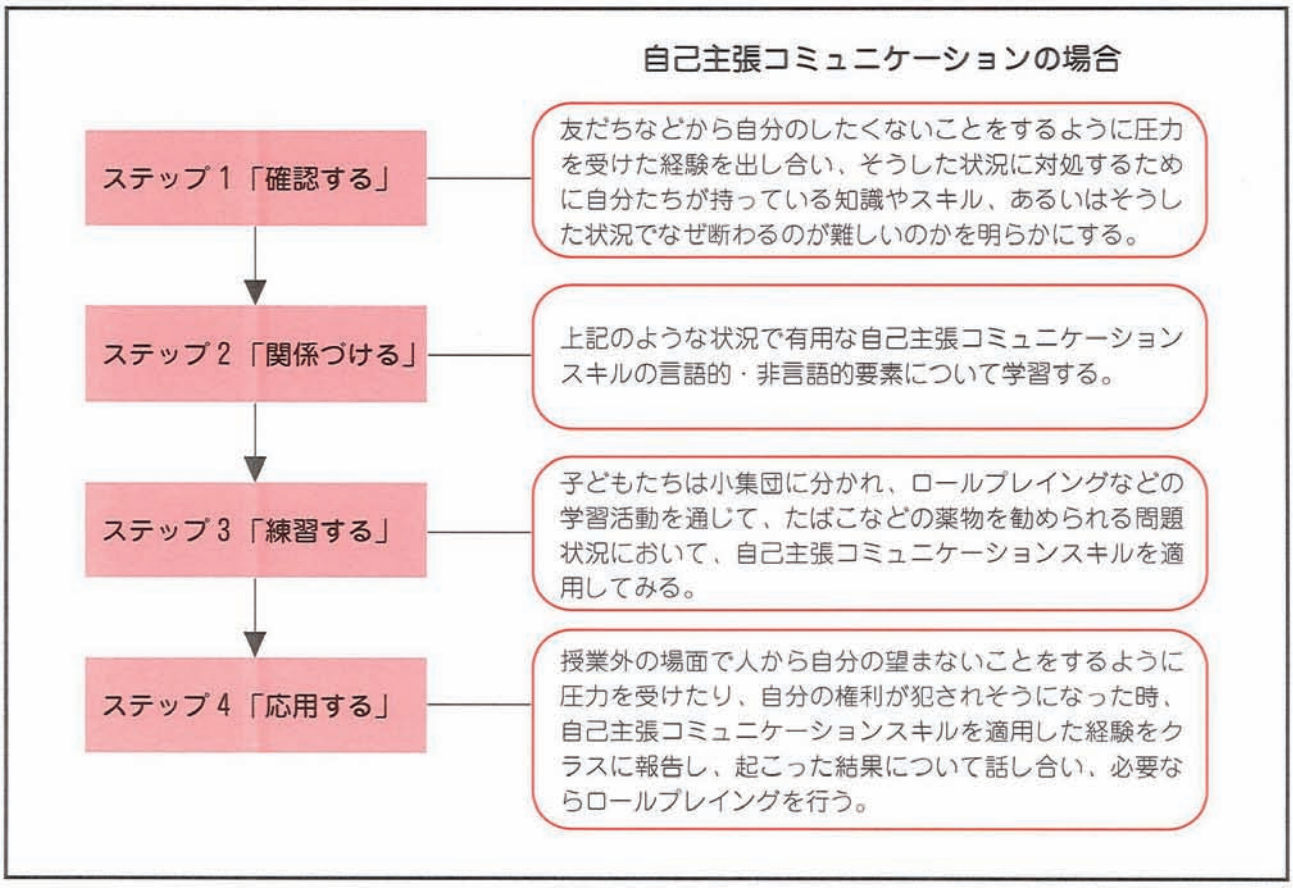


図9　ライフスキル学習の過程
（JKYB研究会編、第８回JKYB健康教育ワークショップ報告書、1999）

以上のことからも明らかなように、ライフスキル教育の主な学習形態は、小集団学習を中心とする参加型学習であり、そのメリットは、表3のようにまとめられる。ライフスキル教育においては、学習内容とともに学習方法や学習形態が極めて重要な役割を果たしていることに留意すべきである。

表3　参加型学習のメリット
（JKYB研究会編．ライフスキルを育む食生活教育．東山書房、1998）

- ●子どもたちは、自分たちの経験や知識をもとに、自らの力で解決の方法を見つけ、実際に課題を解決する経験を積むことによって、自己有能感が高まる
- ●子どもたちは、協同作業の中でお互いの長所や能力を認め合うことによって、自己尊重感が高まる
- ●子どもたちは、相互作用が起こる過程において自他の意見を調整する機会を持ち、対人関係能力が育つ

イ　ロールプレイング学習のモデル

我が国でもライフスキル教育に対する関心の高まりとともに、ロールプレイングが用いられることが多くなった。しかしながら、実際にはロールプレイングが効果的に行われているケースは少ない。

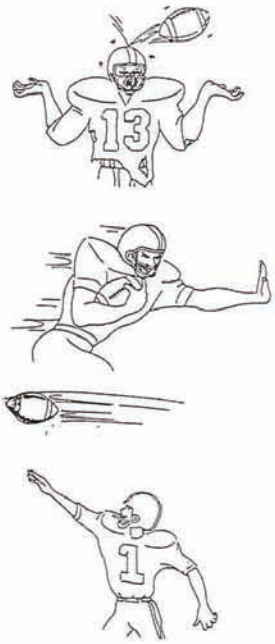
例えば、先輩からシンナーを勧められる場面を設定し、小学生にロールプレイングをさせた実践例の報告を聞く機会があった。しかし、到底ロールプレイングの学習が成功したとは思えなかった。

まず、練習するスキルの内容が明確でなかったことが最大の問題点であった。ただシンナーの勧めを断わってみよう、とロールプレイングを実施してもうまく行くはずがない。ロールプレイングを実施する前に、自己主張コミュニケーションスキルの言語的要素と非言語的要素を子どもたちによく理解させておくべきである（表4）。

表4 コミュニケーションの3つのタイプ

（日本学校保健会編．新訂 喫煙・飲酒・薬物乱用防止に関する指導の手引 中学校編．第一法規出版、1995）

コミュニケーションのタイプ	身ぶり	言　語
受動的行動 屈服したり、あきらめたり、他人が自分の権利を侵すことを認めてしまう。	ためらい 伏し目 貧弱な姿勢 はっきりしない話し方 自信のない声	「もしよろしければ…」 「あまり重要ではないかもしれませんが…」 「そっとしていてください」 「私には、無理です」 「ええ、でも」
攻撃的行動 相手を犠牲にしてでも自分の欲求を通そうとする。	おどしのジェスチャー 速くて、大きく、おどすような言い方 相手の話をさえぎる 威圧するような目つき	「気をつけたほうがいいぜ」 「冗談いうんじゃねーぜ」 「…しといたほうがいいぜ」 「言うとおりにしなよ」
自己主張的行動 自分の権利を論理的、合理的に主張する一方、相手の話を聞き、権利を尊重する。おどしたり、けなすことなく、自分の要求を伝える。	よい姿勢 しっかりした落ち着いた音声レベル 視線を合わせる	「私はこう感じます」 「これはどう解決できますか」 「あなたはどう思いますか」 「わたしは…したい」



（JKYB研究会、1994）

また、自己主張コミュニケーションを練習する場合、シンナーを勧められるなどといった、非常に稀で危険度の高いテーマではなく、日常生活の中で比較的よく起こり、心理的危険度の低いテーマから徐々に危険度の高い問題へと段階を踏んで進むべきである。

この事例は、ライフスキル教育を実施する際に指導者は、練習するライフスキルの内容を明示するとともに、テーマが子どもたちにとって適切なものであるか吟味する必要があることを示している。

ロールプレイングが効果的な学習機会となるためには、表5のような条件が充たされることが必要であると考えられる。

表5　ロールプレイングが効果的な学習機会となるための条件
（JKYB研究会編．第7回JKYB健康教育ワークショップ報告書．1998を改変）

●ロールプレイングを実施するのに必要な学習基盤が子どもたちに形成されている喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育の場合は、以下のような学習がなされていることが必要である。
1）喫煙・飲酒・薬物乱用がもたらす短期及び長期的影響についての学習
2）喫煙・飲酒・薬物乱用を促す要因についての学習

●ロールプレイングを通じて獲得しようとする自己主張コミュニケーションスキルの要素（言語的・非言語的）が、明確になっている

●教師は、ロールプレイングの基本的手順や実施上の留意点などについて理解している

表6には、ロールプレイングの実施上の主な留意点を示した。

表6　ロールプレイング実施上の主な留意点
（JKYB研究会編．第7回JKYB健康教育ワークショップ報告書．1998を改変）

①ロールプレイングの始めと終わりが、演技者や観察者にはっきりとわかるように、ロールプレイングの最中は、演技者に名札やリボンなどをつけさせる。
②ロールプレイングのシナリオは、子どもに状況を提案してもらうなど、できるだけ身近なものとする。
③時間を無駄にしないために、グループ別の活動の前にシナリオを決定しておく。
④ロールプレイングの時間は短く、3分以内とする。
⑤最初に第三者の立場でスキルを練習させた後で、自分自身の問題としてスキルを繰り返し練習させる。
⑥教師は、ロールプレイング実施中に演技者が横道にそれ始めたらすぐに止め、話し合って改善した後に再開する。
⑦ロールプレイングに参加したくない子どもがいる場合にはそれを認め、観察者などの役割を与える。
⑧観察者には、その役割（演技を見てスキルを学習したり、ロールプレイング終了後にスキルを改善するための助言を与えるなど）について、あらかじめ確認しておく。

⑨ロールプレイングの実施後のまとめには、少なくともロールプレイング全体の1/3程度の時間を当てる。
⑩まとめでは、まず演技者の役割を解き、学習したことを確認する。また、演技者を含む参加者の活動に対して、肯定的なコメントを多く与えるようにする。

図10には、図9の「ライフスキル学習の過程」に基づいてロールプレイングを用いた授業のモデルを示した。

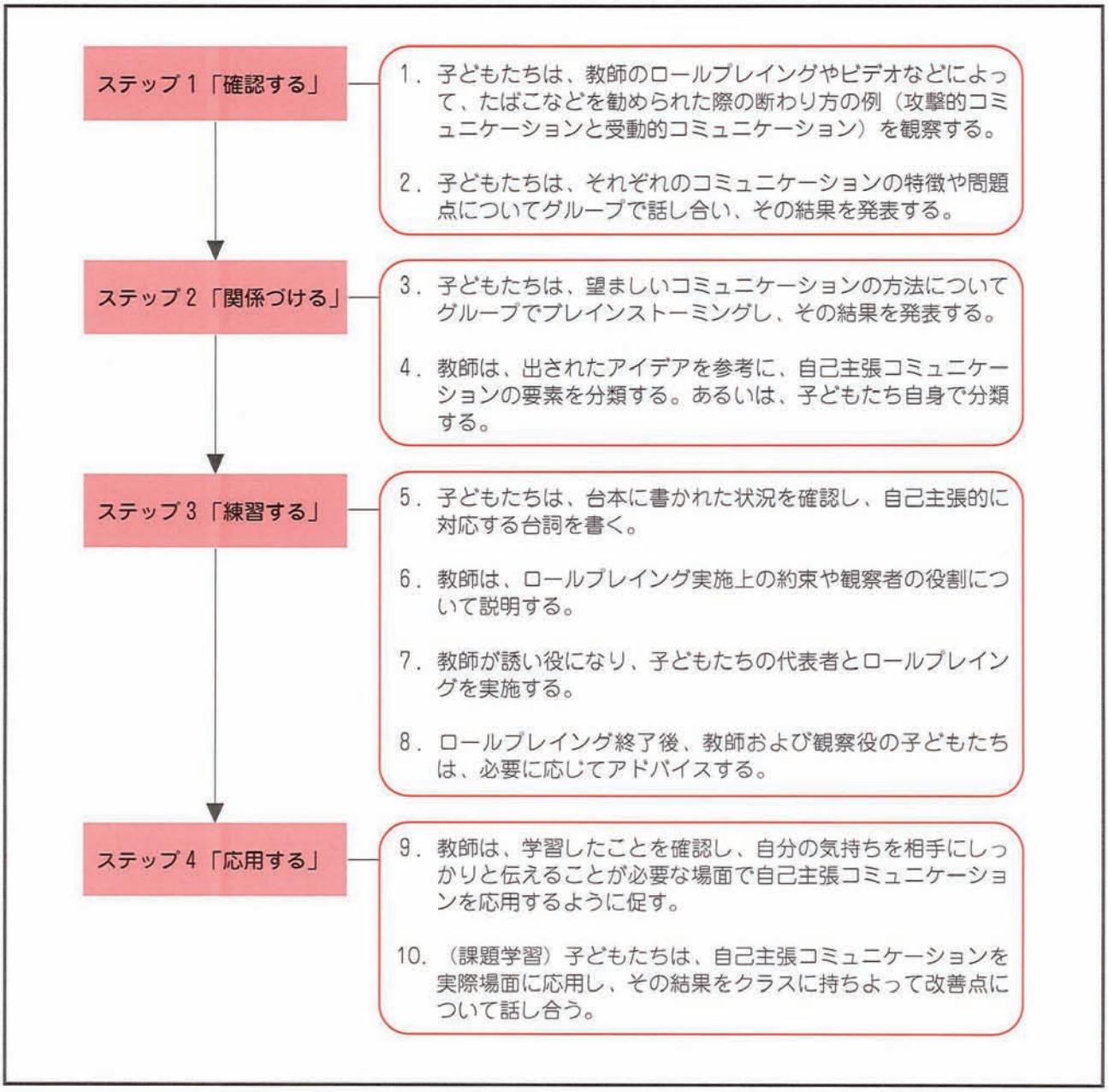


図10　ロールプレイングを用いた授業のモデル
（JKYB研究会編．第7回JKYB健康教育ワークショップ報告書．1998を改変）

4 実 践 例

ア 研究授業に関する基礎的データ

（ア）研究校：川口市立戸塚西中学校（平成８年４月開校）

（イ）授業時期：平成11年10月～11月

（ウ）授業対象：中学校３年生４クラスに14授業時間

（エ）単元：病気の予防

イ 単元計画

（ア）単元目標

観点	目　標・評　価
関心 意欲 態度	○喫煙・飲酒・薬物乱用防止についての関心を高め、課題解決に向けて、進んで仲間と協力しながら学習を進められる。 ○喫煙・飲酒・薬物乱用防止について学習したことを日常に生かし、望ましい生活習慣づくりをしようとする。 ○喫煙・飲酒・薬物乱用防止への理解を深めるため、積極的に仲間の発表を聞ける。 ○ブレインストーミングで一言でも多く意見を言える。 ○ライフスキルを身につけるための学習に意欲的に参加できる。
思考・判断	○喫煙・飲酒・薬物乱用の問題が起こる理由について考えられる。 ○喫煙・飲酒・薬物乱用を防止するための方法について考えられる。 ○各自の体験や知識をもとに、資料などの調査結果をまとめ、発表できる。 ○自分の意見や考えをブレインストーミングで発表できる。 ○各自の体験や知識をもとに、自分の言葉で望ましいコミュニケーションをとろうとする。
知識・理解	○喫煙が健康に及ぼす悪影響について正しく理解できる。 ○アルコールの人体への害や飲酒について正しく理解できる。 ○薬物乱用の現状、薬物の種類や特徴を理解し、心身の健康や自己形成に及ぼす悪影響を理解できる。 ○周囲の人々やマスメディアが喫煙・飲酒・薬物乱用行動に影響を及ぼしていることを理解できる。 ○ライフスキルの意味やその重要性について理解できる。 ○コミュニケーションのタイプについて理解できる。
スキル	○たばこ、アルコール、薬物を仲間から勧められるというロールプレイング状況において、自己主張的に断れる。

（イ）単元の時間配分

<table>
<tr><th colspan="2">1 ～ 3</th><th colspan="2">4 ～ 5</th><th>6・7</th><th>8～⑫・13</th><th>14</th></tr>
<tr><td colspan="2">VTR・講義
基礎的な知識の獲得</td><td colspan="2">課題の解決
知識の深化・定着</td><td>発表とまとめ
課題発見（ライフスキルの必要）</td><td rowspan="2">ライフスキル学習
・広告分析
・コミュニケーションスキル</td><td rowspan="2">応用</td></tr>
<tr><td colspan="5">たばこやアルコールなどの入門薬物，シンナーや覚せい剤などの薬物について</td></tr>
<tr><td colspan="5">喫煙・飲酒・薬物乱用と健康
（一斉指導＋調べ学習）</td><td>喫煙の勧めなどの周囲の圧力に対処するのに必要なライフスキル（一斉指導）</td><td>ライフスキル実践報告</td></tr>
</table>

＊：喫煙，飲酒，薬物乱用（シンナー，覚せい剤）について同時に調べ学習を行う。
＊：人体に及ぼす害の他に，きっかけ，誘い，広告などについても調べ学習を進める。
＊：覚せい剤については，たばこやアルコールと同じようなイメージがあり，また好奇心などが乱用のきっかけとなっていることに気づかせる。
＊：薬物乱用のきっかけとしては，人からの誘いが主であることに気づかせ，コミュニケーションスキルの必要性について考えさせる。

（ウ）各時の学習活動の要点

柱	過程	時	学習活動	主な資料や指導のポイント
基礎的な知識の獲得	課題の設定	1	（1）オリエンテーション ○単元のねらいを確認する ○単元の流れについて理解する ○授業の約束・進め方について理解する （2）喫煙・飲酒・薬物乱用（シンナー，覚せい剤）について今知っていることやイメージについて意見を出しあう。 （3）ブレインストーミングのねらいと方法について理解する。 （4）喫煙について現在持っている知識をブレインストーミングを用いて確認する。 （5）VTRを視聴し，喫煙についての基礎的な知識を得る。 （6）法律によって禁じられている未成年者の喫煙が健康にどのような影響を与えるかを考え，発表する。 （7）調べ学習のために必要な基礎的な知識を得る。	○この単元の必要性を確認しておく。 ○ブレインストーミングで自分の考えを一つでも多く言えるようにさせ，ロールプレイングのための準備を始めておく。 ○ブレインストーミングで出された内容を元に，生徒の知識の深さや興味を把握しておく。 ○発表する際に自分の意見をはっきりと述べさせることにより，ロールプレイングの準備をする。 ＊VTR：健康な体シリーズ たばこって何だろう ー喫煙の害・副流煙の害ー ウチダ教材
		2	（1）飲酒について現在持っている知識をブレインストーミングを用いて確認する。 （2）VTRを視聴し，飲酒についての基礎的な知識を得る。 （3）法律によって禁じられている未成年者の飲酒が健康にどのような影響を与えるかを考え，発表する。	○発表する際に自分の意見をはっきりと述べさせることにより，ロールプレイングの準備をする。 ＊VTR：健康な体シリーズ お酒を飲むなんて！ ーアルコールの害を考えるー ウチダ教材
		3	（1）薬物乱用について現在持っている知識をブレインストーミングを用いて確認する。 （2）VTRを視聴し，薬物乱用について，シンナー，覚せい剤を中心として，基礎的な知識を得る。 （3）法律によって禁じられている薬物乱用が健康にどのような影響を与えるかを考え，発表する。	○発表する際に自分の意見をはっきりと述べさせることにより，ロールプレイングの準備をする。 ＊VTR：薬物乱用防止教育ビデオ（中学生用） NO！　ー脳からの警告ー 文部省

知識の深化をはかる	課題の設定	4	（1）学習した内容について復習する （2）喫煙・飲酒・薬物乱用防止に関連して、更に調べたい事柄についてブレインストーミングを行う。 （3）出された考えを分類し、A：人体に及ぼす影響（知識の奥行き）、B：きっかけ、広告分析、社会的背景など（知識の幅）の2グループに分ける。 （4）発表の決まり事を確認する。 （5）各グループごとに、調査する課題を明確化し、解決の手だてを考える。（内容の決定、進め方、発表の仕方など）	○本単元の目的をもう一度確認し、知識の定着が十分かどうかを発問する。 ○発表のための基本的な決まり事について確認しておく。 ・内容が大切である。 ・声の大きさや発表する態度 ・プレゼンテーションの工夫をすること（VTR、プリントなど） ・禁止事項を確認しておくこと（生徒たちが誘ったり、吸うまねごとをしないことなど） ○発表の仕方についての話し合いになりがちなので、テーマがズレないように、各グループを回り、確認しておく。
	課題の解決	5	（1）学習計画にそってそれぞれの課題に取り組む。 （2）それぞれ集めた情報を交換し合い、課題解決の方法を検討する。 （3）相談しながら内容をまとめる。 （4）発表の準備をする。 ○どのように発表するか ○どんな資料を用意するか ○発表の仕方の留意点はどうだろうか	○グループのリーダーと打ち合わせの会を持ち、調査の進行状況を確認するとともに、内容についての指導、助言をしておく。 ○ロールプレイングに結びつくように、発表の仕方を指導する。（声の大きさ、発表者の姿勢、体の向きなど）
	発表とまとめ	6 7	（1）調べた内容について発表する。 ○課題ごとに発表する ○発表の終わりに、調べた内容について、グループの感想とまとめとしての訴えを述べる ○発表に対して質問し、感想を述べ、一層理解を深める （2）自分の所属するグループ以外の発表内容を理解し、知識を共有する。 （3）教師の助言を聞き、内容の理解を深める。	○T1：発表グループの脇に位置し、発表が円滑に行えるように援助する。 ○T2：机間巡視し、チェック表に適切に記入できているかを確認し、質問を促す。 ○発表を聞き、発表の内容、発表の仕方、疑問点をチェック表に記入させることにより、知識を共有させ、ロールプレイングの準備として、自分の意志をはっきりと伝えるトレーニングとする。 ＊発表会チェック表
ライフスキル学習	外的要因に関する知識の獲得・スキルの形成	8	（1）発表を終えて、その感想をグループで話し合い、記入する。 （2）前時のBグループ（きっかけ、広告分析）の発表から、喫煙・飲酒・薬物乱用の問題行動が起こる理由について考える。 （3）身の回りにある自分の気持ちを揺さぶる誘惑の存在についてブレインストーミングを行い、広告、テレビCM、自動販売機、友人からの誘いなど、身の回りに多くの誘惑が存在していることを確認する。	○机間巡視し、感想を記入する際のポイントを示唆する。 ○机間巡視し、Bグループの発表の中にヒントがあることを示唆する。 ○学習してきた内容を理解して、得られた知識を自分の生活の中に生かそうとする考えを持てたかを確認する。 ○ブレインストーミングで出された意見を、メディアと、人と人とのコミュニケーションとに分類する。 ○T1、T2：机間巡視し、活発なブレインストーミングが行われるように支援する。

ライフスキル学習	外的要因に関する知識の獲得・スキルの形成	9	（1）広告が消費者を引きつけるテクニックについてブレインストーミングを行う。 ○一つの同じ広告について意見を出し合う ○購買意欲を誘う内容の分析 （2）深めた知識をもとに、消費者保護の立場に立って反論する。 ○ 例 男らしいイメージ ↓ たばこを吸うと男らしくなるわけでなく、 起用されているタレントが男らしいだけ （3）広告などのメディアのテクニックについて気がついたことをまとめる。 （4）人間関係の中で生じる「誘い」について気づく。 （5）今までの学習からコミュニケーションスキルを獲得することが必要であることについて話し合う。	○広告の持つそもそもの意味を確認しておく。 ○T1、T2：活発なブレインストーミングが行われるように支援する。 ○始めるきっかけは誘いが多いことに気づかせる資料を提示する。 ○「君は誘われたらどうする」などの発問を行い、人体に及ぼす害に関する知識などだけでは解決できないことに気づかせる。 ○目標を明確にすることにより、知識獲得の授業とライフスキルの授業とを結びつける。
		10	（1）前時に出された友達からの誘いについて生徒に発問する。 ○友人などの誘いは互いの意志疎通・人間関係があり、今までの知識だけでは、拒否しづらいことに気づかせる （2）コミュニケーションスキルの獲得のためにはトレーニングが必要であることを知る。 （3）ライフスキルの概念について理解する。 （4）ロールプレイングについて知る。 ○ロールプレイングの約束について確認する （5）教師によるロールプレイングを見て話し合いを行い、コミュニケーションの悪い点を出し合う。 （6）良いコミュニケーションの仕方についてブレインストーミングで出し合う。 （7）コミュニケーションのタイプについて知る。	○教師が他の生徒へ発問をしている姿を見て、自分に置き換えて見ることができ、考えることができるようにチェック表を用意しておく。 ○コミュニケーションスキル獲得のためにロールプレイングがトレーニングとして有効であることを理解させる。 ○ロールプレイングの約束事を書いたプリントを配付する。 ・その状況に自分自身が置かれたら、どういう態度や行動をとるかを考えて、自分の台本を作ろう。 ・劇ではない、台本は簡単に! ・ロールプレイング中は他の人（周りの人）は口をはさまないようにしよう。 ○ブレインストーミングの意見を分類する（攻撃型・受け身型・はっきり型・その他）。 ○友人関係を保つ必要性を条件とし、はっきり型で対応させる。 ＊ロールプレイング台本 ＊ロールプレイングチェック表 ○感想を書くときは、トレーニングの効果についても観点を考えるように示唆する。 ＊ロールプレイングチェックボード
		11	（1）新しい場面設定のロールプレイングの台本を書く。 ○各自で台本を書き、グループの中でロールプレイングを行い、最も良いと思われる代表者を選出する （2）ロールプレイングを評価する観点をブレインストーミングで明らかにする。 （3）それぞれの観点について互いに指摘しあい改善する。 （4）各班の代表の生徒と教師によるロールプレイングを行う。 ○チェックボードに評価する （5）他の班のロールプレイングについて講評を行う。 （6）ロールプレイングについての感想文を書き、読み上げる。 ○予想される感想文 ・自分の意志をはっきりと相手に伝えることは難しい ・トレーニングしたことにより、断ることができそうだ	○机間巡視し、自分の考えとして台本を書くことができているか確認する。 ○最も良いと考えられる台本についての理由付けを明確にさせるように机間巡視する。 ○T1：ロールプレイングの相手役となる。 ○評価はテストではなく、改善のためのものであり、ロールプレイングの観点を明確にさせるものであることを強調する。

			・自分は誘うようなことだけはしたくない （7）次時の予告を行い、テープレコーダーの使用方法を説明しておく。	○T2：チェックボードに記入しているロールプレイングへの着眼点が正しいかを確認して回り、講評を促す。
ライフスキル学習	外的要因に関する知識の獲得・スキルの形成	⑫	（1）新しい場面設定のロールプレイング用台本（資料1）に台詞を記入する。 （2）ロールプレイングを評価する観点をブレインストーミングで明らかにする。 （3）それぞれの観点について互いに指摘し合い、ロールプレイングを改善する。（資料2） （4）各班の生徒の代表と教師によるロールプレイングを行う。 （5）他の班のロールプレイングについて講評を行う。 （6）ロールプレイングについての感想文を書く。	○机間巡視し、自分の考えとして台詞を書くことができているか確認する。 ○最も良いと考えられる台本についての理由付けを明確にさせるように机間巡視する。 ○T1：ロールプレイングの相手役となる。 ○T2：チェック表に記入している生徒のロールプレイングへの着眼点が正しいかを確認して回り、講評を促す。 ○感想文を書くときは、観点としてトレーニングの効果についても考えるように示唆する。
		13	（1）前時とは違った場面設定の台本に台詞を記入する。 （2）グループの中でロールプレイングを行う。 （3）ブレインストーミングでロールプレイングの改善点を出し合う。 （4）台本なしのロールプレイングを行う。 ○予想される台本の例 ・覚せい剤・シンナー・アルコールなど、たばこ以外の薬物について扱った台本 ・複数の人物が登場する場面を設定し、誘われる側が、人数の優位を作り出せる台本 （5）単元のまとめをし、セルフエスティームの重要性を知る。 （6）ライフスキル学習を通じての感想文を書く。 ○心がけようと思うことを書く （7）感想文を読み上げる。	○テープレコーダーに誘い役の台詞を録音しておき、グループの中で審査しながら、代表者を選出する。 ○T1、T2はそれぞれのグループを回り、時にはテープレコーダーの代わりを行ったり、審査の着眼点についてのアドバイスを行う。 ○たばこのロールプレイングを通して学んできたことを他の薬物に応用して、対応できるように支援する。 ○それぞれの薬物に関しての知識を含めた対応をするように支援する。
	確認	14	（1）既習したライフスキルについて実際に使ったケースについて、報告会を行う。 ○応用した例を聞き、自分に置き換えて考える （2）今後のトレーニングについてブレインストーミングを行う。	○実際に体験した実例を報告することができたか。 ○発表を聞いて自分としての問題と受け止め、自分の意見、考えを持つことができたか。 ○意欲的にブレインストーミングに参加することができたか。

ウ　本時の計画

（ア）本時のねらい

①望ましいコミュニケーションの方法をロールプレイングで実施することができる。

②他の生徒のロールプレイングを見て、観点を持って評価し、自分のロールプレイングに生かすことができる。

（イ）準備

ホワイトボード、ホワイトボード用ペン、評価用マグネット、ロールプレイング用台本、

カセットテープデッキ、ロールプレイング用カセットテープ、感想文記入用紙

（ウ）本時の展開（第12時）

段階	学習活動	教師の支援 T1 T2
導入 5分	（1）本時のねらい、内容について確認する。 自分の意見をしっかりと持ち、台本を書こう。 全員がロールプレイングを意欲的に体験しよう。 他の者のロールプレイングを見て、観点を持って評価しよう。 （2）ロールプレイングについて前時の確認をする。 （3）グループや自己の課題を確認する。	○T1：本時のねらい、内容について想起させる。 ○T2：机間巡視を行い、生徒の反応を確認する。 ○T1：ロールプレイングの約束について確認する。 ○T2：机間巡視し、生徒の反応を確認する。 ○T1，T2：机間巡視し、課題設定の理由が明らかになるよう支援する。
展開 35分	（4）台本に台詞を記入する。 ○場面設定を読み上げる （5）ロールプレイングを行う。 ○それぞれのロールプレイングを採点し、得点板に評価し合う ○ロールプレイングを繰り返し練習する ○グループでよりよいコミュニケーションをした者を選び出す （6）話し合いでグループの代表を選出し、発表する台本を手直しする。 ○得点板を参考に話し合う （7）各グループの代表が全体の前で教師とのロールプレイングを行う。 ○代表を送り出したグループから、優れていた理由を発表する ○他のグループのロールプレイングを見ながら、どこがよいのかをチェック表に記入する （8）授業の展開を通しての感想を記入する。	○T1，T2：机間巡視を行い、つまずきのある生徒を支援する。 ○T1，T2：グループを回り、テープの代わりに、実際にロールプレイングの相手役を演じる。 ○T1，T2：コミュニケーションのタイプとして、どんな点が優れているのかを、観点を持たせて採点できるように支援する。 ○T1，T2：グループの代表は、どんな点が優れているのかを理由付けするように支援を行うとともに、改善のための示唆を与える。 ○T1：生徒とのロールプレイングを行う。 ○T2：観点を持って、ロールプレイングを評価しづらい生徒の支援を行う。 ○T1，T2：本時のねらいに沿った感想が書けるように、机間巡視し支援する。
整理 10分	（9）本時の学習についての整理と確認を行う。 （10）感想を読み上げる。（2，3例） （11）次時の予告を確かめる。	○T1：本時の学習内容について整理させる。 ○T2：今までの学習で自分によりよく生きるための力がついてきていることに気づかせる。 ○T1，T2：机間巡視を行い、次時の授業につながることを助言する。 ○T1：次時の学習内容を確認させる。

5 授業者の感想と評価

授業者　T1

昨年度から取り組み始めたライフスキルの授業は「今までの授業はいったい何だったのだろう」と思わせるほど、生徒たちひとりひとりが生き生きと授業に参加していました。以前の講義形式の私の授業がそれは恥ずかしく思えるほど生徒の表情は変わり、発言する姿勢さえ変わった生徒も増えました。そのため、今年は「より生徒を生き生きとさせた授業をしてみたい」というような欲が出てきたことも事実です。

今回の授業ではまず、前年の反省の確認を行うことから始まりました。単元の大きな流れとしてはさほど変化はないものの、講義の部分の内容の精選、調べ学習で集めた情報の共有化の仕方、ブレインストーミングとロールプレイングの効果的な使い方、そして最も大きな課題として教師の支援体制と生徒の観察者としての役割を引き出すことを確認し合いました。学習効果が上がったと自分では思っていた昨年の授業も、改善すべき箇所ばかりでした。

昨年と今年の大きな違いとしては、ロールプレイングについてはカセットテープを使用したことが挙げられます。当初、我々も戸惑いがありました。しかし、なにぶん中学生としては、発達段階や日常の生活の様子などを考えると、全員がロールプレイングを体験しておく方が良いと考えました。また、テープを使った分、２人の教師が支援に回ることができ、戸惑いを感じていた生徒に、何らかの支援をすることができたことも、生徒の表情を見て良かったと思っています。また、もう一つ大きな課題である観察者としての生徒の役割については、「観点」を明確にして、他の者のロールプレイングを自分なりに分析させることにしました。また、分析した内容をグループで出し合うことにより、意見交換を行い、自分自身の改善に結びつけさせる、という方法を採り、解決を図りました。しかし、意見交換の時間が十分にとれなかったり、ロールプレイングの「観点」の絞り込みの的確さなどについてご指摘を受け、改めて、勉強させていただきました。

２年間にわたる授業を終えて感じたことは、有効であるはずのロールプレイングも、その時ばかりに、声の大きさや毅然とした態度・姿勢や口調を生徒に求めてもそれは無理な話だということです。日頃の学校全体の教育活動全般を通じて、授業規律として、生徒に求める内容を高くし、生徒を「学習者」としておかなければならないと痛感しました。

昨年に引き続き、今回も授業で感じたことは、生徒たちがこの授業に参加する目的を持ち、生き生きとしたことでした。自分の考えを上手く表現できない、自分の考えを持つこと自体がなかなか難しい生徒が少なくない様に感じるこの頃、今回の授業は明るい材料を与えてくれるものだと実感することができました。これも、昨年と同じことになりますが、生徒の感想からも、知識偏重の詰め込みタイプの授業と比較して、今回の授業の方式がより効果的であり、生徒も意欲的に取り組めることが分かりました。併せて、教師自らが授業研究に今以上に力を注

ぎ、生徒たちにとって魅力的な授業作りに励まなければならないということに、改めて気づかされました。

ともあれ今回の授業は、私自身にとって大きな喜びと課題を与えてくれたような気がします。ライフスキルの授業で一番大切なことは、セルフエスティーム（健全な自尊心）を育てることだと思います。そのためには、今回の授業研究に至るまでの過程を大切にして始めてロールプレイングが生きてくるのだと思いました。

終わりになりましたが、二度にわたりこのような機会を与えていただき、ご指導下さった多くの諸先生方に深く感謝申し上げます。

授業者　T2

昨年度に引き続き、このライフスキルの授業をやらせていただくことになり、夏には伊丹で開催された「第8回JKYB健康教育ワークショップ」にも参加させていただきました。昨年度、にわか勉強で、得た知識を確認し、深めていく良い機会となりました。ライフスキル教育に必要な「スキル」の確認や、その高め方の実践例についてご指導いただいた広告分析も、実際自分でやってみて新鮮な感覚とともに、広告のテクニックについて実感しました。「ブレインストーミング」のやり方、「ロールプレイング」のやり方などについて教えていただき、実際に体験してみて、本当に勉強になりました。かなり今回の授業に取り入れさせていただきました。

今回授業を公開するにあたり、最初は昨年度とあまり変わらない授業展開を考えていましたが、ロールプレイングを充実させ、観察者の役割をはっきりさせなさいという校長先生の助言で、このような形になりました。ロールプレイングをテープで行うことについてはいろいろな意見交換がありましたが、トレーニングとして行うにはやはり回数をこなす方がプラス面が多いと考えました。誘い役を生徒がやらなくてもすむようにカセットテープを使用してみましたが、これも最適だったのかわかりません。しかし、研究協議でお話のあったように、見る観点をもっと精選すれば効果的に使用できるのだろうと思いました。

昨年「ライフスキル」についてお話をいただいたとき、（たばこを勧められたときの断り方？イヤなものはイヤだっていえばいいのだから、こんな事学校で教える事じゃない。）と思ったのは事実なのですが、その後、現実に今の生徒達を見ていると、はっきりと発言もできない、自分の意見をはっきりと言えない、まわりのことを気にしすぎる等々、やはり今の時代「ライフスキル」が必要なのかと考えるようになりました。

知識の充実のために調べ学習をし、発表会を行ったことで、生徒は意欲的に行動しました。図書室の活用はもとより、インターネットを使って資料を集める班、警察へ出向いたり、事業所（JT）に電話でアンケートをお願いしたりと、自分達で考えて行動しました。資料の活用の仕方、発表の仕方は完全でないまでも、掲示物を作ったり、プリントを刷ったりと生徒はグ

ループで考え、話し合い、発表しました。調べ学習においての生徒の意欲、工夫は正直言って、驚きました。

広告分析でも、ブレインストーミングを取り入れ、いろいろな意見を出させ、広告についての意見を聞きました。この分析をすることで、なんとなく見ていた広告、何となく惹かれた広告について批評の目を持つことができたと思います。

ロールプレイングも何度も行っていくうちに慣れ、声の大きさや台詞の内容が向上していくような気がしました。観察役の生徒が観点を持って一つ一つ評価するのも効果的だったようです。

全体を通じてこの「ライフスキル教育」を行うにあたり、発言の仕方、聞く態度などの授業規律の徹底とともに進められたことが、プラスになったと思っています。

残念ながら、たばこやお酒が簡単に自販機で買えたり、お酒の販売時間を規制してもコンビニで買えたりと、青少年の将来よりも、自分の利益を優先する大人がいる限り、自分自身を知ること、それを高めていくこと、自分を取り巻く環境を上手に分析し、害になるものを見分ける力、断る力を本当に生徒につけてあげたいと思います。

この授業を経験することのできた本校の生徒も。後４ヶ月で卒業していきます。この平和な空間から現実的な場所に行ったときに、自分はイヤでも、強要される時がきっとあると思うのです。そんなとき、少しでも今回の授業のことを思い出し、誘惑や強要に屈することなく、自分の意見をはっきり言えるようになってほしいと思います。

このように２年間「ライフスキル教育」について勉強させていただいて、感謝しています。「ライフスキル」の目的は、単なる技術やテクニックの習得ではなく、セルフエスティーム（健全な自尊心）の育成にあるということを学ばせていただいたので、今後この経験をいかし、授業を行っていきたいと思っています。

6 まとめ

ア　これまでの経過

本研究の目的は、冒頭に述べたように、青少年の現在および将来の健康に深く関わっている喫煙・飲酒・薬物乱用問題を取り上げ、その防止のためにライフスキル、とりわけ効果的なコミュニケーション能力を育てることに主眼を置いたプログラムを開発し、その形成的評価を行うことにある。

その目的を達成するために、埼玉県川口市立戸塚西中学校の先生方と平成10年度から共同研究に取り組み始めた。初年度はまず、授業担当教師の側にライフスキル教育に関する経験が全くなかったので、ライフスキルの概念、行動変容を促す喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育の原理などに関する基本的理解から始まった。そして研究者は、単元計画や授業計画の立案に際して

助言をしたり、授業を観察して改善点についてフィードバックを与えることによって、担当教師がライフスキル教育を円滑に実施できるように支援した。

平成11年度は、初年度の実践結果を検討し、改善すべき点を明確にした。また、担当教師の一人はワークショップ（参加型の研修会）に参加し、ライフスキルやライフスキル教育の指導法に関する理解や経験を深めた上で、授業実践に臨んだ。

イ　初年度の具体的実践と評価

単元「病気の予防」（全16時間）のうち10時間が、喫煙・飲酒・薬物乱用防止の学習に配当された。その基本的構成は、本年度と同様に、「調べ学習」「ライフスキル学習」「ライフスキルの実践報告」であった。

授業担当教師の一人は、一連の授業を終えた後、以下のような感想を述べている。

①調べ学習を取り入れた上で、ライフスキル学習でこの単元のまとめを行おうとすると、単元に要する時間数が増すため、基礎・基本的な知識を絞り込んでおさえておくことの必要性を強く感じた。
②調べ学習では、グループごとのリーダーを集め、学習の進め方、資料の調べ方、発表の仕方、まとめ方などの支援を行うことが大切であると感じた。
③今回の授業形態では、生徒自らが進んで調べ学習を進め、ブレインストーミングなど生徒の活動が多くなるため、T・Tのスタイルをとることによって、生徒への支援活動を充実させることができた。
④自ら進んで学習する態度や表現に関する能力を育成するには、3年間を見通した学習計画が必要であり、教育活動全般を通じて指導することが、今後ライフスキル教育が普及し、実践されるためには必要であると感じた。

ともあれ、知識詰め込みタイプの学習計画は、今回の単元を学んだ生徒たちにとっては、もはや受け入れがたいものとなったはずだと、生徒たちの授業後の感想文などから十分感じとれた。

また、研究授業後の検討会で実践校の養護教諭が述べられた以下の感想も、この一連の授業の有効性を端的に物語っている。

常々自己肯定感が低いように感じていた生徒たちが、きょうの授業のブレインストーミングで良く意見を出していたことに感動した

ウ　本年度の課題

初年度の一連の授業は、ライフスキル形成を重視する喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育のモデルとして高く評価できる水準に達していた。しかし、提示するモデルとしてはなお改善すべき点も残されていた。

第１に、初年度は実践校の生徒の実態を踏まえて、彼らにとってより身近な問題であり、入門薬物でもあるたばこをもっぱら取り上げることとした。しかし、近年の薬物乱用の問題の深刻化、若年化などを考慮すると、他の薬物を勧められた場合の対処法についても学習しておくことが望ましい。

第２に、授業者の感想にもあったように、コミュニケーションスキルは数回のロールプレイングを用いた授業を行っただけで形成できるものではなく、ふだんの授業においてもその形成を図るべきである。

第３に、初年度のロールプレイングにおいては、観察者役の生徒からのフィードバックがほとんどなかった。そのため、観察者としての役割をもっと十分に果たせるようにするための指導上の工夫が必要である。

第４に、スキルの獲得という観点からして、もっと多くの生徒がロールプレイングを経験できるような工夫が必要である。しかし一方で、薬物を勧めるなどの好ましくないロールモデルを演じさせない、という教育学的ロールプレイングの原則を踏まえた上で指導しなければならない。

第５に、教師研修のあり方について、より効果的な方法を取り入れる必要がある。初年度は、日程や予算上の制約があったために、研究者側から関連資料を提供したり、単元計画や授業計画の立案に際して助言をしたり、授業を観察して改善点についてフィードバックを与え、担当教師がライフスキル教育を円滑に実施できるように支援した。こうした支援方法は確かに有効であったと思われるが、多くの学校にライフスキル教育を普及するという観点から言えば、より効率の良い方法、即ちライフスキル教育の指導者のためのワークショップに参加することが望ましい。

エ　本年度の具体的実践と評価

単元計画の項で述べたように、単元「病気の予防」で14時間が喫煙・飲酒・薬物乱用防止の学習に配当された。

前項の課題の１に対応するために、知識学習の段階で、喫煙や飲酒以外にも、シンナーや覚せい剤の問題も取り扱った。また、ロールプレイングにおいても、喫煙の勧めに対する断わり方を練習した後、アルコール、シンナー、覚せい剤などの勧めに対する断わり方も練習することとした。

課題の２に対応するために、調べ学習の発表段階においてもコミュニケーションスキルに関する指導を行うこととした。

課題の3に対応するために、ロールプレイングを評価する観点をブレインストーミングによって挙げさせ、自己主張コミュニケーションスキルの要素をより明確にした。

課題の4に対応するために、小グループに分かれてロールプレイングの練習を実施した。その際、あらかじめ勧める言葉を教師の声でカセットテープに録音しておき、それを再生し、一人一人の生徒に台詞を述べさせた。また、二人の教師が各グループを巡回し、時間の許す限り直接生徒とロールプレイングを行った。また、小グループでのロールプレイングを実施する際に、観察役の生徒たちが一定の観点に基づいて評価し、フィードバックを与えた。そして、各生徒はそのフィードバックを参考にしてロールプレイングを再度演じ、スキルの向上を図った。

課題の5に対応するために、既に述べたように担当教師の一人が、7月下旬に兵庫県伊丹市で開催された「第8回JKYB健康教育ワークショップ」に参加し、実地の研修を受けた。

以上のような新たな試みを導入した結果、授業後の検討会の参加者のほとんどから高い評価の言葉が述べられたように、本年度の一連の授業はライフスキル形成を重視する喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育のモデルとして、極めて完成度の高いものになったと考えられる。ただし、授業担当者の感想にもあるように、カセットテープに録音された勧めの言葉に対応する場合と、実際に教師とロールプレイングする場合とでは、明らかに生徒の対応の仕方に差が認められた。今後、カセットテープのより効果的な活用法について、さらに検討が必要と思われる。

オ　今後の課題

本研究授業を通して提示されたライフスキル教育のモデルを普及するためには、指導者研修のあり方が問われている。中でも、ロールプレイングの実施に当たっては、心理学的ロールプレイングと教育学的ロールプレイングでは、そのねらいや実施上の留意事項がかなり異なっており、心理学的ロールプレイングのトレーニングを主とする研修会に参加することが逆効果の場合すらある。ライフスキル教育を進めるに当たっては、ライフスキルやライフスキル教育の本質を理解し、それに沿った指導法に関する研修を受ける必要がある。

今後はワークショップの内容や進め方に関する研究を行うとともに、そうしたワークショップに参加して資格と能力を獲得するとともに、ライフスキル教育の実践の経験を持った教師が、次の段階では自らがトレーナーとなり、各地で指導者を養成するという階層的普及システムの構築に関する研究を進める必要があると考えられる。

資料 1

ロールプレイング用台本

ロールプレイングの準備

場面設定

A○さんは受験勉強まっただ中，１２月の実力テストに向けて，猛勉強中。そんなとき小学校からの親友でとなりのクラスのB△さんから誘いがあり，一緒にB△さんの家で勉強をすることになった。勉強が進んでいくと，B△さんが「勉強，勉強でいらいらするよね，どうでもいいけどたばこでも吸わないけ？」と言い，引き出しからたばこを取り出し火をつけた。<エッ，B△さんがたばこなんて…>と，思いながらもA○さんはB△さんとこれからも仲良くしていきたいと思もっています。

台本を書こう

＊A○さんになったつもりで考えてみよう

B△：「ねえ，A○も吸って皆よ，イライラが吹っ飛ぶよ」

A○：

B△：「受験が終わればイライラすることもないんだからサ，今だけ吸うわけだから大丈夫だよ」

A○：

B△：「誰にも迷惑かからないんだからイイじゃん」

A○：

B△：「私が吸ったところを見ておきながら，あなたは吸わないって言うの？先生に言いつけるつもりでしょう！吸いなさいよ」

A○：

授業の感想（ロールプレイングのトレーニング）を終えて

資料 2

ロールプレイングチェック表

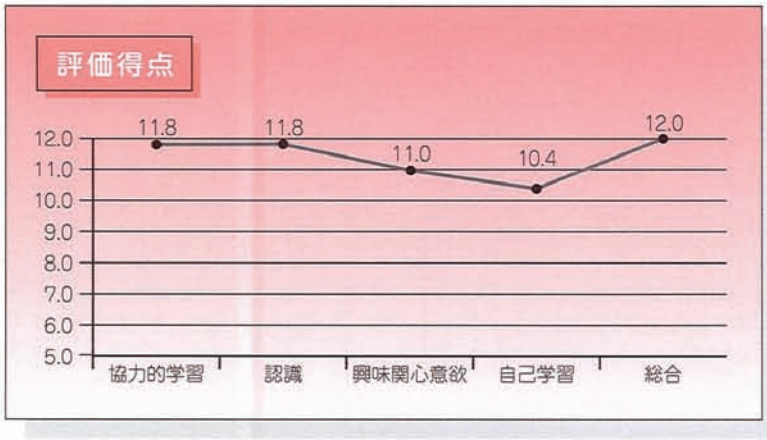
観点 / 班 名前		声の大きさ	視線・向きなど 態度	内容	TOTAL
1					
2					
3					
4					
5					
6					

評価班からの評価

評価結果

評価・アンケートの実施は、14時間構成の授業が終わった時点において行った。（評価票：P.29）

(1) 評価得点について

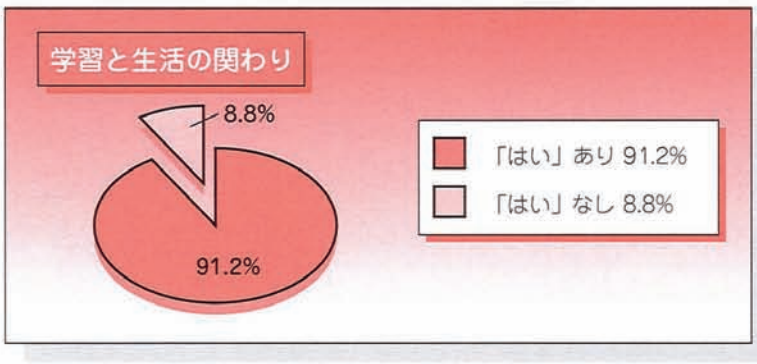


「協力的学習」の得点が高い理由としては、単元前半においてグループ活動による『調べ学習』が行われており、その課題追究の場面で生徒たちがグループの仲間と積極的に関わり協力しあいながら学習を進めていくことができたからではないかと推察される。また、『ライフスキル学習』の場面においても、グループのメンバー相互によるコミュニケーションスキルの評価活動が生徒たちに受け入れられ、この観点の肯定的な評価につながったものと推察される。

また「認識」の得点が高い理由としては、基礎的な学習内容が単元の前半・中盤の『一斉指導』や『調べ学習』の場面で扱われたこと、また、後半の『ライフスキル学習』の際にも、行動科学に関する学習（人の喫煙等の行動選択に影響を与えるものは何であるか、より良い行動選択のためにはどのようなスキルが必要か、等）が行われたことが、生徒たちに受け入れられたものであると推察される。

また「興味・関心・意欲」、「総合」の得点が高い理由としては、単元全体を通して、ブレインストーミングの活動、調べ学習、ライフスキル学習の中のロールプレイング、また生徒たちによる相互評価の活動といった、活動的で主体的な学習が組織されたことによるものと推察される。

(2) 学習と生活の関わりについて（F.の評価観点）



「学習と生活の関わり」の観点において、91.2%の生徒がその関わりを認めていることは、今回の学習内容が、いわゆる「学校知（P.26参照）」としての批判に当てはまらない、『日常の生活場面で役立つ知識や態度を身に付ける学習』として、生徒たちに受け取られた結果であると推察される。この数値の高さは「調べ学習」・「ライフスキル学習」の有効性のひとつを示しているものと言えよう。

(3) 授業の感想（自由記述）について

自由記述欄を設け『今回の授業で、皆さんが学んだ大切なことがらは、どのようなことなのでしょうか。以下の枠内に書き込んでください。』という指示を出した。生徒の記述をその内容から３つに分類した。

① 喫煙・飲酒・薬物乱用の害について学習することの価値・意義

「たばこもアルコールも覚せい剤も危険だということは知っていたけれど、今回の授業でその害をはっきり勉強することができた。害を知ることで、もしたばこなどの誘いを受けても、きちんと断わろうという気持ちがはっきり持てた。」

「たばこの害やシンナー、酒などの害を知ることができたからこそ、悪いものを勧められた時の対応の仕方を勉強することの意義がわかった。」

② 広告などの情報を分析的・批判的な視点をもって受取ることの重要性について

「私は、お酒やたばこの広告を見ても、これまでは何とも思いませんでした。しかし、今回の保健の授業をしてたばこの害を知り、あらためて広告を見てみると本当に驚きました。広告からはたばこが体へ及ぼす害についてなど、ほとんど知ることはできません。あえて知らせることをせず、若者の誰もが吸いたくなるような広告を作っているのです。だからこそ、私たちは見抜く目を持たなければならないと思いました。」

「世の中に出回っている広告を見て、喫煙は人から勧められて始まるだけでなく、広告か

らの誘惑もかなりあることがわかった。」

③ 「ライフスキル学習」の学習効果・価値について

「ロールプレイングの時、はじめは自信が無く、自分の意見をはっきり言えなかったけど、何回もやっていくにつれ、だんだん自信がついてきた。とてもいい授業だったと思う。」

「ロールプレイングをはじめたころは、そんなのやらなくてもいいと思っていました。でもやっているうちに、ロールプレイングは大切なことだと思いました。だって、本当に悪いことに誘われたら、今までだったら断われなかったと思うからです。何度か練習して、自分で断わる自信が少しつきました。」

「もし誘われたら、どういうふうに断われば良いかなど、とても勉強になった。しかも、今まで以上に自信がついたと思う。もしたばこや覚せい剤など誘われた時など、今回勉強したことを活用していこうと思った。楽しみながら勉強できた。」

「ライフスキルの授業でたばこなどの害や喫煙行動のきっかけなど勉強しました。加えて、人からの勧めに対してどう断わるかについて大事な勉強もできました。どう断わるかは、これからの生活には一番大事なことだと思います。自分の意見を持ち、あせらず、しっかり伝えられるように自信をつけるには、この授業が最適だと思いました。」

「断わる時には、今までの知識をまぜて断われば、相手を納得させることができて、より良いと思った。ただ断わるのでは無く、相手が友達だったらその関係を壊さない形での断わり方も必要である。どちらにしろ断わる時は、自分の意見を相手にしっかり伝えることが最も重要なことだ。」

これら3つの分類内容は、本授業の特徴・特色の一端を表しているものであろう。今回の講義形式の学習や調べ学習をライフスキル学習と組み合わせた授業（単元）は、単に生徒に新しい知識を与えることができただけでなく、「喫煙の誘いをいかに断わり自分の健康を守るか」という生活場面に即したコミュニケーションスキルを生徒に体得させることに関し、高い効果が認められる授業（単元）であったと言えるであろう。また、「喫煙等の体への害を深く学ぶことができたからこそライフスキル学習への意欲が沸きその価値も認識できた」という内容の生徒の記述からも、単元の中に位置づくそれぞれの学習形態が、効果的に結びついていたことが推察される。また、広告情報との接し方に関する記述から、身の周りの環境・情報を分析的・批判的な視点をもって受取ることの重要性まで気付かせることができた授業（単元）であったと言えよう。また、グループ活動の中でそれぞれのロールプレイングを相互に評価し合い、そのアドバイスのもと、くり返しロールプレイングを試みた体験から引き出されたものと思われる「自分の意志を伝える自信がついた」とする記述からも、生徒たちがそこで主体的な学習者として自分たちの学びを深め、確実な力を身に付けていった様子がうかがわれる。

参考文献

1）川畑徹朗．今、なぜライフスキルなのか　養護教諭はどう取り入れたらよいか．健康な子ども．28（10）、9～11、1999

2）勝野眞吾．思春期の危険行動を予防する健康教育ライフスキル．健康な子ども．28（10）、12～13、1999

3）川畑徹朗．思春期を生きる力の育成―ライフスキル教育が目指すもの．公衆衛生、63（7）、456～461、1999

4）川畑徹朗．喫煙・飲酒・薬物乱用防止におけるライフスキル学習の進め方―誘惑にNO！といえるようになるために―．スポーツと健康．30（7）、16～19、1998

5）JKYB研究会編．第7回JKYB健康教育ワークショップ報告書、1998

6）JKYB研究会編．ライフスキルを育む食生活教育、東山書房、1998

7）WHO編（川畑徹朗、西岡伸紀、高石昌弘、石川哲也監訳．JKYB研究会訳）．WHOライフスキル教育プログラム、大修館書店、1997

8）川畑徹朗．喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育で重要なこと－行動科学の理論に基づいた健康教育プログラムの実践を－、体育科教育．45（11）、29～32、1997

9）日本学校保健会編、新訂　喫煙・飲酒・薬物乱用防止に関する指導の手引　小学校編、第一法規出版、1997

10）日本学校保健会編、中学校　薬物乱用防止に関する指導―指導資料―、第一法規出版、1997

11）日本学校保健会編、高等学校　薬物乱用防止に関する指導―指導資料―、第一法規出版、1997

12）JKYB研究会編、健康教育とライフスキル学習-理論と方法、明治図書、1996

13）日本学校保健会編、新訂　喫煙・飲酒・薬物乱用防止に関する指導の手引　高等学校編、第一法規出版、1996

14）日本学校保健会編、新訂　喫煙・飲酒・薬物乱用防止に関する指導の手引　中学校編、第一法規出版、1995

V

あとがきにかえて

以上のように、今回紹介しましたのは、生徒が主体的に学習するための授業モデルとして、課題学習の展開に関する２つのモデルと、「適切な意志決定や行動選択」のためのライフスキル学習のモデル、更に「授業書」を用いた授業のモデルとであり,それぞれの特長をあきらかにすることができました。

課題学習については、解決されるべき課題として、追究するに足る課題の設定が難しいこと、また準備不足もあって不十分な追究にとどまってしまうこと、学習の共有がしにくいこと、課題学習が時間を必要とすることから基礎・基本の学習が不足しがちであること、が整理されています。また評価をいかに行うかも、中学校の先生方が悩んでおられる大きな課題であります。これらに対し、提示したモデルは、

1．「喫煙・飲酒・薬物乱用防止」単元を例とした、「課題学習での課題発見および課題設定における教師の支援法に関する研究」では、基礎・基本は講義型授業で補い、課題学習の対象を小単元にしぼること、レディネス調査やグループ別のカルテを有効に生かして課題発見・設定を導くこと、グループの追究に合わせて弾力的な支援を行うこと、を特徴とするモデルであり、生徒の追究を鋭いものにし、成果が大きいと言えましょう。

2．「健康と環境」をテーマとした、「課題発見のための準備を重視した単元計画」は単元における基礎的な知識を保証しつつ、主体的な学習へ方向づけ、かつ効果的な学習のための工夫として、課題の選び方や解決の仕方のモデルを提示し、学習の発表の際にコメンテーターを置いて積極的に意見を出させる、などにより、課題学習を成功に導いています。

3．環境教育月間の学級活動における、「授業書」方式による授業を導入に位置づけた課題学習では、インパクトのある「問題」を課題発見への橋渡しとして設定し、結果として「問題」をめぐって活発な意見交換や討論が展開され、意欲化に成果が上がったことが示され、授業書方式による導入の有効性が確認できました。

4．「適切な意志決定や行動選択」を目的とした「ライフスキル形成に基礎を置く喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育」は、新学習指導要領のポイントに正に符合するものと言えましょう。このモデルは、ブレインストーミングにより発表への意欲づけを行い、また先生自身が好ましくないコミュニケーション行動を含めて演示し、ロールプレイのモデルを示すなど、ロールプレイングに至るまでの学習を丁寧に行った後に、ロールプレイの台本作成・実行、が特徴であり、自分の意見を持つこと、それを表現することを成果として重視しています。

それぞれのモデルは生徒へのアンケートにより数値化したデータとして、また自由記述を分析して、授業としての特色を明らかにし得たと言えます。今後は、授業の内容や形態の違いに応じた評価法の開発が求められることは確かなことでしょう。

そのためにも、これらのモデルを参考として、多くの先生方が実践を広げ、また報告し合って、保健学習を発展させることが望まれます。

最後に、このモデル提示に関わって多くの中学校の先生方、また教育委員会の方々の協力を得たことを記し、感謝します。

本書は、文部省補助による学校保健センター事業として、下記の財団法人日本学校保健会に設置した「保健学習推進委員会」で作成したものである。

『　保健学習推進委員会名簿　』

＜　全体委員会　＞　（平成８～10年度）・・・職名は11年３月現在

委員長	和唐　正勝	宇都宮大学教育学部教授
委　員	赤田　信一	静岡大学教育学部助教授
委　員	大島　研一	新潟県新発田市立佐々木中学校校長
委　員	岡田　渉	千葉県教育庁学校教育部学校保健課指導主事
委　員	川畑　徹朗	神戸大学発達科学部助教授
委　員	佐藤　博志	埼玉県教育委員会生涯学習部健康教育課主任指導主事
委　員	住田　実	大分大学教育学部助教授
委　員	高橋　浩之	千葉大学教育学部助教授
委　員	友定　保博	山口大学教育学部教授
委　員	西岡　伸紀	新潟大学教育人間科学部助教授
委　員	野村　和雄	愛知教育大学教育学部教授
委　員	森　昭三	岩手大学教育学部教授

＜　小委員会　＞（平成11年度、再掲）・・・職名は12年２月現在

委員長	和唐　正勝	宇都宮大学教育学部教授
委　員	赤田　信一	静岡大学教育学部助教授
委　員	川畑　徹朗	神戸大学発達科学部助教授
委　員	住田　実	大分大学教育福祉科学部助教授
委　員	高橋　浩之	千葉大学教育学部助教授
委　員	西岡　伸紀	兵庫教育大学学校教育学部助教授
委　員	野村　和雄	愛知教育大学教育学部教授

本書の作成に当たり、文部省体育局学校健康教育課教科調査官 戸田芳雄　のほか下記の方々に多大のご援助とご助言をいただきました。

三木　とみ子	文部省体育局学校健康教育課教科調査官
鬼頭　英明	文部省体育局学校健康教育課教科調査官
北澤　潤	文部省体育局学校健康教育課専門員
石川　哲也	神戸大学発達科学部教授（前文部省体育局体育官）

新しい保健学習のモデル
中学校における課題学習、授業書方式、ライフスキル学習

平成12年２月15日　発行

発行者

財団法人　日本学校保健会

〒105－0001　東京都港区虎ノ門２－３－17

虎の門２丁目タワー６階

☎03 (3501) 3785・0968

印刷所

株式会社　廣済堂



定価 2000円